CARE World

Vol. 15 ケア・インターナショナル ジャパン Newsletter June 2010

ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREの日本事務局です。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

Contents

page 1 公益財団法人になりました ～公益認定取得のご報告

page 2-3 ハイチ地震緊急支援 ハイチ地震緊急支援活動/CAREの緊急支援Q&A

page 4 ベトナム新規事業 ～HIV陽性者とその家族のための環境作り

page 5 レソト事業終了報告

page 6 事務局からの報告 スーダン報告会／支援組織講演会／アジアの祭典／アフリカン・フェスタ

page 7 新コーナー：スタッフ紹介 私スタイルのCAREライフ

page 8 CARE Notice Board

ケア・インターナショナル ジャパンは公益認定を取得し、「公益財団法人」として再出発しました

この度ケア・インターナショナル ジャパンの財団名に「公益」の二文字が加えられ、新しい法人格を持った公益財団として再出発することとなりました。昨年2月2日付申請から丸一年、内閣府より受領した認定書（1月 28 日付）に基づき、2月1日付けで登記を完了しましたことを、皆さまに改めましてご報告させていただきます。

当財団は1987年民法上の任意団体「ケア・ジャパン」として創立され、1993年外務省を主務官庁とする財団法人格を得、2005年「ケア・インターナショナル　ジャパン」に法人名を変更しました。この間、多くの支援者や関係者の皆さまのお力添えにより発展して参りましたが、公益認定の取得は近年の重要課題となっておりました。今回の申請は、平成20年12月1日の新しい公益法人制度発足を機に行われたもので、外務省所管の国際NGOとして初めての公益認定取得となります。

また本申請にあたっては、事業の公益性はもとより、事業ならびに経営の透明性・健全性、そして迅速で適切な情報開示のもとでのアカウンタビリティの重視・徹底、さらには役員・評議員等の責任の明確化など、組織としてのガバナンス強化を図る好機となりました。

ハイチ地震をはじめ頻発する大規模な自然災害や国内外の貧困問題がクローズアップされる中、個人による国際的な課題への関心や寄付意識は高まっています。同時に、法人においても、より戦略的な CSR（企業の社会的責任）を実践する中で、パートナー（支援先・連携先）となる団体の選考は最も重要な位置づけを占めています。当財団としては、より多くの支援者の皆様に選んでいただける組織として、今後も、公益の名に相応しい活動を進めて参りますので、引き続きまして、当財団の国際協力活動に対し、ご理解ならびにご協力の程、何卒よろしくお願い致します。

理事長　数原 孝憲

重要なお知らせ

今回の公益認定取得により当財団は名実共に、公益に大きく貢献している団体として認められたこととなります。今後個人・法人の皆さまからのご寄付が確定申告の際の寄付金控除の対象となり、一定の要件の下に税制上の優遇を受けられるようになりますので、益々のご支援を心よりお願い申し上げます。詳細につきましては、ホームページもしくは事務局までお問合せください。

カリブ海に位置する国ハイチを襲った、過去200年で最大規模の地震

ハイチ地震緊急支援活動

2010年1月12日午後4時53分（現地時間）、マグニチュード7.0という強い地震がハイチを襲いました。この地震で首都ポルトープランスやその近隣の街が壊滅的な被害を受け、Léogâne（レオガン）においては街の90％が破壊されたと言われています。明確な数字は判明していないものの、300万人の人々が被災し、30万人以上が負傷、更にはハイチの人口の2％にもあたる約22万人が亡くなったと言われています。

このような状況下において支援をする側である国連機関も、102名という数の職員を失いました。首都をはじめ、多くのインフラが破壊されてしまったことで、CAREのような支援組織にとっても、物資の調達に加えて、運搬経路や燃料の確保など、活動のために必要な多くのものが揃わないという、極めて困難な状況下での活動開始となりました。

1945年から同国で支援活動を展開しているCAREハイチでは、その活動実績と専門性の高いスタッフを総動員する中、発災から4日後には食糧や水などの特に必要とされている物資の配布活動を開始しました。自然災害の発生直後は、家や家族を失くし、被災した恐怖や不安を抱え、また水や食糧など生きるために最低限必要な支援も十分に届かない人々にとって、支援物資の配布は混乱を招きやすい状況にあります。そのような中、事前にコミュニティリーダーが受取票を被災者へ配布するとともに、地元のボーイスカウトたちが深刻な怪我などで支援を受け取ることが難しい被災者のエスコートを担当するなど、CAREの支援活動のパートナーとして重要な役割を果たしました。行政はもとより、自らも被災者である一般市民の協力なしには、円滑な活動は困難だったことでしょう。

CAREはこれまでに、食糧支援、安全な水の提供（浄化剤や飲料水の配布）、ポリタンク、毛布、マットレスなどの食糧以外の必需品の配布、衛生キット、シェルターキット（住宅修復用）、新生児キット、そして妊婦のための出産キットの病院への配布などを通じ、延べ31万4,500人を支援してきました（4月2日現在）。特に、今回のハイチ地震においては、CAREの緊急支援チームの調査によって、「女性や子ども」がよりリスクの高いグループであることがわかり、彼らの支援に力を入れてきました。新生児用キットや出産キットなどの配布のほかに、今後は女性センターを設置する予定です。そして有用な情報提供とともに、支援が受けられるよう必要に応じてサービスを受けることが可能な支援組織・病院等への紹介等を実施します。

また今後CAREでは、少なくとも5年間にわたり、「緊急」「移行期間」そして「復興」までの3段階に分けて、支援活動を継続する予定です。5月以降は、緊急から復興段階への「移行期間」の支援として、生計支援、仮設住宅支援、必要物資の配布などに加えて、教育支援や女性への暴力などを防止するための啓発活動などを実施します。更には各コミュニティに対して、耐震性の強い住宅建設や予防の支援、水供給システムの復興、学校再建、保健施設の再建など、中長期の復興支援を展開することを計画しています。

ハイチ地震の被害は私たちが想像する以上に大きく、2004年のスマトラ沖地震の際の被害に匹敵するか、それ以上とも言われています。メディアを通しての報道は、発災直後に比べると、大幅に少なくなってきていますが、今もCAREや多くに支援組織によって、日々支援活動が実施されており、まだ多くの人々が支援を必要としています。もともと国の情勢が不安定だったこともあり、復興へ向けこの国の抱える課題は大きいですが、CAREはハイチの人々が地震から復興し、いずれは自立の道を歩んでいけるような支援を目指して活動を継続していきます。　（事業部　貝原塚 二葉）

ハイチ地震緊急募金に対して、個人・団体・企業など多くの皆さまから、7,363,929円ものご寄付をいただきました。またCAREとグローバルなパートナーシップを結んでいるサノフィ・アベンティス（株）様からもご支援をいただき、パトリック・ショカ社長より「壊滅的な地震に見舞われたハイチの皆さんの要望に応えることは、グローバルに事業を展開する多角的ヘルスケア・カンパニーとしての責務であると考えております。被災地の1日も早い復興のため、お役立ていただければ幸いです。」とのコメントをお寄せいただきました。この場をお借りして、ご支援いただきました皆さまに深く御礼申し上げます。

到着した緊急支援物資を、地元スカウトとともに運び出すCAREスタッフ
©Evelyn Hockstein /CARE

限られた病院・医療機材の中、多くの妊婦は妊娠そして出産に伴う合併症や高い死の危険にさらされています ©Evelyn Hockstein /CARE

CARE の緊急支援

CARE は、「女性や子ども」の自立支援を通じた貧困削減を使命に、世界 70 カ国以上の国々で中長期的視野に立った国際協力活動を展開しています。一方で、世界中で災害が後を絶たない今、65 年にも及ぶ緊急支援活動の実績とグローバルな組織としての強みを生かして「緊急支援活動」にも力を入れています。今回は、当財団で緊急支援を担当している事業部スタッフに、様々な視点から「CARE の緊急支援」について聞いてみました。

Q CARE が対応する「災害」の定義は何ですか？

2000 年から 2008 年の統計を見ると、毎年平均 329 件もの災害が発生しています。しかし、これらすべてに対応することは、実際には不可能です。そのような中、より迅速で的確な支援を行うため、CARE の現地事務所がある国や地域で災害が起きた際に、優先的に対応します。発災直後からの迅速な対応が可能だからです。もちろん現地事務所がない場合でも、被害状況が大きい場合は、近隣の現地事務所やケア・インターナショナルの緊急チームが調査に入り、支援の可否を判断するというケースもあります。

Q 災害発生から支援開始まで、どのような過程を経るのですか？

まず、発災から 24 時間以内に、被災地の現地事務所とケア・インターナショナルの緊急チームが被害状況やニーズを把握します。同時に国連や NGO などの支援組織をはじめ、現地国政府などと必要に応じて調整を行い、重複や漏れのないベストな支援活動ができるよう進めます。

Q 緊急事態には多くの国や援助機関が支援活動を行いますが、CARE の強みはありますか？

CARE は、常に「より支援が必要な人」や「支援が届きにくい地域」を最優先として活動を行います。でこぼこ道を車やバイクを乗り継ぎ、船を乗り換えてようやく辿りつけるような奥地が支援地域である場合が少なくありません。そのため当該地において、CARE による支援が最初あるいは唯一のものであることも珍しくありません。普段から地元のコミュニティや組織など、地元の人々を巻き込んだ活動をしているからこそ、緊急時において、そのようなきめ細かい支援活動が可能となるのですが、それが CARE の強みであると言えます。

Q 緊急支援において、最も重要な視点や心がけていることは何ですか？

災害で真っ先に、そしてより深刻な被害を受けやすい層の人々（お年寄りや女性、子ども、極度に貧しい人など）を最優先に支援できるよう配慮します。また、より被災者の現実に則したニーズを把握して支援ができるよう、活動の計画段階から、被災者や地元コミュニティの人々を巻き込んだ参加型の支援を率先して行っています。この際、参加する人々の男女のバランスなどについても考慮しています。

多くの人々で溢れかえるハイチの首都ポルトープランス中心部の避難キャンプ ©Evelyn Hockstein /CARE

Q 災害における人道支援は何をもって終了となるのでしょうか？

災害における人道支援を CARE は段階ごとにとらえ、支援の規模や期間をより戦略的に計画し、進めていきます。災害、特に自然災害では発災直後からしばらくの間は、医療支援や食糧、水・衛生など被災者が生きるための緊急支援を行い、そこから徐々に被災者が生活を立て直していくための復興支援へと移っていきます。最終的には、被災した人々が自らの力で生きていくこと、つまり自立することが支援の最大の目的であり、最終目標です。そうなれば災害に対しての人道支援は終了となりますが、実際にはそう単純なことではなく、被災する前からの問題が山積していたり、被災が原因で問題がより複雑化することで、さらなる支援を必要とするケースも多くあります。

Q これまでの緊急支援で特に印象に残っている出来事は？

特に発災直後の被災地では、皆が生きることに必死で、少ない物資の奪い合いや騙し合いなど、時として人間の嫌な部分を見ることもあります。しかし、それ以上に被災者である人たちが支援を届けにきた私たちに対して、精一杯のもてなしをしてくれたり、お互いに労わり合う姿を見ると、何とも言えない気持ちになります。また、取るものもとりあえず、何もないところでの生活から工夫して、そこでの新たな生活を築こうとする姿を見ると、人間の持つ生命力や生きる力をひしひしと感じます。そういう時は、「人間ってすごいな」と、彼らの持つ強烈なエネルギーを感じます。メディアを通して見る被災地は、暗い面、ネガティブな印象が前面に出ることが多いように感じますが、実際の現場はもっと明るくて活気に満ちた場所でもあり、そちらの印象の方がずっと強く感じることの方が多いです。

Q 災害が発生した際、支援者ができることは何でしょうか？

CAREでは、必要に応じて、緊急募金をダイレクトメールやホームページ等を通じて呼びかけますので、まずは寄付によるご協力をお願いします。一方、物品提供のお申出も多くいただきますが、特別な場合を除き、緊急時の物資調達は、輸送にかかる費用や日数のほか、被災地（国）の経済復興や生活文化尊重など、様々な観点から、被災地国内もしくは近隣国からの調達を原則としておりますので、予めご了承ください。

（事業部　貝原塚 二葉）

HIV陽性者とその子どもたちが安心して暮らせる環境作りに向けて

ベトナム新規事業「HIV陽性者とエイズ孤児のエンパワーメント事業」

当財団は、貧困の根源の解決に向け、様々な支援活動を実施しています。殊、ベトナムにおいては、2006年より継続して「HIV/エイズ」に焦点をあてた諸活動を通じて、最も困難な状況にある人々の自立を支援しています。今回は、2010年3月より、新たに開始した事業をご紹介します。

1 事業の背景

ベトナムのHIV陽性者が直面する差別

インドシナ半島の東端に位置するベトナムは人口約8,600万人。九州を除いた日本の面積にほぼ等しく、中国、ラオス、カンボジアと国境を接する東南アジアの国です。日本から直行便の飛行機でおよそ6時間の距離にあります。

急速に経済が発展するベトナムではHIVの感染が深刻な社会問題となっています。ベトナム保健省の統計では、全国でおよそ19万人の人々がHIVに感染していて、その数は今も増え続けています。ベトナムの1.4倍の人口を有する日本のHIV陽性者が2千人以下であることを考えると、ベトナムのHIV感染がいかに対策を急がれる問題であるかが分かります。

HIVに感染するにはいくつかの経路がありますが、ベトナムでは注射による薬物使用者や性産業従事者に感染が多く見られるため、「悪いことをした報いだ」と考える風潮があることは否定できません。またHIV感染への理解不足から、医療機関から受診を拒否されたり、HIV陽性者を親に持つ子どもたちが就学を拒否されたり、就学できたとしても他の児童と机を離されたり、遊ぶことを禁じられるという事例が数多く報告されています。

啓発用ポスターや冊子などが所狭しと並べられているHIV情報コーナー

以上の例からベトナムにおけるHIV感染の解決には、医療関係者のみならず、教育関係者、行政、HIV陽性者自身の主体的な行動が求められています。

2 事業の目標

HIV陽性者とその子どもたちに良質で親切な教育・医療サービスを

HIV感染に対する理解を深め、HIV陽性者とその子どもたちが安心して暮らせる環境を作るため、独立行政法人国際協力機構（JICA）からの支援を受けて2010年3月から18ヶ月間実施されます。事業の直接対象となるのはHIV陽性者585名、彼らの子どもたち150名、その養育者120名、および保健医療従事者640名です。またHIV陽性者の家族や教育・医療・行政の関係者を含めると、最大7,500名の人々が本事業の対象となります。

本事業は、花王（株）・花王ハートポケット倶楽部ならびにキヤノン（株）からもご支援をいただいています。

3 事業の成果

HIV陽性者自助グループと保健医療機関を通じた社会行動の変容

上記の目標を達成するため、CAREは政府機関と共同でハノイ市とホーチミン市にあるHIV陽性者自助グループを対象に、啓発教育（アドボカシー）、権利擁護、組織運営に関する能力強化のための研修を実施します。また、自助グループが主体となってHIV陽性者への偏見・差別を軽減するキャンペーンを企画・運営し、教育や医療の現場だけでなく、広く社会におけるHIV感染への理解が深まることを目指します。

HIV陽性者を親に持つ子どもたちに対しては、美術や音楽、スポーツなどを中心とした社会心理プログラムを実施する他、彼らの養育者に対して栄養管理やメンタルヘルス、権利擁護などの基礎研修を実施し、子どもたちの健全な育成をサポートします。

またHIV陽性者が適切かつ質の高い医療を受けられるよう、ハノイ市とホーチミン市の8つの医療機関にHIV情報コーナーを設置し、HIV陽性者が安心して医療を受けられる環境作りを支援します。同コーナーには保健医療の専門家の他、HIV陽性者による自助グループのスタッフも配置され、受診するHIV陽性者に対して保健医療の観点からだけでなく、社会生活における助言と指導も合わせて行います。加えて、配属されるスタッフに対しても研修を実施し、カウンセリング技法やHIV陽性者の権利に対する理解を深める活動にも取り組みます。

本事業を通してHIV陽性者の自助グループや保健医療機関が能力を向上させ、HIV陽性者やその子どもたちが偏見や差別なく、安心して教育・保健医療の公共サービスへアクセスできることを目指しています。

（現地駐在員　滝田 裕之）

プロジェクトマネージャーとしての着任にあたりJICAハノイ事務所を表敬訪問した滝田裕之駐在員（右から4人目）とCAREベトナムスタッフ

レソト「栄養改善と農村開発事業」終了報告

設立以来、主にアジアを中心とした国々での活動を展開してきた当財団が、2008年、初めてアフリカ圏での事業を実施した「レソト王国」。4月30日をもって、1つの事業が終了を迎えましたので、ご報告します。

干ばつによる食糧難や栄養不足を緩和して、自立の道へ

2007年、過去30年間で最悪の干ばつにより、人々の栄養状態が急激に悪化したレソト。当財団は、翌年4月から干ばつ被災者への緊急支援を始め、その成果をより強化・推進するために、2009年5月より、外務省NGO連携無償資金協力により開始したのが「栄養改善と農村開発事業」です。

南アフリカに360度囲まれた小さな国、レソトの中でも、アクセスの悪さから支援のあまり届いていないセンク川渓谷一帯において、世帯主が女性や子どもである家庭、HIV陽性者やエイズ患者を含む世帯など、特にコミュニティの中でも困難な立場に置かれている人々を対象に支援しました。

コミュニティ・ヘルス・ワーカーに対する栄養改善研修

地域のボランティアであるコミュニティ・ヘルス・ワーカー（以下CHW）が、子どもの栄養状態を正しく把握し、村人（主に子供たちの健康を管理する母親たち）に対して、適切な栄養指導を行えるよう、CHWを対象とした研修に力を入れました。研修への参加者は、当初予定していた50名をはるかに超え、最終的には140名となり、継続的実施を望む声が出るほど、みな熱心に取り組みました。

農業普及員の育成を通じた「環境保全型農法」の普及

また「環境保全型農法」という新たな手法を推進し、干ばつなど環境の変化に影響の受けやすい地域の人々が、少しでも多くの農作物を栽培し、微量栄養素を摂取することができるように支援しました。これは、水など少ない資源を最大限に活用しながら、メイズ（とうもろこし）や豆などを、限られた土地で効率よく生産できる方法です。

CAREのスタッフが各コミュニティから選ばれた23名の農業普及員を育成し、彼らが自分たちのコミュニティの人々に対して指導を行いました。そして352世帯の人々がこの農法を学ぶ機会を得、多様な農産物を収穫することができるようになりました。その活動や成果を見て、CAREの支援対象から外れた人々の中からも、見よう見まねで始める人も出ました。

本事業は終了しましたが、この事業を通じて新たに学んだ知識や技術が、レソトの人々の生活を少しでも改善することに役立つことを願います。

（事業部　貝原塚 二葉）

収穫されたメイズと豆

環境保全型農法で育てているメイズ畑を前に

ボランティアで構成されるコミュニティ・ヘルス・ワーカーたち

Brand　Summit報告

「女性のエンパワーメント」を通じて貧困問題に取り組むCARE

CAREでは、国際的な組織としての統一的なブランディングやコミュニケーション戦略を練るため、年に1度、当該分野に関わるマネージャーが一堂に会して、国際的なレベルで議論を深めています。今年は5月25日から4日間に渡り、北米アトランタのCARE USAにて「ブランド・サミット」が開かれ、アメリカ、ヨーロッパ、そしてアジアからは日本とインドの計12ヶ国から20人が参加しました。

会合では、「女性と子ども」に焦点を置いた事業遂行を通じて、貧困層の自立支援をグローバルに推進することが確認されたとともに、各加盟国における広報、アドボカシー、ファンドレイジング等の成功事例の共有や意見交換などが行なわれました。また、来年100周年を向かえる「国際女性の日」に向けての共同アクションの可能性などについても話し合われました。

日本に限らず、世界中には多くの国際協力NGOが存在します。その中で、これからも支援者の皆さま、そして開発途上国の受益者の声に耳を傾けながら、CAREとしての存在意義と価値をより確かなものへと確立していきたいと思います。引き続き、ご理解とご支援をお願いします。

（マーケティング部　高木 美代子）

成功事例のシェアや各国の最新マーケット情報など話は尽きない

200人以上のスタッフが働くCARE USAオフィスビル

事務局からの報告

南部スーダン「水と衛生改善事業」帰国報告会を開催

4月1日、JICA広尾　地球ひろば（東京）において、当財団がスーダン南部で展開する「水と衛生改善事業」の活動報告会を開催しました。1年間の活動を終えて帰国した事業統括責任者の荒又 多美子より、まずスーダンの概要や歴史、そして事業地の現状や課題・ニーズ等を説明。更には、CARE の活動概要と 1 年間の成果について、駐在員ならではの数多くの貴重な写真をもとに、報告しました。

参加者からは「スーダンと聞くと、ダルフール（紛争）しか考えなかったので、南部スーダンの水と衛生についての話はとても興味深かったです」「活動報告会は定期的にやった方がいいと思います」などのご意見をいただきました。当財団としても、ホームページやニュースレターに加えて、報告会やイベント開催などの企画を通じて、直接支援者の皆さまと対話が出来る機会を増やしていく予定です。

事業の進捗を説明する荒又 多美子駐在員

ケア・インターナショナル ジャパン支援組織によるチャリティ講演会

2月27日のケア・フレンズ東京による「日本外交と拉致問題／安倍晋三氏」に続いて、3月13日にはケア・フレンズ岡山による「空を見よう／石原良純氏」、また4月 17日にはケア・サポーターズクラブ熊本が「21世紀を担う子どもを育てる／アグネス・チャン氏」、そして6月22日にはケア・フレンズ札幌にて「美しく歩く／森英恵氏」を開催するなど、全国の支援組織の皆さまに、チャリティ講演会を開催いただきました。広く一般にも開かれた機会として、当財団の広報に多大なる貢献をいただくとともに、参加費ならびにチャリティ・バザーや募金活動などを通じて、たくさんのご寄付をいただきました。素晴らしい会を催してくださいました皆さまに心から御礼申し上げます。

アジアの祭典　チャリティーバザーに出展

4月14日、ケア・フレンズ東京の会員の皆さまと合同で、ANA インターコンチネンタルホテル東京で開催された「アジアの祭典（アジア婦人友好会主催）」に出展しました。カンボジア、ベトナム、パキスタンなどアジア各国の民芸品に加え、当財団の法人会員であるミマスクリーンケア（株）様には人気商品「緑の魔女」シリーズの各種洗剤を無償提供いただき、販売を行いました。参加・運営へのご協力に加えて、商品購入により当財団をご支援いただきました多くの皆さまに心より感謝申し上げます。

秋篠宮妃殿下ご臨席のもと、多くの来場者が民芸品や各国料理などの購入を通じてチャリティを楽しまれました

アフリカン・フェスタ 2010 に出展

6月12日・13日の2日間にわたり、横浜赤レンガ倉庫・イベント広場にて、「アフリカン・フェスタ 2010（外務省主催）」が開催されました。アフリカ各国大使館やNGOなどが多数参加し、アフリカの伝統音楽ライブやワークショップ、有識者によるトークショーやレクチャーなどが行われるとともに、アフリカンフードコーナーが設置されるなど、会場はアフリカ一色となりました。

当財団の出展も毎年恒例となり、今年も多くのボランティアの皆さまの参加・協力を得て、出展しました。主に、Tシャツなどのオリジナル CARE グッズをはじめ、アフリカ各国からの民芸品やルイボスティーなどの販売、そしてパネル展示などを行いました。加えて、「NGO 活動報告コーナー」にも初参加し、南部スーダンにおける「水と衛生改善事業」について多くの来場者に知っていただく絶好の機会となりました。

Hello!

新コーナー！

CARE International Japan スタッフ紹介

「ニュースレターでは、途上国での活動を中心に詳しく書かれているけれど、実際、CARE のスタッフは何をしているの？」という素朴な疑問を、多くの支援者の皆様からいただいています。そこで今号より、そのご要望にお応えして、当財団スタッフの専門業務や人となりを少しでもお分かりいただけるよう、各スタッフ執筆によるコーナーを始めます。

001
総務部
会計責任者
西 有紀子

国際協力 NGO で働いている人の中では、少し変わっている経歴かもしれません。大きな転機は2回ありました。

大学では経済学財政学専攻だったものの、かねてから勉強したかった心理学を大学院で学んだ後、いよいよ心理士として病院勤務という時に、夫の都合で渡米。これが最初の転機でした。3年ほどで帰国後、とにかく何か専門性のある仕事がしたいという理由で税理士の資格をとり、会計事務所に計6年勤務していました。勤務中に、経営が傾いていた医療法人経営の通所介護事業所（デイサービスセンター）の施設長を引き受けることになりました。これが第2の転機です。デイサービスでの仕事は想像以上にきつい反面、その面白さもまた想像以上のものでした。それまで会計事務所では個人で仕事をすることが多かったため、みんなでひとつのミッションに向かって仕事をするというのはとても楽しく、刺激的でした。3年で何とかデイサービスももちなおし、また会計事務所に戻るかというときに、自分の中でこれからもチームの中で働きたいという思いと、できれば専門性を生かして役に立ちたいという希望を両立させる選択肢を探していました。そのときに出会ったのが、公益認定を受ける直前のケア・インターナショナル ジャパンの人材募集広告でした。

CARE では今、公益法人会計に切り替わったところなので、その整備をしています。公表財務諸表はもちろん、内部管理に役立つ数字をどのように整理していくかというのは、会計事務所ではなかった視点なので面白さを感じています。税務面というよりは、現地事務所の会計処理のやりとりをどれだけスムーズに分かり易くし、それをいち早く内部管理に生かしていくかがこれからの課題です。さらに仕事をしていて楽しいのは、やはり人です。ここにいる同僚はみんな高度な専門性を持ちつつ、とても面白い人ばかり。また会計の仕事をやっていて人の役に立てる実感を持てるのもこの仕事ならではです。

会計事務所では数字は無機質で自分には合っていないと感じていました。しかし皮肉にも今、人道支援組織で数字に基づいた論理性はとても大事であると感じています。非営利組織にも戦略が求められ、そのためのツールとして数字は欠かせません。パッションとスキルの両方を求められる仕事の楽しさを、CARE に関わってくださる色んな方たちとシェアできればと思います。

私スタイルの CAREライフ

事業部インターン
今井 淑子

10 年程、米系投資ファンド等で働いてきましたが、昨夏退職し、主婦業の傍ら自分の経験とスキルを活かして少しでも社会に役立つ活動ができたら、と考えていたところ、CARE に出会いました。当初はこんなに長く続けられるとは思っていませんでしたが、皆さんとても親切なので、ついついずっとお世話になっています。

目を＄マークにして儲けを追いかける投資業界と、国際協力の世界では、価値観が 180 度違うようにも思えますが、お手伝いしていると、CARE の「寄付者の方々や企業・団体等からの大切な援助資金をお預かりし、確実な支援事業を行う」という仕事は、投資ファンドの「投資家の資金を預かって最大限の投資効果を出す」という仕事と意外に共通する点も多く、責任も同じかそれ以上に重大なことがわかってきます。

この重大な責任を果たすため、事業部では、日夜、各事業の計画から実施・完了までをしっかりと管理していることを、いつも身近に感じます。また、現地駐在スタッフの方含め、国境を軽々と飛び越えていくスタッフのみなさんの情熱とエネルギーには、いつも刺激を受けます。

私の日々の業務は、報告書作成のための翻訳や会計情報の整理のお手伝いが主な内容で、時々リサーチ的なお手伝いもさせていただいています。私にできることは限られていますが、違う業界から来てもできることがあり、何より自分の仕事が、微力ながらも支援を必要としている方々のためになると思うとやりがいがあります。

CARE Notice Board

国際女性の日（International Women's Day）
～世界各国で行われたCAREの取り組み～

毎年３月８日は、国連「国際女性の日」です。途上国において最も弱い立場にある女性や子どもたちに対する支援に力を入れるCAREにとって、特別な意味のある日でした。当財団では、インターネット上で、特にジェンダーの平等や女性のエンパワーメントに向けた事業への支援を呼びかけるとともに、常設している「I am powerful 基金」への寄付者に対してCAREの活動映像を収めたCDをプレゼントするなどのキャンペーンも展開しました。同時に、世界各国のCAREにおいても、様々な取り組みが行われましたのでいくつかご紹介します。

CAREアフガニスタン

団結力を表すために青い衣装を身に纏った約250人の人々が集まり、国際女性の日を記念するイベントが開かれました。女性を取り巻く差別や厳しい環境を模した演劇が行われるとともに、女性の正当な権利を謳った合唱も披露されました。

CAREアフガニスタンが
開催したイベントで合唱を披露した子どもたち

CAREオーストラリア

途上国の女性や女児たちが一日に歩いているのと同じだけの距離を歩く"WALK IN HER SHOES campaign"を実施しました。万歩計をつけて一日8,000歩（6.4km）。途上国の人々と同じ体験をすることによって、支援者に現状を知ってもらおうという運動です。

CAREオーストリア

世界的に著名な写真家Phil Bergesの協力を得て、自立を目指しCAREのプログラムに参加している途上国の女性たちの写真を集めた写真展を開催しました。

CAREカナダ

世界エイズデーにおけるレッドリボンの取り組みのように、人々が指に糸を結んで集まるという参加型イベントを実施しました。

CAREタイ

他の女性支援NGOなどと共同で、首相に宛てた声明を発表。またバンコク市内をデモ行進しました。特に、性と生殖に関する健康・権利を訴えるとともに、HIV陽性者や隣国からの女性の出稼ぎ労働者に対する権利を主張しました。

CAREノルウェー

CARE現地事務所と協力して「女性が暮らしにくい国ベスト10」というリストを作成し、公表しました。このニュースは40を超える国内メディアで大々的に取り上げられ、政府の関係者も言及するほどでした。

CAREパキスタン

CAREスタッフや支援者、そして受益者たちが、国際女性の日に寄せて書いたメッセージを集めるという大規模なキャンペーンを実施しました。

CARE UK

ロンドン市内で行われた"Million Women Rise March"および"Meet Me on the Bridge campaign"と呼ばれる、女性に対する暴力撤廃のための運動に参加しました。

CARE USA

CAREカナダと共同で、アフリカやアジアにおいて差別や虐待の対象となっている女性たちを追った映画"Half the Sky: Turning Oppression into Opportunity for Women Worldwide"を両国の劇場にて上映しました。

このように、「国際女性の日」に関連した取り組みは、世界各地で広まっています。しかし今もなお、途上国では、その豊かな才能を発揮する機会を与えられずに暮らしている女性たちが数多くいます。女性が持つ大きな可能性を信じて支えるCAREの活動に対して、これからもご協力をお願い致します。

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol.15
2010年6月30日発行（季刊）
発　行　人：武田 勝彦
編　　集：高木 美代子

公益財団法人 ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel. 03-5950-1335　Fax. 03-5950-1375
E-mail. info@careintjp.org
www.careintjp.org

＊このニュースレターのデザイン・レイアウトは、CAREのデザインボランティアさんのご協力により、制作されています。

CAREの国際協力活動

オンライン募金
資料請求
会員として参加するには
募金に協力するには
支援対象地域について
企業の皆様へ
CAREのブログパーツ

CAREの活動
日本のCARE(ケア・インターナショナル ジャパン)が実施する支援プロジェクト
- ベトナム
  HIV陽性者とエイズ孤児のエンパワーメント事業
- スーダン
  水と衛生改善事業
- パキスタン
  カイバル・パクトゥンクワ州初等教育向上事業
- カンボジア
  ココン州青年男女の能力向上プロジェクト

日本のCARE(ケア・インターナショナル ジャパン)が実施する支援プロジェクト

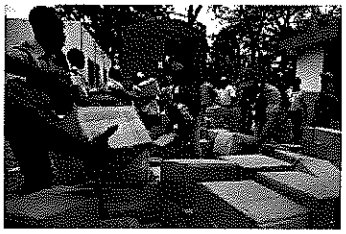
■ハイチ
「ハイチ地震緊急支援活動」終了報告

事業部 太田 裕子

期間	2010年1月15日～2010年6月30日
地域	ハイチ共和国 首都ポルトープランス 及び近郊
対象者	地震被災者
ドナー	(株)サノフィ・アベンティス、ケア・フレンズ(岡山・東京・札幌・長野)、ケア・サポーターズクラブ(大分・熊本)、個人寄付者の皆さま

事業の背景

2010年1月12日現地時間16時53分、ハイチの首都プルトープランス市郊外を震源とするマグニチュード7. 2の強い地震が発生しました。ハイチ政府の発表によると、この地震による被災者は推定300万人とされ、20万人以上が死亡、30万人以上が負傷、また約130万人が(5月11日現在)、未だに避難生活を余儀なくされています。


到着した緊急支援物資を、地元スカウトとともに運び出すCAREスタッフ
(C)Evelyn Hockstein /CARE

CAREハイチの活動は1954年から数十年にわたり継続していますが、今回の地震対応ではスタッフを増員し支援にあたっています。雨季が近付いているこの時期、とくに6月からはハリケーンシーズンとなるため、シェルターと衛生分野での支援が最優先課題となっています。

主な活動

CAREはPétionville、Carrefour、Léogâne の3つの地域で次の活動を行っています。

CAREは、食糧支援や安全な水の提供(浄化剤や飲料水の配布)のほかに、ポリタンク、毛布、マットレス衛生キット、シェルターキット(住宅修復用)などの食糧以外の生活必需品の配布、さらには初動調査にて非常に高いニーズが確認された新生児キット、そして妊婦のための出産キットの病院への配布などを実施しています。

CAREでは、今後、被災状況下で暴力など様々なリスクに晒された女性へのサポートや、父母を対象とした心理ケア・トレーニングを実施し、子どもたちが受けたトラウマ的症状について見分け、必要な場合に専門機関や団体に診てもらうことができるようにする活動、地震で被害を受けた子どもを対象にした教育支援、さらには復興支援として住宅再建、生計向上支援なども予定しています。

汚れた水が一瞬で無色透明に 路上で女性たちに水浄化剤の使い方を指導するCAREスタッフ
(C)Evelyn Hockstein /CARE

多くの母親たちは、病気や脱水症状、栄養失調などにより授乳を続けることさえ困難な状態に
(C)Evelyn Hockstein /CARE

copyright© CARE International Japan, All rights reserved
〒171-0032 東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2 TEL:03-5950-1335 FAX:03-5950-1375 e-mail:info@careintjp.org

CARE World

Vol. 14 ケア・インターナショナル ジャパン Newsletter Feb 2010

ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREの日本事務局です。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

Contents

page 1-2 スマトラ沖地震緊急支援
インドネシア「スマトラ沖地震緊急支援事業」被災地出張報告、企業の皆様からのご協力

page 3 ココン州青年男女の能力向上事業

page 4-5 新・旧事務局長挨拶

page 6 事務局からの報告

page 7 ジェンダー共生ワークショップ、私スタイルのCAREライフ

page 8 CAREストーリー スマトラ沖大地震 ～大津波災害から5年～
CARE Notice Board

スマトラ沖地震緊急支援

インドネシア「スマトラ沖地震緊急支援事業」被災地出張報告

9月30日に西スマトラでマグニチュード7.6の地震が発生。家屋の半壊や倒壊、地滑りなど、各所で深刻な被害をもたらし、同時に多くの尊い人命が犠牲となった。この地震でおよそ25万世帯が被災し、1,117名の方が亡くなったと言われているが、未だ倒壊した建物の下敷きになったままの人や、地滑りの犠牲となった人々が大勢いると言われており、その数は公表されているものよりも多いことが予想される。CAREでは、地震の発生当初より、被災地へ緊急チームを派遣して支援を開始しており、現在も継続して支援活動を展開している。

11月の下旬、地震発生から2か月近くが経過しようとしている現在の様子と、CAREの支援活動の視察をするために被災地を訪問した。当初、あまり大きな被害も目につかなかったため、それほど被害は大きくないのではないかと感じた。だが、町から離れた土地へ行けば行くほど被害が大きく、比較的町に近い場所ではその被害が分かり難かったためだった。また、一見被害を受けていないように見える家屋も、角度を変えたり、近くで見ると半壊していたり、ヒビがいたるところに入っていたりしていたが、薄暗い道を車で通り過ぎる一瞬ではすぐにわからなかったことが、そのように感じた理由であった。

今回の視察では、CAREが支援するBatang Gasang地区とSingai Gelingi地区の2か所を訪問した。この地域の75％～95％が深刻な被害を受けたと言われている。CAREのスタッフの宿舎のあるパリアマン市から支援活動をする被災地まで車で1～2時間かけて進むにつれ、倒壊した家屋の跡や、半壊して放置された家屋、支援組織から配布されたシートで覆った家、庭先にテントを張って生活をする人など、実際の状況が徐々に見えてきた。

CAREは地震発生の翌日に緊急調査チームを被災地に送り、迅速に緊急支援を開始しました

この地域は、地震発生当初は土砂崩れなどで道がふさがれ、最もアクセスの困難な場所の一つであったが、CAREは一番に現地入りし、支援を開始した。地震発生当初の調査時に、現地スタッフが「壊れた家を数えるよりも、無事に建っている家を数えた方が早い」と村人に言われたそうであるが、現在もなお、被害を受けていない家が見当たらないような状況であり、その言葉の意味がよくわかった。

Batang Gasang地区では、衛生キットを含む生活必需品などのファミリーキットを配布するとともに、住宅再建用の道具を配布している。訪問時、配布にはCAREのスタッフと地元のNGOに加え、各村からのボランティアが配布要員として参加をし、積極的に貢献する姿が見られた。配布場所では、支援物資

パダン　パリアマン地区の子どもたち©CARE/Wiwik Widyastuti

の入った箱を頭に乗せて家路へ着く人、オートバイでやって来て膝の間に箱を固定して帰る男性、箱を二つ積み上げてオートバイに二人乗りでニコニコしながら帰っていく女性たちなど、地震の影響を忘れてしまうほどのたくましさを感じた。

一方で、CAREのもう一つの活動地域であるSingai Gelingi地区にある、地震直後に発生した地滑りで大きな被害が出た村では、全く異なる光景を目にした。この地域も、開けた場所から風景が変わり、徐々に周りを森や山に囲まれ始めると、家屋の半壊、全壊が多く見られ、また、山肌が剥き出しの箇所がいくつも見られた。特に大きな地滑りが発生し、多くの人々が犠牲となった村では、そもそもの地形、土壌などの性質からなのか、連鎖的に発生したのか、村の入口あたりの山もかなり大きく崩れている様子が見られた。

林を抜けて村へ入った途端、息をのむ光景が広がっていた。発生直後の様子や、地滑りのあった場所の写真は事前に入手しており、状況を把握していたつもりだった。しかし、実際にその場所に立ってみると、改めてこの村の地滑り被害がどれだけ甚大で広範囲にわたっていたかを思い知らされた。ここでは未だ発見されていない村人も多くいるとのことで、正確な被害者数がつかめていない状況だが、少なくとも300人を超す人々がこの地滑りの直接的な被害にあったと見られている。

地滑りの被害の大きさとすさまじさに言葉を失っていると、数人の男性が私たちに近寄って来た。彼らもこの地滑りで被害を受け、そして家族を亡くしたという。ある男性は、地滑りが起きた瞬間、倒れてきたヤシの木にとっさにつかまり、そのまま流されて、大けがを負いながらも助かったという。また別の男性は、家族でテレビを見ていた際に地震が起き、慌てて外へ飛び出したが、その直後に地滑りに遭い、数百メートル先の谷まで流された、と教えてくれた。辛うじて生き延びたものの、８人いた家族は３人が残るのみで、あとの５人は未だに見つかっていないそうだ。私と一緒にこの村を訪れたインドネシア人、カナダ人の同僚たちは、いずれもこうした支援経験の豊富な人たちであったが、私を含め一様に言葉を失っていた。

現在、被災者たちの直面する問題は、これからの生活にある。どの支援組織も食糧や生活支援物資などを配布するが、一時的な支援に過ぎない。また、家を失った人々は、政府によって建てられた仮設シェルター、または自ら建てたバラックで生活をしているが、シェルターも１年間の期限付きで、その後については何ら保証がなく、将来に不安を抱えている。

広範囲にわたり地滑りが発生しました

地震発生から２カ月余り。たった2か月前の出来事である。日本では既にほとんど報道もされなくなったが、現地では今も緊急支援から復興支援に移行できていない地域もある。CAREは、そうした地域での支援を今後も継続をすることを決定しており、生活物資支援やより耐震性のある住宅再建の為のサポートなど、この地域の復興に貢献をしていく計画である。被災した人々が生活を再建するためにCAREにできることはほんの一部に過ぎないが、それでも、彼らの心の痛みが少しでも軽減され、新たな生活に向けての一歩を踏み出せるよう、強く願わずにはいられない。　　出張報告者：事業部　貝原塚二葉

企業の皆様からもご支援いただきました

当該被災地における３年間に及ぶ緊急・復興支援活動には、1,100万ドルの資金が必要であるというCAREの呼びかけに対して、世界中から多額のご寄付を賜りました。日本においても個人の皆様に加え、（株）イースクエア様、（財）茨城県国際交流協会様、インドネシア・コミュニティ・イン・ジャパン様、（株）サラスバ様、森永乳業（株）様/森乳スマイル倶楽部様をはじめ、多くの企業や団体の皆様から6,857,663円ものご寄付を頂戴しました。

また、スターバックス コーヒー ジャパン（株）様には、10月２日から10月９日までの期間中、インドネシア産コーヒー豆及びインドネシア産を一部含むコーヒー豆を対象に、その売上金の10％を救援金としてご寄付いただきました。岩田松雄代表取締役最高経営責任者（CEO）からは、「日ごろからお世話になっているコーヒー生産地の方々のためにできることは何だろうかと、日々パートナー（従業員）と考えています。ささやかではありますが、復興に役立てていただきたいと思います」とのコメントをお寄せいただきました。この場をお借りして、ご支援いただきました皆様にお礼申し上げます。

ココン州青年男女の能力向上事業

カンボジア南西の沿岸部に位置するココン州で、当財団は、青年期の男女を対象とした能力向上事業を実施しています。2007年12月から2010年11月にかけて３ヵ年計画のもと実施している当事業について、これまでの成果をご報告します。

1　事業の背景

～ココン州の青年男女が抱える困難～

ココン州は、カンボジア南西部のタイ国境近くに位置し、カンボジアの中でも貧困にあえぐ人が多い州の１つです。経済・観光開発の影響で売買春や麻薬売買も増加しており、青年男女がこれらの被害に遭うリスクも高くなっています。

当財団は、ココン州の中でも特に貧困が進んでいるスマッ・ミンチェイ郡、モンドル・セイマ郡およびボトゥン・サコー郡で活動していますが、これらの地区においては、特に青年の就学・就労機会の不足が深刻です。事業開始時の調査によると、調査対象の330世帯において、小学校卒業者は54％、高校卒業者は４％となっています。

青年が就学できない背景には、家庭の貧困があります。両親の稼ぎだけでは家計を維持できないため、青年は就学をあきらめ、両親の仕事や家事を手伝ったり、外に働きに出たりせざるをえません。そのため、多くの青年が学校を卒業できず、就労につながる技術もないため、日雇いの単純労働に従事します。

識字教室で勉強する青年たち

2　事業の目標

～青年男女の能力の向上と生活の改善を目指す～

このような困難な状況を改善するために、当事業を2007年12月より開始しました。第１の目標は、青年男女に学習機会を提供し、生計の向上を支援することです。第２の目標は、地域の大人や地方行政へ働きかけ、青年の就学・就労機会が維持できる環境づくりに協力してもらうことです。すでに、当事業は３年次に入りましたが、これまでの活動と成果を以下に紹介します。

3　事業の成果

～400名以上の青年男女が学習や就労機会を得る～

まず、１年次には、小学校を卒業していない青年を対象として、識字教室やワークショップを実施しました。373名（うち女子は280名）が参加しましたが、参加者は、読み書きができるようになったほか、ワークショップでの演習を通じて、問題分析力やコミュニケーション能力も向上しました。なお、村役場・教育局・地域の大人に対しても研修を実施し、青年の就学・就労機会を確保することや、青年が行政に参画することの大切さを理解してもらいました。

職業訓練やビジネスを開始するにあたり、社会人としての心がまえを学ぶための研修の様子

２年次の前半は、識字教室を修了した251名（うち女子は190名）がライフスキル教室に参加し、健康衛生管理・算術など、生活に必要な知識を得ました。また生計向上支援としては、就労に直結する技術を習得するための職業訓練機会を提供したほか、小規模ビジネスを起業するための訓練も行い、まずはパイロットグループとして32名を支援しました。青年たちは、現在も習得した技術やビジネスの運営能力を生かして、美容院・縫製店・バイク修理店での勤務や、自宅での食品・日用品販売などに従事しています。「技術を生かして就労し、自分でビジネスを運営できるので、責任感が向上し、自信も出てきた」という声が参加者から報告されています。

２年次の後半には、パイロットグループの32名に追加して、139名（女子118名）に対して生計向上のための支援を行いました。その他にも、青年の声が開発や行政に反映されるように、青年代表が地方行政の定例会議に参画する機会を設定しました。

現在、当事業は３年次に入りました。今後は、２年次に職業訓練や小規模ビジネスを開始した153名の青年が、就労を継続し生計を向上できるようにフォローアップを行います。そして、青年の声が地方行政に反映され、青年の生活環境が改善されるように関係者への啓発活動も継続していく予定です。

以上の通り、当事業を通じて、400名以上の青年男女に学習や就労機会を提供し、彼らの生活の質の向上に貢献することができました。当事業は、ご寄付やご助言などをくださる支援者・協力者の皆様の温かいお気持ちにより、継続できています。この場をお借りして、皆様のご支援に心より感謝申し上げます。

事務局長退任のご挨拶

公益財団法人　ケア・インターナショナル ジャパン前事務局長　野口千歳

世界中のCAREのスタッフ、関係者の方々と共に、「貧困が克服され、人々が尊厳をもって安全に暮らすことのできる、希望に満ちた、寛容で公正な世界」を目指し活動して13年。そのうちの３分の２以上を日本のCAREで過ごさせていただきましたが、特にこの６年間、お世話になりました支援者の皆様には、心より感謝を申し上げます。

CAREでの活動を振り返ると、頭に浮かぶ言葉は“CARE is about people”です。

「人」が尊厳を持って生きることができるように、「人」が潜在的に持つ能力を引き出して、「人」が自ら人生を形づくる手助けをする。「モノ」ではなく「ヒト」に焦点を置いた支援。

津波の直後、全てを失いながらも生活を立て直すことへの信念に満ちあふれた、スリランカの避難キャンプの若い女性。自分は学校に通うことができなかったけれど、娘にはなんとしても通学させたいと、勇気を出して小規模ビジネスを始めたエチオピアのお母さん。HIV陽性を宣告され一時は生きる希望を失いながらも、ほかの若者に同じ経験をしてほしくないと、仲間とエイズ予防キャンペーン活動を始めたベトナムの女性。

現場で出会った人々は、決して無力ではなく、機会さえ与えられれば自分や家族やコミュニティの人生を変える能力も意欲もある人々でした。そして「支援」をする立場にいるはずの私自身が、勇気と希望をいただくことが何度もありました。

他方、CAREの支援活動は、その意義を信じて支えてくださる「人」なしには成り立ちません。一人でも多くの「人」が世界で起きている紛争や災害、貧富の格差、差別や偏見について知り、関心を持ち、行動することによって、世界が変わっていくのです。

日本で出会ったボランティアやインターン、支援組織（ケア・フレンズやケア・サポーターズクラブ）、企業や政府関係者の方々、NGOの仲間、そして会員や寄付者の皆様。それぞれが違った立場で、しかし究極的には同じ目的を持って私たちと共に活動をしてくださった有志の皆様からは、何度も激励を受けました。

CAREという一つの国際NGOを通し、世界中の「人々」がつながり、力を合わせて活動する素晴らしさを体験させていただくことができたのは、とても光栄でした。

お陰様で、この６年間でケア・インターナショナル ジャパンは、事業規模を３倍に伸ばし、アジアからアフリカに活動を広げ、緊急・復興支援に対応する体制を強化することが出来ました。また、ガバナンス改革を行い、念願の公益認定を取得することができました。しかし、まだまだ課題はたくさんあります。

新事務局長の武田勝彦の下、新体制で様々なチャレンジに挑んでいく予定です。是非、今後とも、皆様の一層のお力添えをいただけますよう、心よりお願い申し上げます。

スリランカの事業地にて（中央が野口前事務局長）©HarshaDeSilva

６年間お世話になり、本当に有り難うございました。

最後になりましたが、皆様のご健康とますますのご発展をお祈り申し上げます。

事務局長就任のご挨拶

公益財団法人　ケア・インターナショナル ジャパン事務局長　武田勝彦

2010年1月より、当財団の事務局長に就任することになりました。どうぞよろしくお願い致します。就任にあたり、3つのことをお話したいと思います。日本におけるNGO事情、公益法人改革、そしてCAREの特徴についてです。

私がNGOを通して国際支援に携わるようになって15年程が経ちます。私が日本のNGOに従事した頃は、まだNGOへの理解は低く、「政府の国際支援と違うのですか」「ボランティア（無給）で大変ですね」などとよく言われました。しかし、阪神・淡路大震災でのボランティアや市民組織の活躍があり、その後の「特定非営利活動促進法（NPO法）」の整備により日本社会のNGO観もかなり変わってきました。日本の特殊な寄付文化事情から財政基盤が弱く、一般企業のような給与水準ではないものの、海外のように、NGOでプロとして給与をもらって働く人々が増えてきました。それでもまだまだ寄付文化を変えて、NGOの財政基盤を改善していく必要があります。政府からの委託金や助成金に頼り、事業を実施することは可能です。しかし、そのような組織が、市民団体と呼べるかは疑問です。当財団の向かう方向は、欧米のような市民が支える団体になることでしょう。CAREは世界有数のNGOで、20年以上にわたり、日本においても国際的なネットワークをもつ「国際NGO」として活動してきました。一方で、「日本のNGO」としての認知が十分ではないと実感しています。日本の団体である以上、日本の人々に支えられた日本の市民団体として認知されるべきでしょう。当財団が、国際的なネットワークを活かした「国際NGO」という側面と、「日本の市民組織」という側面を兼ね備えた組織になるように努力していきたいと考えています。

次にお伝えしたいのは、公益法人改革という大きな流れです。私は、NPO法施行後に、任意団体をNPO法人化する業務を経験しました。ゼロから法律上の組織としての体裁を築き上げるには、様々なしがらみがあり、本当に大変な作業でした。特に、会計システムの導入では非常に苦労しました。そして、なぜか今、公益法人改革による「公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律」に基づいて、当財団で公益財団法人化に関わっているのは、とても不思議な感じがします。NPO法人化の時は、会計、労務、組織運営などを整備する絶好の機会となり、結果的に組織をより良くすることにつながったと実感しました。公益財団法人への移行も、コーポレートガバナンスを改善することに役立っています。公益法人というと、「天下り、無駄遣い、社会悪」という悪いイメージが一部にあります。しかし、当財団のように、設立当時の法の未整備で、財団法人や社団法人という法人格を選んだNGOも多々あります。民間でも健全に公益事業を行えるということを世に示していく役目があります。役員・評議員と事務局職員と支援者が力を合わせて公益財団法人化がはらむ課題に取り組み、解決していけるように調整していきたいと思います。

パキスタンの事業地にて（右端が武田事務局長）

そして、最後にお話したいのが、日本の国際支援において、当財団の存在意義は何かということです。CAREの特徴は、他の多くの支援団体と比較して、次の3つに集約されます。まず、①支援の行き届いていない地域、ほかの援助機関が行かないような地域でも、支援が必要であれば、可能な限りそこに支援を届ける点です。援助の現場では、ロジスティクス（輸送手段）の点からどうしても首都や大きな都市、あるいは主要幹線道路に近い場所を支援対象地に選定する傾向があります。しかし、そのような場所から離れた所の方が、ニーズが高く支援サービスが求められています。次に、②支援を必要としている人に、確実に支援が届くようにする点です。サービスは提供するだけではなく、そのサービスが本当に役立っているのか確認することも重要です。支援実施後のフォローアップや定期的な視察などのモニタリングや評価を行い、確認作業を必ず実施します。また、支援サービスを受け取る方々（受益者）にも支援のサイクル（準備・計画、実施、モニタリング、評価）に積極的に参加してもらうことで説明責任と透明性を確保しています。最後に、③包括的支援を行っている点があります。団体によっては、ある分野に特化したところもありますが、CAREは様々な分野の支援活動を実施しています。最近の区分では、「農業と自然資源」「教育」「保健」「HIV/エイズ」「栄養」「経済開発」「水と衛生」などに分かれています。そして、気候変動に対する取り組みが近年は大きな課題としてあがっており、戦略的な取り組みを検討しているところです。これらの特異性を多くの方々に伝えて、新たなご支援やご協力を得ることに力を注ぎたいと思います。

今ある課題を克服し、CAREが日本で愛され、その使命を全うするように、支援者の皆様、一般市民や企業の方々をも巻き込む活動の将来像を描いています。このニュースレターを読まれた方々のご理解とご協力を賜りますよう、どうぞよろしくお願い致します。

事務局からの報告

スマトラ沖地震緊急支援に対するチャリティのご報告

12月5日に六本木のアークヒルズカフェでインドネシア・コミュニティ・イン・ジャパン主催のチャリティ忘年会が開催されました。当日は、CAREの団体概要とともに、寄付の活用方法について、11月末に現地視察から帰国したばかりの事業部職員よりご紹介をしました。また現地で撮影した写真パネルも会場内に多数展示し、最新の現地被災状況ならびに「スマトラ沖地震緊急支援事業」について、多くの皆様に改めて知っていただく貴重な機会となりました。

当日は、悪天候の中、127人もの方にご参加いただき、参加費の20%を同事業にご寄付いただくとともに、一部の参加者からは、追加でのご寄付も頂戴し、善意のご寄付は合計で172,000円となりました。改めまして、本チャリティの企画ならびに参加を通じて、ご支援いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

小中学生による事務局訪問

12月3日に武蔵村山市立第一中学校の生徒6名、12月11日に戸田市立芦原小学校の生徒10名、また12月15日には東京学芸大学付属国際中等教育学校の生徒2名の事務局訪問の受け入れを行いました。

各校の児童・生徒のみなさんは、事前学習に力を入れ、多くの質問を準備して来訪されました。職員によるプレゼンテーションの最後には全員が「私たちにできることは何ですか」と自分のこととして国際協力を捉えた質問を投げかけてくれました。また訪問後には、児童・生徒のみなさん全員から、感想と温かい励ましのお手紙をいただきました。

戸田市立芦原小学校の児童に説明する事業部職員

「TOKYO DESIGNERS WEEK 2009」チャリティ・オークションのご報告

10月30日から11月3日の5日間開催された「TOKYO DESIGNERS WEEK 2009」において、SPiCE-UP!様、DESIGN ASSOCIATION NPO様、プーマ ジャパン株式会社様の共催により、「GREEN」/「AFRICA（2010年PUMAブランドテーマ）」をテーマにしたチャリティ・プロジェクトが実施されました。カスタマイズフィギュア「MUNNY」をキャンパスに、様々なジャンルのクリエイター、デザイナー、アーティスト、ミュージシャンが制作した世界で1点の作品（計37作品）を、会場のコンテナ展にて展示するとともに、Yahoo! JAPAN様の協力により、インターネットオークションを同時開催しました。多くの方のご参加によりすべて落札いただき（総額586,672円）、レソトにおける「栄養改善と農村開発事業」をご支援いただきました。

お知らせ

～2月1日より、個人・法人からの寄付金が「寄付金控除」の対象となります～

ケア・インターナショナル ジャパンは、2月1日に「公益財団法人」として登記しました。

2月1日以降に頂戴した寄付金は、確定申告・決算の際に、特定寄付金として「寄付金控除」の対象となります。貧困の根源の解決に向けたケア・インターナショナル ジャパンの活動をサポートしていただくことで、所得税・法人税が軽減されます。詳細については、事務局までお問い合わせいただくか、当財団ホームページをご覧ください。

ジェンダー共生ワークショップ

当財団は、2009年10月より文部科学省ニーズ対応型地域研究推進事業「共生人道支援研究班」、地域研究コンソーシアム「社会連携研究会」および（特活）難民を助ける会と共催で、「ジェンダー共生ワークショップ」を開催しています。その概要および人道支援とジェンダー（注1）の関連性についてご説明します。

ワークショップの概要

たくさんの参加者の方が、活発に意見交換をされました

当ワークショップの第1の目的は、ジェンダーに配慮した人道支援の実践に向け、ジェンダー主流化（注2）について学ぶ機会をNGOに提供することです。第2の目的は、ジェンダーに関する地域研究者と実務家との連携を促すことです。ワークショップは5回のセッションで構成され、既に3回が終了しました。第1回では、NGOによるジェンダーに配慮した事業の実践状況や、研究者と実務家との連携について検討しました。そして第2回では、人道支援活動でのジェンダー主流化の方法、第3回では、開発支援とジェンダーについて討議しました。

人道支援とジェンダー

次に、人道支援とジェンダーとの関連について説明します。例えば、多くの国で、自然災害の犠牲者は女性が男性よりも多くなっています（注3）。女性が男性に比べ体力が弱いことや、家族の世話があるため避難が遅れることなどがその原因です。それだけではなく、女性が災害から生き延びても、避難所で性的暴力に遭うという危険性もあります。

このような深刻な状況の解決のために、女性と男性のジェンダー関係に配慮して、人道支援活動を行う必要があります。例えば、村の女性やNGOの女性職員が、災害時の避難所設置計画の策定や実施に従事することで、女性のニーズに配慮した支援ができるようになります。また女性の健康に配慮した女性用トイレの設置や、避難所における性的暴力防止のための女性専用の避難所の確保なども実施できます。さらに、女性が防災や救援活動に積極的に関与する様子を確認することで、地域の男性たちが、「女性は、家事だけではなく地域のための重要な役割も担っていけるのだ」という認識を持つようになるなど、ジェンダー意識の変化を促すきっかけにもなります。

以上の通り、ジェンダーに配慮した人道支援の実施は、災害における女性への被害を軽減すると同時に、女性の能力育成や、ジェンダーによる偏見軽減にも貢献するといえます。この「ジェンダー共生ワークショップ」への参加を通して、多くのNGOが、ジェンダーに配慮した人道支援を実施しうるようになることを期待しています。

注記1：生物学的性別に対して、社会や文化的に形成されてきた性別（田中由美子著「ジェンダーと開発」による定義）

注記2：あらゆる政策・施策・事業等にジェンダーの格差解消の視点を組み入れること

注記3：インド洋大津波（2004）のためインドネシア北アチェでは女性死者数は男性死者数の3.5倍。阪神大震災（1995）では女性死者が男性死者の1.35倍。

私スタイルのCAREライフ

インターン
アーニー・チェン

メールマガジン会議にて（左側の男性）

来日は4回目ですが、今回の目的は「観光」ではなく、日本人の「一般的な生活」を経験することでした。東京でいろいろなボランティア団体を訪問し、最終的にCAREを活動先として選びました。

私は、カナダで10年間ITコンサルタントとして働いており、母語が英語、そして短期滞在で来日しているという特殊な状況にも関わらず、今回CAREで働く機会を得ることができました。当初ボランティアとして応募しましたが、ITの知識があったので、インターンとして活動に参加することになりました。そして、私の主な仕事はウェブサイトを作ることでした。

ある日の作業は、急遽、大量の「careギフト」チラシを封入発送しなければならないというものでした。締め切りに間に合うよう、一時的に事務局にいるスタッフも総出で作業しました。そのチームワークと事務局内の温かい雰囲気に、CAREの活動に加わって良かったと思いました。

また、スタッフの方の話す英語の方が、私の日本語よりも上手なのに、全員がいつも日本語で話しかけてくれました。私の日本語の練習のために！

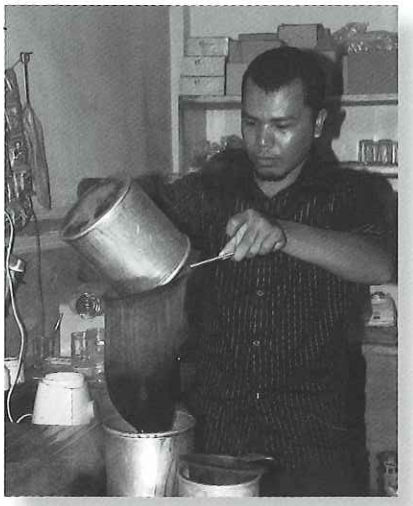
短い間でしたが、日本の職場経験をしたり、日本語を練習したり、CAREの国際協力活動についてたくさん学ぶことができました。より多くの方がCAREのことを知ってくださること(ウェブサイトを見てください！)、そしてCAREが素晴らしい活動をさらに発展させることを祈念しています。ボランティアに興味を持っている方は、是非CAREに連絡してみてください。

CAREストーリー

スマトラ沖大地震

～大津波災害から5年、現地からの報告～

インドネシア共和国のスマトラ島最北端の州都Banda Acehは、2004年12月の大津波で壊滅的な被害を受けた町です。これまでの5年間ずっと、この町の人々は復興・再建に向けての取り組みを続けてきました。



Eri Arfian（26歳）。経営するカフェ"Milanisti"にて

町の一角に、Eri Arfian（26歳）が経営するカフェがあります。5年前のあの日曜日の朝、巨大な力を放った津波はEriが人生で得たもの全てを流し去ってしまいました。家族と暮らした家、幼い頃から大切にしてきたもの、そしてもう一つ何よりも耐えがたいものを失いました。彼の母親です。

津波の後、Eriは父親とバラックで暮らし始めました。学業を断念せざるを得なくなり、建設作業員として働き続けながら2008年10月、CAREのYouth Projectを通して、サービス業の無料研修を受講しました。そしてプロの料理人から、地元料理や外国の料理の調理方法を学びました。Eriは、学んだ知識と限られた資金を元に、9カ月前に屋台を始めました。CAREから冷蔵庫、台所道具や食器などの支援を受け、Eriと仲間たちは自宅兼カフェとなる物件を借り、カフェ経営、ケータリングサービスなどを始めました。事業は軌道に乗り、今では月収500万インドネシアルピア（450米ドル）の収入を得ています。

「今でも夜中、ベッドで横になっていると母親のことを思い出すことがあります。5年たってもなお、とても辛いですが、前を向いて生きようと思っています。」Eriは静かに深呼吸をしながら語りました。

津波が大きな被害をもたらした直後、CAREは350,000人に緊急支援を行い、非常食や飲み水、その他の必要な物資などを配布しました。その後何年も、CAREはAchehの住民と共に被災者の生活再建に向けて再建・復旧活動を実施してきました。

「5年前、僕は全てを失いました。再び何かを手にすることはできないと思っていました。今は精いっぱい毎日を生きています。」

当財団ウェブサイトでは、CAREが実施している事業に関連して、特に「人」にフォーカスを置いたストーリーなどもご覧いただけます。

http://www.careintjp.org/

CARE Notice Board

私も「careギフト」を応援しています！
～女優・木村佳乃さん～

贈った私も、受け取った友だちも、子どもたちも笑顔になる、素敵なギフトです。

女優　木村 佳乃さん

映画に舞台にと、幅広い活躍を見せる本格派女優の木村佳乃さんから、この度、CAREのオンライン寄付システム「careギフト」へのメッセージをいただきました！木村さんは、以前、「スマトラ沖津波復興支援 学校における子どもの心のケアプロジェクト（スリランカ）」の活動報告ビデオのナレーションにご協力いただいて以来、CAREの心強いサポーターです。

木村さんがおっしゃる通りcareギフトは、ギフトを贈った自分、そしてカードを受け取った身近にいる大切な人（友人・家族など）、そして支援というギフトを受け取った現地の人々など、世界中でいろいろな人を笑顔にすることができます。身近な相手を思いやる温かい気持ちが、世界中に広がっていく――本当に素敵なことです。

木村さんの知的なイメージや清潔感、そして何より凛とした女性像は、まさにCAREが目指す「女性のエンパワメント」、そして彼女たちの自立した姿を象徴しています。careギフトでは現在、3月8日の「国際女性デー」に向けたキャンペーンを行っています。これをきっかけに、世界中で困難な状況に立ち向かいながら力強く生きる女性たちについて、今一度お考えいただき、彼女たちに対する温かいご支援をお願いします！

「careギフト」のURLはwww.caregift.jpです

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol.14
2010年2月28日発行(季刊)
発　行　人：武田 勝彦
編　　集：安部 桂花

公益財団法人 ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel . 03-5950-1335 Fax . 03-5950-1375
E-mail . info@careintjp.org
www.careintjp.org

*このニュースレターのデザイン・レイアウトは、CAREのデザインボランティアさんのご協力により、制作されています。

CARE World

Vol. 13 ケア・インターナショナル ジャパン Newsletter Oct 2009

ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREの日本事務局です。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

Contents

page 1-2 ベトナムHIV/AIDSと人権プロジェクト

page 3-4 パキスタン緊急人道支援
パキスタンで大規模な国内避難民が発生、「緊急支援」における企業の戦略的フィランソロピーの可能性

page 5 事務局からの報告
バナナを食べて社会貢献！「富楽宝(ブラボー)」ブランド祝1周年／「水」をキーワードに、新・企業連携スタート！／「日本モーツァルトコーア」によるチャリティ演奏会 in Tokyo & Paris／レソト支援のためのチャリティコンサートが開催されました／ケア・フレンズ長野発足

page 6-7 スーダン水と衛生改善事業
スーダン南部・水と衛生緊急支援事業、スーダン支援の現場から

page 8 CAREストーリー
～グルジア紛争－あれから一年～、CARE Notice Board

「HIV/AIDSと人権プロジェクト」

ケア・インターナショナル ジャパンは、国際ボランティア貯金および民間企業（花王株式会社様およびキヤノン株式会社様）のご支援を受け、HIV陽性者の人権が尊重され、偏見や差別をなくすことを目指し、「HIV/AIDSと人権プロジェクト」を実施しました。2007年6月から2009年10月末まで、ベトナムのハノイ市、ホーチミン市、クワン・ニン県で実施された同事業の対象者はHIV陽性者、医療従事者、地方行政担当・政策策定者など約5,000名でした。

事業の背景

ベトナムはHIV感染者数の増加が著しい国の一つとされています。注射器の使い回しによる薬物使用者、性産業従事者、その顧客などの間での感染率が高い傾向があります。経済や観光開発が進むハノイ市、ホーチミン市、クワン・ニン省は、薬物の流通や性産業が多くあることに起因し、ベトナムの中でもHIV感染が特に深刻な地域となっています。

さらに、近年はHIV感染リスクの高いグループのみではなく、HIV陽性の夫から妻、そして母から子どもへというように、家族内のHIV感染の増加も確認されています。

また、ベトナムでは、HIV陽性者に対する偏見や差別が強く、そういった社会の否定的な態度により、HIV陽性者や家族が適切な医療や社会サービスを受けられないという状況もあります。例えば、HIV陽性者が病院で治療を希望しても受診を拒否される、他の患者とは異なる入院服を着用させられ、HIV陽性者であるということが一目で分かるようにさせられる、不当に高い治療費を請求される、など差別を受けます。教育現場では、HIV陽性の親をもつ子ども、HIV陽性の子どもの就学が拒否されるという事例が多くあります。職場では、HIV陽性者という理由で解雇される人が多くいます。その他、地域社会での差別も深刻です。HIV陽性者がいる家族には挨拶をしない、近寄らない、隣に座らないということが頻繁に起きています。

事業の目的・内容

このような偏見や差別をなくし、HIV陽性者が良質の医療サービスを受け、仕事を継続し、HIV/エイズの影響を受けた児童・生徒が就学できることを目指し、「HIV/AIDSと人権プロジェクト」が開始されました。当事業では、第一に、HIV陽性者自助

中学校でのＨＩＶ予防啓発イベントで歌をうたう生徒たち
（後ろの横断幕には「ゆうちょのご支援をいただいています」と書かれています）

グループの能力向上研修を実施し、HIV陽性者自身が、自分たちの医療、教育、就業などの基本的な権利を擁護するためのアドボカシー活動を企画・実施できるように支援しました。第二に、医療関係者のHIV/エイズに関する知識を向上し、ベトナム政府が制定したHIV/エイズ法について指導し、彼らがHIV陽性者の人権について理解を深め良質なサービスを提供できるよう研修等を行いました。その他、医療・教育・労働問題に関わる地方行政担当者を養成する政策学校においても、HIV/エイズとHIV陽性者の権利について指導し、地方行政におけるHIV陽性者への差別をなくすことを目指しました。

活動の成果

①HIV陽性者自助グループメンバー460名が研修に参加し、その後主体的に権利擁護活動ができるようになりました。自助グループはHIV感染予防やHIV陽性者の権利を促進するためのイベントを27回開催し、10,210名の参加者を得ました。さらに、アジア太平洋地域のHIV陽性者自助グループとの連携のため、「アジア太平洋地域HIV陽性者ネットワーク」にも参画しました。

ＨＩＶ情報コーナーでカウンセリングを行う自助グループメンバーの様子

ＨＩＶ情報コーナーで啓発教材を配布している様子。ＨＩＶ陽性のスタッフも勤務しています

②医療関係者240名が研修に参画し、HIVの感染経路に関する理解を深め、院内感染を防ぐための普遍的予防策についての知識を得ました。HIV陽性者の権利についても認識が高まり、HIV陽性者へ良質なサービスを提供できるようになりました。ハノイ市の３つの病院では、HIV情報コーナーを設置し、HIV陽性者へのカウンセリングや情報提供を行っています。

③地方行政官・政策策定者259名が研修に参画し、HIV陽性者の権利について知識を得ました。さらに、HIV陽性者、地方行政官、政策策定者の対話ワークショップも開催し、HIV陽性者の社会的ニーズについての認識を深めました。

また、HIV予防とHIV陽性者への差別をなくすことを目的としたポスターを作成し、医療機関や行政機関へ配布しました。さらに、医療関係者や行政官を対象としたHIV/エイズと陽性者の人権尊重に関するブックレットも作成し配布しました。

事業実施後の変化

以上のような活動の結果、多くの改善が報告されました。例えば、HIV陽性者からは、「差別無く病院で治療を受けられるようになり、医師や看護師の言葉遣いや態度が友好的になった」との報告があります。HIV陽性者の家族によると、「これまで近所の人々から無視されていたが、当事業によるアドボカシーイベントの実施後は、近所の人から無視されることがなくなり、積極的に話しかけられるようになった」とのことです。なお、政策策定者は、「これまでは悪いことをする人がHIV陽性者になると思っていたが、HIV感染経路をよく知り、HIV陽性者の権利も国家法で保障されていることを理解したら、今まで偏見を持っていたのが間違いだったと気づいた」と述べています。

事業終了後の課題

この事業は、2009年10月末をもって終了しましたが、今後もHIV陽性者によるアドボカシー活動は継続される予定です。HIV陽性者自助グループは、自分たちで活動資金を調達し、学校や公共施設でのアドボカシーイベントを開催することを計画しています。病院におけるHIV情報センターも継続し、今後もHIV陽性者のカウセリングや情報提供を行う予定です。政策学校における、地方行政官へのHIV/エイズと人権に関する講義も継続して実施されることが期待されています。なお、当事業で得た教訓を活かして、HIV陽性者グループおよび保健医療従事者の能力育成、そしてHIV/エイズの影響を受けた子ども達の支援にフォーカスをおいた新規事業も計画しています。

（事業部　尾立 素子）

パキスタン緊急人道支援

パキスタンで大規模な国内避難民(※)が発生

「国内避難民」は紛争や災害などのため家を追われて避難生活を強いられる人々。同様な状況で国境を越えて逃れる人々は「難民」。

2009年4月26日、パキスタン軍による武装勢力の掃討作戦が始まりました。北西辺境州内の3県（ブネール県、スワート県、アッパーディール県）で、500万人以上が家を追われ避難民となりました。このうち190万人は最初の3週間に発生した避難民でした。短期間にこれほど大規模な避難民が発生したのは世界的にも過去15年間になかったことです(5月28日付国連の文書)。避難民は、同州マルダン県、スワービ県、マラカンド県、ノウシェラ県、チャルサッダ県、ローワーディール県、ペシャワール県を中心に避難生活を送っています。

当初、6県で26の避難キャンプが設置されましたが、急増する国内避難民の流入に対処できる状況ではなかったため、キャンプ外の受け入れ家族(親戚や知人や親切な他人など)の下で避難生活を送る人々が圧倒的に多くなりました。避難先は10%が避難民キャンプ、残り90%が受け入れ家族、学校、路上でした。

中でも、北西辺境州マルダン県（ペシャワールより北西70km、首都イスラマバードより車両で1.5時間）は安全な地域への避難ルートに最も近い県なので、避難民の60%が滞在していました。同地域には4つの避難民キャンプがあり、キャンプの外にも、188,859世帯（1,510,872名）が避難民として登録されている状況でした（5月28日現在、社会福祉省および北西辺境州)。

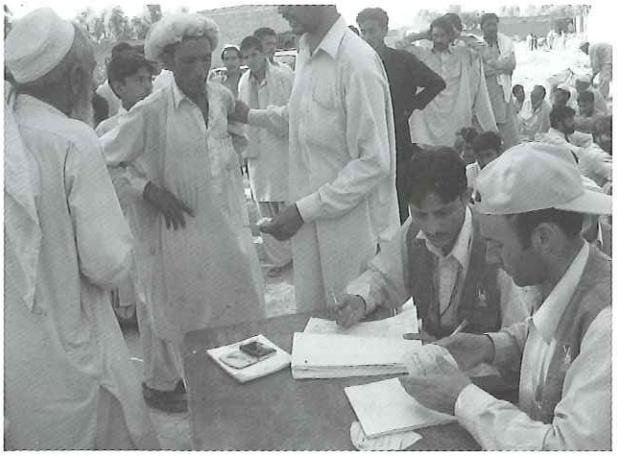
そこで、ケア・インターナショナル ジャパンは、緊急支援活動の一環として、（特活）ジャパン・プラットフォームの助成金により、登録されている避難民が最も多く、緊急支援物資の配給が急務であるマルダン県において支援活動を開始しました。NGOや国連機関、政府組織との連携・調整のもと、3,000世帯（約21,000名）を対象に、現地ニーズの最も高い物資を現在配布しています。配布物資は、蚊帳、床用シート、台所用品、衛生用品、虫除け、女性用ショール（注)、10リットル用水保存タンク、20リットル水用保存タンクです。

一番必要とされる物資なので、連日蒸し暑い中でも、多くの人が殺到し、支援物資をもらうために行列をつくります。物資を受け取る世帯は、受付で登録を確認してから番号の付いた引換券を受け取り、ずっと順番を待ちます。物資配布担当者（避難民から選ばれたボランティア）が10世帯を対象に、10個の物資セットの山を作ります。引換券の番号と名前が読み上げられると、その世帯は物資の山を受け取り、物資運搬担当者（避難民から選ばれたボランティア）の助けを借り滞在先まで帰っていきます。そして、10世帯分が終了したら、また物資配布担当者が物資セットの山を10個作るという作業が繰り返されます。蒸し暑い(気温45～47度)だけでなく、避難民にとっては様々なストレスが溜まりやすい状況下で、混乱を避け公正に物資がいきわたるよう、現地スタッフ・避難民ボランティアは根気強く対応しています。

(注)　外部者（男性）の目をさけるための女性・子ども用区間をつくるのにも活用。

（事業部　武田勝彦）

支援物資を受け取る男性。CAREはニーズの高い物資を配布しています


引換券を確認して物資を配布します

プラスティックシートの上で寛ぐ家族

「緊急支援」における企業の戦略的フィランソロピーの可能性

今年4月に発生したパキスタンにおける緊急事態（状況詳細ならびに当財団の国内避難民支援活動の内容については、前頁参照）に際して、当財団は、直ちに個人・企業の皆さまに広く募金を呼びかけるとともに、別途、複数の企業に対して、「自社商品」の提供とその「輸送費」の支援をお願いしました。

程なく、フレッシュハンドメイドコスメを取り扱い、独自にエシカル（※）な活動にも力を入れる（株）ラッシュジャパン様により、石鹸提供のお申し出をいただきました。そして、同社エシカルコミュニケーションチームをはじめ、石鹸の製造、輸出手配、広報など、部署を超えた多くの社員の皆さまのご協力のもと、全3,387個の石鹸（総額1,924,460円相当）を、無事現地に届けることができました。また、同社には厚木の自社倉庫から現地パキスタン活動地への陸上輸送費ならびに通関関連費用の全額をご支援いただきました。

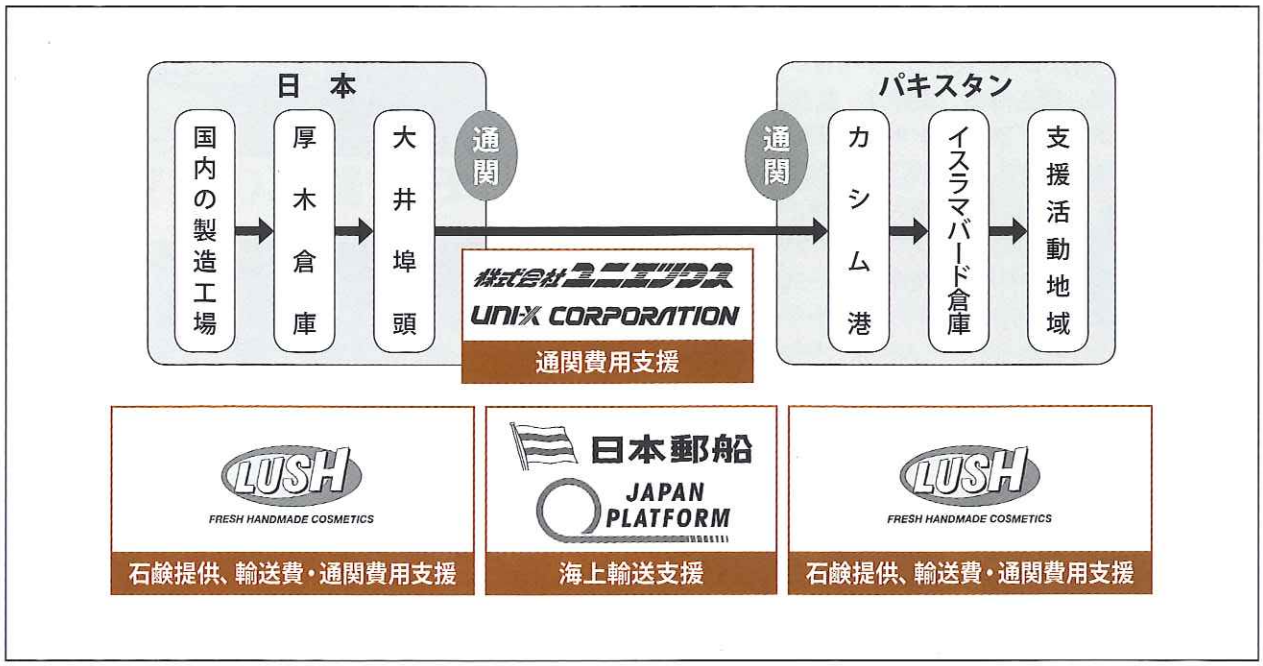
ポップでカラフルなラッシュジャパン様の石鹸
※イメージ写真で、実際に現地に届けられた石鹸ではありません。

加えて、NGO、政府、経済界、メディア等による対等なパートナーシップのもと国際人道支援を行う、ジャパン・プラットフォーム（JPF）様の仲介により、日本郵船グループ様をご紹介いただき、大井埠頭からカシム港までの海上無償輸送に加え、同社グループで通関業務を担当した株式会社ユニエツクス様には、通関料割引のご支援をいただくことができました。海運業を中心としてさまざまな輸送ネットワークをグローバルに展開している同社だからこそできる、まさに自社の強みを生かしての取り組みとなりました。

この場をお借りして、関係者の皆さまに深く感謝申し上げます。

1945年の設立以来、緊急支援活動の実績が豊富で、国際的にも評価と信頼をいただいているCAREを通じての支援により、被災地における支援活動の効果を最大化することができます。また、現地政府との良好な関係に加えて、CAREは国際的なメディアの取材なども多くうけることから、特に支援企業にとっては、現地国ならびに国際社会における自社のプレゼンスを高めることができるなど、副次的メリットもあります。世界各地での天災・人災が絶えない今、CAREでは、緊急・復興支援に力を入れており、今後もより多くの個人・企業の皆様にご支援いただきたいと願っています。

※「エシカル」な活動とは、「倫理的・道徳的」という意味になりますが、ラッシュジャパンでは環境や社会に配慮し、他を尊重する、という活動を指しています。



（石鹸支援の流れ：ケア・インターナショナル ジャパン作成）

事務局からの報告

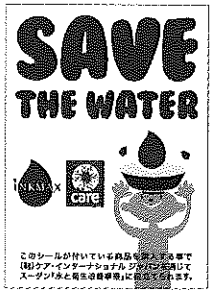
バナナを食べて社会貢献！「富楽宝（ブラボー）」ブランド祝１周年

2008年10月にスタートした、丸紅（株）様の輸入果実ブランド「富楽宝」が１周年を迎えました。多くのお客様の支持を得て、同社は、フィリピン産バナナに加え、夏季限定の台湾産マンゴーでも同ブランドを展開。総額6,368,352円（2008年10月～2009年9月分）ものご寄付をいただきました。この場をお借りして、全国の店頭でお買い求めいただいた皆さまをはじめ、丸紅（株）様、そして（株）ダイエー様ほか当該ブランドをお取り扱いいただいている多くの小売店各社に心より感謝申し上げます。これからも、お買い物を通じて、「女性」のエンパワーメントに焦点を当てた事業への継続したご支援をお願いします。

「水」をキーワードに、新・企業連携スタート！

7月1日より、（株）インクマックス様のご支援により、染色時の水やエネルギー消費の大幅な削減を実現する、地球にやさしい超微粒子顔料「uni COLOR ink」の売上の一部を、南部スーダンにおける「水と衛生改善事業」にご寄付いただいています。最新の繊維染色技術を利用して、プレオーガニックコットンを素材とするTシャツやトートバックなど、様々な商品が生まれています。「SAVE THE WATER」のタグが目印です。ぜひ、同社のホームページ（http://www.inkmax.co.jp）にてお買い求めください。

シール



写真左：7/18～20の3日間、デックス東京ビーチ（東京・台場）にて開催されたプレオーガニックTシャツ展示即売イベント
写真右：このステッカーが目印

レソト支援のためのチャリティコンサートが開催されました

8月7日、イタリア文化会館（東京・九段南）にて、アフリカ南部のレソト支援を目的に、リトル・バイオリニスト事務局主催のチャリティコンサートが開催されました。同国において「栄養改善と農村開発事業」を実施する当財団は、後援団体の１つとして参画。当日はパネル展示をはじめ、CAREオリジナルグッズの販売等を行いました。グローバルに活躍されるバイオリニスト、天満敦子様によるバイオリンをはじめ、クラシック音楽を存分にお楽しみいただくとともに、多くの皆さまに「レソト」を知っていただく機会となりました。

「日本モーツァルトコーア」によるチャリティ演奏会 in Tokyo & Paris

9月24日、CAREフランスが主催する慈善公演として、当財団の数原理事長が団長を務める合唱団によるチャリティコンサートが、パリ・アンヴァリッドのサン・ルイ教会堂で開催されました。またこれに先立ち8月28日には、国内でのプレイベントとして、日本モーツァルトコーア事務局主催の演奏会が、めぐろパーシモンホール（東京・目黒）にて開催され、600人を超える多くの皆さまにお越しいただきました。残暑の折、ご来場いただきました皆さま、また収益金の一部をご寄付いただきました合唱団の皆さまに、心より感謝申し上げます。

ケア・フレンズ長野発足

2009年9月15日に、ケア・インターナショナル ジャパンの支援組織、「ケア・フレンズ長野」（会長　塚田稲子）が発足しました。支援組織は、現在全国に5つあり（ケア・フレンズ岡山、東京、札幌、そしてケア・サポーターズクラブ大分、熊本）、今回長野で設立されたのは6つ目となります。300年の歴史があり、老舗旅館からおしゃれなレストランに生まれ変わった善光寺前のTHE FUJIYA GOHONJINで開催された発会式には、鷲澤市長をはじめ、信越放送の田幸社長、長野放送の瀬木副社長、長野国際親善クラブの小出会長、そして姉妹組織の代表の方々や地元の協力者の方々80名近くが参加されました。ケア・フレンズ長野の会員の方がデザイン・プロデュースされたエコファッションショーや、ピアノのミニコンサートもあり、華やかな雰囲気の中で式典が行われました。好調なスタートを切った「ケア・フレンズ長野」は、今後、地元において国際協力およびCAREの支援活動への理解促進に貢献されることが期待されます。

当日は、「ケア・フレンズ長野」塚田会長より、当財団を代表して理事長の数原が記念寄付を頂きました。紙面を借りて、心より感謝申し上げます。

スーダン水と衛生改善事業

スーダン南部・水と衛生緊急支援事業

～帰還の促進と生活状況の改善へ向けた支援～

トィッチイースト郡の人たちと現地駐在員の荒又さん

スーダンは、アフリカで最大の面積を持つ国です。しかし、南北に分かれて、20年以上に及ぶ内戦で苦しんできました。一時は400万人以上もの難民・避難民が南部スーダンから流出したと言われています。2005年の包括的和平合意の締結後、その人々の帰還が進められてきました。しかし、治安や生活への不安、劣悪な生活環境といった要因が帰還の妨げとなっていることも事実です。

CAREの事業対象地であるスーダン南部のジョングレイ州トィッチイースト郡では、安全な水へのアクセスが極端に少なく、多くの人々が河川や水たまりといった不衛生な水源に頼らざるを得ない状況にあります。緊急人道支援において望ましいとされる数値が井戸1基あたり500人、南部スーダン政府が目標とする数値が一基あたり1,000人であるのに対し、事業地における現在の状況は1基あたり1,500人以上です。このことからも、この地域で安全な水が不足していることが分かります。政府や国連機関、NGOにおいて、安全な水へのアクセスは極めて重要なニーズであるという認識はあるものの、治安や地理的な要因から制限されてしまう移動・輸送手段や、人材の不足、スーダン国内での技術的な問題などから、トィッチイースト郡での援助団体による支援は限られており、状況は逼迫していると言っても過言ではありません。また、トイレなどの衛生施設の絶対的な不足や衛生習慣の欠如などが、人々の健康を害する要因となっています。

ケア・インターナショナル ジャパンは、2009年4月より（特活）ジャパン・プラットフォームの助成を受け、同地域において水と衛生支援を開始しました。この事業では、トィッチイースト郡にある5つのパヤム(郡より小さい行政レベル)において、井戸の掘削と修理、トイレの設置、そして衛生啓発活動を実施しています。

井戸掘削の活動では、井戸を維持・管理する為の水管理委員会を組織し、彼らへの簡単な技術指導を行っています。これは、住民たちが井戸を正しく使い、故障した際の修理やその他の水にまつわる問題解決などを自分たちの力でできるようにするためです。また、学校においてトイレの数が生徒・児童数に対して、圧倒的に足りません。2009年8月現在も、現地でどの学校へいくつ設置するか、調査による絞り込みを進めていますが、数百人の生徒に対してトイレが一つか二つという学校がいくつもあります。その為に、トイレではなく近くの茂みなど場所を選ばずに用を足し、衛生状況がより悪くなるといった悪循環も生んでいます。そこで、トイレの設置は学校を中心に実施することになりました。

井戸掘削・修復、トイレ設置という二つの活動と同時に重要なのが、衛生啓発活動です。もともとのこの地域において人々の衛生に対する意識や知識は極めて低く、衛生習慣に起因する疾患も多くみられます。こうしたことからも、衛生意識・知識の向上や衛生習慣の改善の為の活動は非常に重要なのです。このプロジェクトでは、地域の女性からボランティアの衛生普及員を選出し、トレーニングを実施した後、彼女たちを中心に各コミュニティで衛生改善の為の活動を展開していきます。また、学校では子どもたちが「衛生クラブ」などを通じ、正しいトイレの使い方や衛生習慣についてなどの知識を学び、子どもたち自身がそれを各家庭に普及させていくことを期待しています。この事業は、これから2012年までの3年間継続的に実施して行く計画であり、初年度は井戸掘削・修復合わせ11基、トイレ50基を予定し、衛生活動は郡全域で進めていく予定です。

「フェリシモ地球村の基金（株式会社フェリシモ）」の助成対象プロジェクトとして決定。掘削及び修復後の井戸の水質検査に用いる機器の購入費として、60万円をご寄付いただきました。

（事業部　貝原塚　二葉）

スーダン支援の現場から

（特活）ジャパン・プラットフォームの助成を受け、新しく掘削してできた井戸

井戸の設置場所を決めるために…

通常、井戸は集落の中心地に作られるものというイメージがあると思います。しかし、トィッチイースト郡のあるジョングレイ州では、事情が少し異なります。

ここに住む人々は、牛の放牧を生業とする民族で、今でもその生活スタイルを守っている人が数多くいます。牛を中心とした数百人規模の生活共同体が不定期に移動するため、地域に根を下ろして住んでいる人たちと水を巡る争いが生じることがあります。また、内戦中に地域に留まり続けたホストコミュニティと、避難先から帰ってきた帰還民の間でも、水を巡る衝突があります。さらには、帰還による人口増加だけでなく、子どもの数も増えていることから、これまでは共同で使っていた井戸を巡って、コミュニティと学校の間での揉め事も増えてきているようです。　井戸の掘削場所を決定するまでに、コミュニティとの話し合いにじっくりと時間をかけます。どこに作れば、水を巡る衝突を避けることができ、みんなが平和に水を使えるようになるのか、コミュニティの人たちの言うことに耳を傾けます。この結果、あえて集落のはずれに井戸を掘ることも珍しくないのです。生活向上のために作る井戸が、人々の争いの元とならないように…。

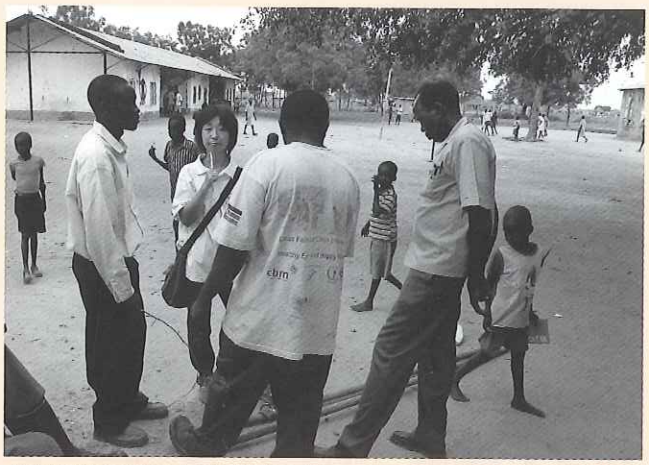
井戸にまつわる悲しい歴史 ❶

スーダンの独立後、南部スーダン地域は、北部アラブ系民族により統一国家として統治されました。過去50年間の間、南北間で数度の内戦、和平協定を繰り返す中、比較的安定した時代に、各パヤム（タウン）の中心地には、井戸と機械式のポンプ、高架水槽、水道が設置されていました。現在の給水施設からすると、考えられないほど進んだ設備です。しかし、これら施設は、一部の特権階級の象徴であり、一般住民はこれら施設の恩恵に預かることは無かったそうです。現在、これらの施設は、銃弾の跡を残し、さび付いた状態でそのまま放置されています。

井戸にまつわる悲しい歴史 ❷

現在使用されている井戸のうち、和平協定以前から使用されている井戸のほとんどは浅い井戸です。和平協定後に、NGO等により深い水脈から汲み上げるハンドポンプ式井戸が設置されましたが、もともとはバケツとロープで水をくみ上げるオープンタイプの浅い井戸でした。この地域で内戦が激化した1990年代、多勢の人々の命が奪われ、その遺体の多くは、これらの井戸に投げ込まれたのだそうです。

和平協定直後の緊急支援の際には、いろいろと仕方の無い事情もあったのでしょう…、こうした井戸内の清掃が行われ、ハンドポンプ式井戸が設置されました。これらの井戸は、今現在でも、人々の生活に必要な水を提供し続けています。不幸な過去があるからと、急に閉じてしまうわけにはいきません。私達ケア・インターナショナル ジャパンのプロジェクトでは、これらの井戸の近隣に新しいハンドポンプ式井戸を建設することにより、これら不幸な過去を持つ浅井戸の数を減らしていこうとしています。



小学校の校庭で打ち合わせをする荒又さん

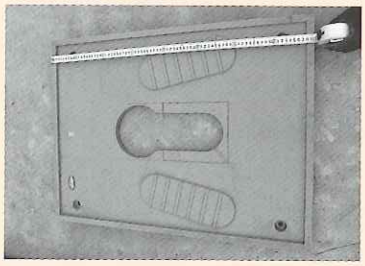
トイレの普及と感染症の防止

感染症の予防には衛生習慣を身につけること…というのは当たり前のことですが、ここトィッチイースト郡では、トイレの重要性がほとんど認識されていませんでした。主な理由は2つです。

1つ目の理由は、彼らは伝統的に、広大な土地で放牧、遊牧する生活スタイルであり、決められたトイレというより、広大なトイレを使用してきたということ。そして、2つ目の理由は、ここトィッチイーストの地盤は非常に粒子の細かい砂であり、トイレ用の穴を掘っても、雨季にまとまった雨が降れば簡単に崩壊してしまうため、せっかく苦労してトイレを作っても意味が無い、というあきらめ感があったことです。しかし、和平協定後、避難先からの帰還が始まると、特に、帰還民が多い地域でコレラ等の感染症が流行してしまいました。

CAREが2007年から開始したアッパーナイル地域 水・衛生改善プログラムでは、主に一般世帯を対象として衛生知識の向上とトイレの普及に努めています。しかし、単に、トイレを作るというのでは、持続可能な衛生習慣の改善は望めませんので、住民との共同作業によってトイレを作っています。

まず、コミュニティから選出された衛生教育推進員が各戸を訪問し、衛生習慣の重要性を訴えると共に、住民自身によってトイレ用の穴を掘削するよう指導します。十分な深さの掘削が終わると、穴保護用の古ドラム缶、プラスチック製のスラブ（床板：写真右上）、穴内の臭気を逃がすパイプを住民に配布します。ここから先は、住民自身が作り上げてゆきます。日干しレンガとわらの屋根で可愛らしい小さな丸いトイレ棟を作る人、金属波板でそれなりのトイレ棟を作る人、屋根の無い目隠しだけのトイレを作る人、様々です。どんな形でも構わない、まずは、各世帯が一つのトイレを持つこと、その第一歩が重要なのです。



スラブ

トイレの普及が進むに従って、コレラ等の感染症の発生件数が大幅に減少しました。こういった事実が、さらに多くの人にトイレの重要性を認識させるという相乗効果も上がっています。

今年から始まったケア・インターナショナル ジャパンの事業では、小学校を対象にトイレを建設していきます。トィッチイースト郡には32校の小学校がありますが、このうち児童用のトイレが一つも無い学校が19校もあるのです。また、トイレがあったとしても、一つのトイレあたりの児童数が200人～700人という非常に厳しい状況です。学校の衛生状況を改善し、子ども達に衛生習慣の大切さを伝えるという直接的な効果はもちろんのことですが、子どもから各家庭の大人たちに伝わるであろう間接的、波及的な効果を期待しています。

目の前にある現実は、一気に解決できるものではありません。しかし、ゆっくりではあっても、確実に、人々の意識が変わってゆくことを実感しながら、プロジェクトを進めています。

（事業部　荒又　多美子）

ニノ　ビビルリさん（22歳）と息子のマット君（7ヶ月）

CAREストーリー

グルジア紛争―あれから１年

～ CARE's assistance was right on time. ～

グルジアとロシアとの間で軍事紛争が勃発して１年が経ちました。敵味方双方の住民が住家から避難し、13万人以上もの人びとが、親類の家、学校、消防署、放棄された病院や工場、また避難テントでの生活を余儀なくされました。軍事衝突は７日間続いただけでしたが、何十万人もの人々が、精神的、社会的、経済的に大きな痛手をこうむりました。

現在ロシアが支配している、南オセチア　ゴリ地方のクヴェモ・アツセヴィ出身のニノ　ビビルリさん（22才）の話:

私は、戦争が起きたときは、妊娠５ヶ月でした。私たちの村は、ツヒンヴァリ※にとても近いところにあり、武力衝突の初日から、銃撃にさらされました。夫と私は、事態が悪化する前に、母の住むこの場所に避難してきました。母には、私以外に４人の子どもがいて、末の子は２歳です。家族全員に十分な食事を与えることは殆ど不可能でしたが、CAREが、援助を必要としたその瞬間に食糧・その他の支援を始めてくれました。私たちにとり、寝具は特に大切なものでした。
夫の両親は元の村に戻り、夫も時々そこに出かけて行きますが、私は、戻るのは心配です。村にはオセチアの軍隊の駐屯地があります。もし衝突がまた起こったなら、どうすればよいでしょう？産まれてまだ７ヶ月の息子・マットを連れて逃げることなんてきっとできません。地方自治体が、好意で現在使われていない警察署の建物に私たちを住わせてくれました。しかし、生活環境はひどい状態で水道や下水の設備もありません。でもクヴェモ・アツセヴィにいるよりずっと安全です。夫はティビリシで仕事を見つけることが出来ました。これで赤ちゃんに食べさせるためのお金もできました。

※1989年頃から始まって現在も続いている南オセチア紛争で、グルジア軍とオセチア軍の対立や戦闘がしばしば行われている。現在、ツヒンヴァリは南オセチア共和国の首都として、人口約30,000を有する。ただし南オセチア共和国は国際的には認知されていない。

このようにCAREの支援を受けて、復興に向け努力する人たちのストーリーを、当財団ウェブサイトでご覧いただけます。

http://www.careintjp.org/

CARE Notice Board

大切な人への贈り物だから クリスマスにはcareギフトを！

「careギフト」のURLは www.caregift.jp です

家族や友達、大切な恋人と一緒に楽しむクリスマスが、もうすぐやってきます。今年はどんな方法で、大切な人に喜んでもらいますか？

CAREがワイデン＋ケネディ トウキョウを始めとする各企業とパートナーシップを組んで創り上げたインターネット寄付システム「careギフト」なら、いつもとは違う特別なギフトを贈ることができます！
途上国で貧しさに立ち向かう人には、あなたが選んだ支援というギフトを贈り、あなたの大切な人（家族・友人など）には、世界でたった一つのカードを届けることで、現地の人々の笑顔を分かち合いませんか？もちろん、カードにはあなたからのメッセージも添えられます。
いつもはうまく伝えられない気持ち、素直に言えない「ありがとう」の言葉、モノでは伝えきれないあなたの思いを、「careギフト」と共に大切な人に贈ってみませんか。あなただけが贈る、あの人のためだけの、最高のプレゼント-「careギフト」を是非ご活用ください！

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol. 13
2009年10月30日発行（季刊）
発　行　人：野口 千歳
編　　集：安部 桂花

財団法人 ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel. 03-5950-1335　Fax. 03-5950-1375
E-mail. info@careintjp.org
www.careintjp.org

＊このニュースレターのデザイン・レイアウトは、CAREのデザインボランティアさんのご協力により、制作されています。

CARE World

Vol. 12 ケア・インターナショナル ジャパン Newsletter June 2009

ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREの日本事務局です。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

Contents

page 1-2 パキスタン新規事業
～地震被災地にて女子の未来に向けた教育支援

page 3 シエラレオネ滞在記

page 4 事務局からの報告
支援組織講演会報告／「東京発　日本ファッション・ウィーク」がCAREを支援／「アジアの祭典 チャリティーバザー」に出展／「アフリカン・フェスタ2009」に参加

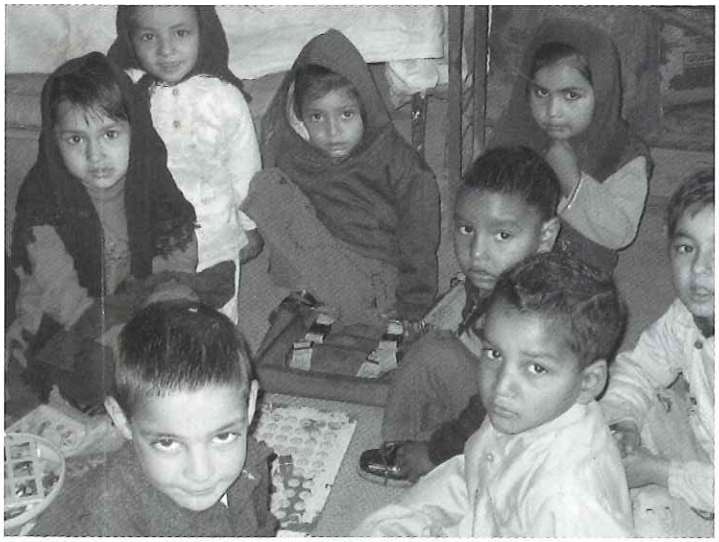
page 5 CSRフォーラム報告

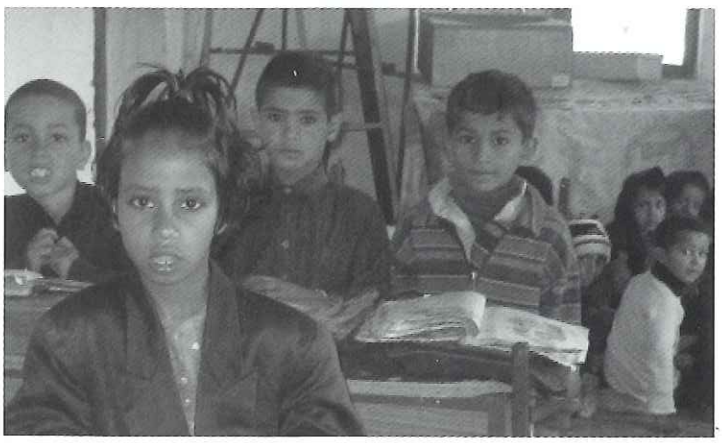
page 6-7 ベトナム「地域におけるHIV予防および偏見・差別の軽減事業」活動報告
私スタイルのCAREライフ

page 8 CAREストーリー
～サイクロン発生から1年。ミャンマー
CARE Notice Board

パキスタン新規事業

～地震被災地にて女子の未来に向けた教育支援





アボッタバッド県の学校で学ぶ子どもたち。入学者の名簿を見ると、男子に比べて女子が少ないことがわかる

教育の男女差

国際社会が 2000 年に設定したミレニアム開発目標の一つである「普遍的初等教育の達成」では、「2015 年までに、世界中のすべての子どもが男女の区別なく初等教育の全課程を修了できるようにする」と記されています。なぜ、「男女の区別なく」とあるのでしょうか。日本では、男の子も女の子も小学校に通い、教育を受ける機会があります。しかし、世界には女の子が学校に行くことができない環境があります。国際協力機構（JICA）および株式会社ラッシュジャパンとの連携により、ケア・インターナショナル ジャパンがパキスタンで 2009 年 1 月から開始した「北西辺境州初等教育向上事業」は、この女子の教育問題に焦点を当てたものです。

パキスタン北西辺境州アボッタバッド県は、首都イスラマバードの北に位置し、2005 年 10 月に発生した地震で甚大な被害を受けたところです。教育省によると、2005 年の震災前にアボッタバッド県には公立小学校が 1,227 校あり、その 541 校が女子小学校でした。地震で約 800 校が損傷を受け、そのうち男子校 133 校と女子校 76 校が全壊しました。アボッタバッド県における成人男性の識字率は 74％、女性は 39％です。県内における都市部と地方の男性識字率の格差は著しいですが、女性においてはより大きな開きがあり、都市部では 64.7％、地方では 34.1％です。

パキスタン地方部が抱える教育問題

この事業の実施地域のようなパキスタン地方部では、①特に女性の識字率が低い、②教育へのアクセスが悪く就学年齢の子どもたち数百万人が学校に通っていない、③男女格差が大きく女子教育への理解が低い、④公立学校の教育の質が低い、など初等教育に関するさまざまな課題を抱えています。女子に教育を受けさせたいと思っている親もいますが、アクセスが悪く、遠い道のりを女の子一人で通学させることを不安に思い、親が女子を教育から遠ざけてしまっているのも事実です。これらの問題を解決するためには、教室やトイレの建設、机・椅子の提供などのハード面と教員育成やカリキュラム改善といったソフト面の支援を組み合わせた、根源的な解決を目指すための包括的アプローチが必要となります。

パキスタン地方部の教育制度のすべての局面において、女子は男子の陰に隠れています。貧しい家庭では特に、女子より男子の就学を優先します。女子の就学率の低さの要因には、経済的な障害以外に、女子教育に対する否定的な社会・文化的背景および政府やコミュニティの支援体制の不整備なども挙げられます。パキスタン地方部における教育へのアクセスの男女格差は、歴史に根づいている社会的通念や社会的構造（権力構造）から来ているとも言われます。そこで、女子が教育を受ける意義をこの事業の活動を通して伝えていく必要があります。

パキスタンは地方分権化に基づき、県教育局を中心とした教育体制になっていますが、体制が十分に整わない段階で、地震の影響を受けました。教育問題に責任を持つコミュニティのリーダーによるグループ（以下 PTC）は、学校の運営・管理を行うグループとして法律で制定されており、学校長の推薦に基づき教育局から任命されたメンバー（校長、教師代表、保護者会代表、コミュニティ代表、村長、宗教指導者などを含む）から成り立っています。しかし、PTC の責任と役割が周知されていないこと、また、メンバーに対する研修がほとんどないことから、十分に機能を果たしていません。また、親の教育に対する意識が低いことに加え、コミュニティの間で教育の質とアクセスの向上に果たす行政の役割や責任が理解されていないのが現状です。

活動内容

この事業では、北西辺境州アボッタバッド県アボッタバッド郡の 6 地区における 20 校で、コミュニティ（特に女性と女子）がフォーマル（学校教育）およびノンフォーマル教育（学校外での教育）に関する諸問題に対して自ら行動を起こせるよう力をつけることを目標としています。主な活動は、①PTC（20 組織）に対する能力向上のための研修の実施、②父母グループ（20 組織）の結成および能力向上のための研修の実施、③各 PTC とコミュニティの年次集会を通した連携強化、④教室内で教師と生徒をサポートするコミュニティ・ボランティアに対する研修の実施、⑤各 PTC と各父母グループの四半期会合の開催、⑥政府関係者を含めた年次教育会議を通した体制強化、⑦政府関係者を含めた事業終了時ワークショップの開催などです。

生徒がすぐに直接的な恩恵を受けられる学校建設や奨学金などに国際社会からの支援は集中しがちです。しかし、父母やコミュニティの意識・能力の向上、教育関係者や政府との連携・体制強化など、「モノ」ではなく「人」に焦点を置いた長期的視野に立った活動とあわせて、包括的アプローチで支援を行うことでこそ、子どもたちに明るい未来がもたらされることは、CARE が世界中で行っている事業を通して実証されています。今後、子どもたちの人生における変化を随時報告していきたいと思います。

（事業部　武田 勝彦）

PTC のミーティングの風景。写真には男性しか写っていないが、メンバーには女性も含まれ、ミーティングなどにも参加する

シエラレオネ滞在記

事業部インターン　相田 華絵

女性グループが地図を作成中。小枝が道を、葉っぱが家を表している

2009 年 1 月中旬から 3 月中旬までの約 2 カ月間、私はインターンとして、CARE シエラレオネにおいてHIV/ エイズ事業の視察と家族計画に関する社会調査に参加しました。

HIV/ エイズ事業

CARE シエラレオネでは、現地パートナー団体と連携し、トラック運転手、行商人、性産業従事者、若者などを対象にした HIV/ エイズ事業を実施しています。事業では、劇、ラジオ、CM、掲示板、ピアエデュケーション *1 などのさまざまなコミュニケーションチャンネルを通して、また、サッカー大会やダンスパーティといった人が集まる娯楽の場において、エイズに関する正しい情報を伝えることで、人々の行動変容を促すための働きかけを行っています。また、HIV 陽性者にラジオ番組に出演してもらったり、陽性者をゲストスピーカーとしてイベントに招待するなど、普段、公の場に姿を現す機会の少ない彼らの声を多くの人に届けることを通して、HIV 陽性者に対する偏見・差別をなくしていくための活動も行っています。

家族計画に関する社会調査

この調査は、家族計画や避妊法の低い利用率に関してどのような背景や障壁があるのかを探るために実施されました。シエラレオネの女性は生涯に平均 5 人の子どもを産みます。また何らかの避妊法を実施しているのは 8 %にすぎません。

なぜカップルは多くの子どもを望むのでしょうか。「成長する前に亡くなる子どもが多いから」「家計を助ける働き手は多いほうが良いから」「幸せの証拠だから」など、さまざまな理由を聞き取ることができました。また調査ではジェンダー *2 の問題が浮き彫りになりました。男女の役割に関して、「男性」は強くたくましく、家庭を導く存在であること、「女性」は夫に従順で家事をきちんとこなすことが期待されています。外出時は、夫は妻の許可なく自由に出られますが、妻は必ず夫の許可を得なければならない、子どもを何人持つかは夫が決めることであり、妻は口出しする権利を持たない……。

今回の調査で最も印象的だったのは、男女別のグループに分かれて住んでいるコミュニティの地図作りを行ったときでした。男性グループはマジックを使って模造紙に地図を描きましたが、女性グループは地図が何であるかを知らなかったため、まず地図の説明をする必要がありました。また、マジックの使い方がわからず、身近にある小枝や石、葉っぱで地図を描いてくれました。地図には、彼らがコミュニティの中で重要な資源だと考えるものを描いてもらいました。完成した地図にはモスク、水汲み場、集会所、診療所などが描かれましたが、女性グループの地図に「学校」はありませんでした。グループの女性全員が学校へ行ったことがなく、「学校」は彼女たちの生活に密接なものと考えられていないことが察せられました。

同時に、この地図作りを通して彼女たちのパワーを感じました。マジックの使い方を知らないから、「地図」を知らないから、学校に行っていないから、彼女たちは弱い存在として捉えられがちです。しかしそれは私たちの提案した「方法」を知らなかっただけであり、小枝や葉っぱを使って地図を描いてくれたように、彼女たちのやり方で、私たちの想像もつかないような素敵な地図を描くことができます。私のとらわれた概念を超えた彼女たちの内なるパワーを教えてくれました。

住む時代や地域によって社会から期待される男性／女性としての役割や価値は異なってくるものですが、社会・文化的な背景だけでなく、一人ひとりの個人に内在するパワーと、そのパワーを家庭・学校・職場などさまざまな関係性の中で個人がどのように表現していくかによっても大きな違いを生むことを実感しました。また私たちの生活の中でも、女性／男性だからと、暗黙のうちに制限されていることはたくさんあります。ジェンダーは途上国だけの問題ではなく、先進国に住む私たち一人ひとりにも深く関わる課題であることに気づかせてくれました。

*1　HIV/ エイズに関する研修を受けた者が「ピアエデュケーター」となり、同世代の仲間に HIV/ エイズに関する情報を伝えること。
*2　男女の生物学的性別ではなく、社会的価値観などによって規定された社会的性差のこと。男女の社会的・文化的役割の違いや男女間の関係性を示す。

●今回の記事には書かれていないシエラレオネの魅力が満載のブログは、当団体ホームページのトップページのバナーからご覧いただけます。ぜひお読みください。

事務局からの報告

ケア・インターナショナル ジャパン支援組織 講演会報告

ケア・フレンズ東京主催の講演会が2月21日に開催され、北大路欣也さんにご講演いただきました。幼少時代に俳優になりたいと決意されたときから、著名な俳優に成長するまで、そして最近のCMでの「白いお父さん犬」の声としてのご活躍についてお話くださいました。

4月11日には、ケア・フレンズ岡山主催の講演会が行われ、曽野綾子さんが世界各国におけるご自身の奉仕活動について語られました。アパルトヘイト時代の南ア、コンゴ、そしてボリビアでは、本当の「貧困」とは何か、「ボランティア」をすることはどういうことか、を考えさせられたことなど、とても示唆に富んだお話でした。

5月9日に開催されたケア・サポーターズクラブ熊本の講演会では、杉良太郎さんにお話いただきました。芸能界デビュー数年前から始められた刑務所慰問や世界各地の日本人墓地参拝など50年余りの奉仕活動に関するお話に来場者の方は熱心に耳を傾けていらっしゃいました。また、「お金」「時間」「理解や思い」の面で自分のできる形の奉仕をしてほしいと呼びかけてくださり、募金箱にはたくさんのご寄付が集まりました。

素晴らしい会を催してくださいました、ケア・フレンズおよびケア・サポーターズクラブの皆様に心からお礼を申し上げます。

HAPPY TOGETHER！ 日本版パリコレ「東京発　日本ファッション・ウィーク」がCAREを支援

展示会では、ARTする社会福祉施設「KOUBOUKAI」がデザインしたショッピングバッグや原画、オリジナルグッズなどとともに、ココン州のプロジェクトについてのパネルが展示されました

3月20日～29日、日本の優れた繊維・ファッションの製品およびサービスなどの情報を海外に発信することを目的として、第8回「東京発　日本ファッション・ウィーク（以下JFW）」が開催されました。この期間中、JFWと感度の高い一般消費者を抱える有力セレクトショップ*が一丸となって、「HAPPY TOGETHERプロジェクト」が行われました。

社会貢献の一環として、東京周辺の各ショップでの商品購入者に配布された特製ショッピングバッグ1枚あたり5円が、CAREのカンボジア「ココン州青年男女の能力向上プロジェクト」に寄付されると同時に、24日～26日の3日間限定で東京ミッドタウン・アトリウムにて、同プロジェクトを紹介する展示会が開催されました。各ショップでの商品購入を通じて、ココン州のプロジェクトをご支援いただいた多くの皆さまに心より感謝いたします。

* 参加企業：（株）シップス、（株）トゥモローランド、（株）ナノ・ユニバース、（株）ビームス、（株）フリーズインターナショナル、ベイクルーズグループ、（株）ユナイテッドアローズ（五十音順）

「アジアの祭典　チャリティーバザー」に出展

横田評議員をはじめ多くの方のご支援により、4月15日に開催された「アジアの祭典　チャリティーバザー」に出展しました。厳しい経済情勢にもかかわらず、チャリティのためにと、大勢の方がご協力くださいました。心より感謝いたします。

「アフリカン・フェスタ2009」に参加しました

5月16日(土)、17日(日)に開港150周年で賑わう横浜赤レンガ倉庫・イベント広場にて、「アフリカン・フェスタ2009」が開催され、当団体もブースを出展しました。

アフリカ各国の大使館や60団体もの NGO が参加し、アフリカの伝統音楽ライブやワークショップ、ファッションショー、有識者によるトークショーやレクチャーなどが行われ、アフリカンフードコーナーが設置されるなど、横浜にいながらにして広くアフリカについて知ることができる2日間でした。

CAREブースでは、今年4月から開始した、レソトにおけるエイズ孤児や女性を対象とした栄養改善と農村開発事業および南部スーダンにおける帰還民と地域住民のための水と衛生改善事業についてのパネルを展示し、多くの来場者に新しいプロジェクトについて知っていただく絶好の機会となりました。またTシャツなどのオリジナルCAREグッズをはじめ、アフリカ各国からの民芸品も大変ご好評をいただきました。2日目にはあいにくの強風により、終了時刻が一時間早まってしまうというアクシデントにも見舞われましたが、当団体のアフリカでの活動を紹介することができた有意義な2日間でした。

ご来場いただきました皆さま、当日の運営にご協力いただきましたボランティアの皆さま、本当にありがとうございました。

CSRフォーラム「Strategic Philanthropy Forum 2009」報告

5月11日、新宿センタービル「大成建設大ホール」（東京・新宿）にて、環境・CSR コンサルティング会社である株式会社イースクエアとの共催で、「Strategic Philanthropy Forum 2009 ～ Cash＆Sales と Care＆Solidarity 両立の時代へ～」を開催しました。経済危機を抜け出したときに「選ばれ続ける強い企業・ブランド」になるための鍵、そして今の時代だからこそ行うべき企業の社会貢献の形を模索する企業の経営者や CSR・社会貢献担当者を中心に、NGO やメディア関係者など、約 230 人に参加いただきました。

まず株式会社イースクエア代表取締役社長、そして当団体理事でもあるピーター D. ピーダーセンによる基調講演の後、CARE フランス事務局長フィリップ・レヴェックが、CARE のグローバルな企業パートナーシップ事例を紹介しました。ユニリーバやバータ社との連携による BOP（Bottom of the Pyramid）ビジネス関連の取り組み、ソシエテ ジェネラルとの協働による社員参加型プロジェクト、ラファージュとの協働による本社および途上国での HIV 関連の取り組み、スターバックスとのコーヒー生産地における協働など、日本での実例が少ない分野における海外の先進事例を紹介しながら、各社との交渉経緯や関係構築までのステップ、そして途上国における成果や協働の課題などについて話しました。

当団体の国内協働事例としては、ワイデン＋ケネディトウキョウのアカウントディレクター、橋本ゆかり氏が「専門性を生かす社員参加型社会貢献～マルチパートナーシップによる『pro bono* work』」と題して、寄付サイト「care ギフト」開発にあたっての事例を発表、続いて、日本ファンドレージング協会の常務理事である鵜尾雅隆氏が「コーズ・リレーティッド・マーケティング（CRM）を通じた商品及び企業価値の向上～丸紅とヤマノビューティメイトの事例」と題して、二つの事例から見える CRM 成功のポイントなどを発表しました。そして最後に、各登壇者と会場の参加者によるオープンフロアディスカッションが行われ、フォーラムを締めくくりました。

今回のフォーラムは、企画や告知など準備段階からのイースクエア社員の方のご協力をはじめ、会場提供いただいた企業様、展示パネルを作成いただいたデザイナーの佐藤よし子様など、多くの皆様にご協力いただきました。また当日は、スターバックス コーヒー ジャパン 株式会社の社員の皆さまによる休憩時のコーヒーサービスに加え、株式会社オルタナ様からは環境と社会貢献と「志」のビジネス情報誌「オルタナ」を、丸紅株式会社様からは CRM 事例としてのブラボーバナナをそれぞれご提供いただくと共に、株式会社リンガバンクの横田謙様、原田ゆかり様にはプロボノで通訳いただくなど、フォーラム自体が、CARE と企業 / 専門家による連携によって実現しました。この場を借りて、多大なるご協力ならびにご支援をいただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

●当日の発表資料については、当団体ホームページ「企業パートナーシップ」のページよりダウンロードいただけます。

*「pro bono（プロボノ）」とは、ラテン語で「善のため」という意味。そもそもは弁護士が無報酬または低報酬で行う公共的・共益的な活動を指したが、現在は業種を問わず広く使われている。「ボランティア」と異なる点は、「専門的」な知識や経験を、無報酬で提供するという点である。

CAREフランス事務局長フィリップ・レヴェック、来日

CARE フランス事務局長
フィリップ・レヴェック

当団体は、CSR フォーラムのために来日した CARE フランス事務局長フィリップ・レヴェックとフランス系企業訪問などを行うとともに、5 月 13 日には、日本経団連内にある社団法人 海外事業活動関連協議会（CBCC）主催の懇談会にて、異なる業種・業態の会員企業の皆さまと意見交換を行いました。

また、昨年「ミャンマー・サイクロン早期回復のための農業支援事業」を通じてご支援いただいたソニー株式会社様主催の CSR フォーラムにて、フィリップならびに当団体事務局長が講演、異なる部署からご参加いただいた約 100 人の社員の皆さまに対して、CARE のグローバルな企業パートナーシップ事例に加えて、ミャンマーにおける支援活動の報告などを行いました。

ベトナム
「地域におけるHIV予防および偏見・差別の軽減事業」活動報告

ケア・インターナショナル ジャパンは、ベトナム政府よりカントー橋の建設を受注した大成・鹿島・新日本製鐵共同企業体(TKN)の支援を受け、2006年から約2年間にわたり、建設労働者を主な対象としたHIV/エイズ予防事業を実施しました。

さらに、2008年11月以降、引き続きTKNの支援を受け、今度はコミュニティの人々を主な対象とした「地域におけるHIV予防および偏見・差別の軽減事業」を実施し、2009年4月に終了しました。ここでは、この事業を行うに至った背景と活動の成果について報告いたします。

■背景

ベトナムはHIV感染者の増加が著しい国の一つとされています。カントー市でも近年の経済発展と社会環境の変化により人々の移動・移住の機会が増加したため、HIV感染率が増加傾向にあります。

2008年のカントー市のHIV感染率は0.3%ですが、HIV陽性者の半数以上は、20～29歳の若年層、そして男性が3分の2を占めます。これは、カントー市の経済活発化と同時に、労働者数や娯楽施設が増加し、注射器による薬物使用者、性産業従事者、その顧客など、HIV感染リスクの高い行為にかかわる若年層が増加したことに関連します。

さらに近年は、これらのHIV感染リスクの高いグループのみではなく、HIV陽性の夫から妻、そして母から子どもへというように、家族内のHIV感染の増加も確認されています。

また、ベトナム全体およびカントー市においては、HIV陽性者に対する偏見や差別が強く、そういった社会の否定的な態度により、HIV陽性者や家族が適切な医療や社会サービスを受けられないという状況もあります。HIV陽性者に対するケアの充実は、陽性者の人権保障の観点、そして新たな感染予防の観点からも重要です。そのため、偏見や差別の撤廃を目指す活動もHIV感染予防活動と同時に行っていく必要があります。

■活動の成果

このような背景から、ベトナム現地事務所およびカントー市のエイズ予防センターと協力して、HIV感染のリスクと予防に関する地域住民や若者の意識を高めると同時に、HIV陽性者に対する偏見や差別を軽減することを目指して、以下の活動を実施しました。

① HIV予防を促す漫画ブックレットとHIV/エイズ法についてのブックレットを作成。
② 路上キャンペーンを実施し、地域住民、学生、地方行政官などに6000個のコンドームを配布。
③ 意識向上を目的とした音楽・ドラマ・ファッションショーなどのイベントを4回実施し、1500名以上が参加。
④ 娯楽施設の経営者に対し、HIV予防を促すための研修を2回実施し、40名以上が参加。
⑤ 工場・建設現場の労働者と喫茶店の客を対象としたHIV予防を促す啓発セミナーを3回実施し、380名が参加。

イベント、研修、セミナーなどに参加した青年、地域住民、娯楽施設の経営者からは、「このようなHIV予防を促すイベントやセミナーの実施はとても重要であり、また参加したい」との声が聞かれました。また、「音楽やファッションショーもイベントに含めることで、堅苦しくない雰囲気の中でHIVについての知識を得られることがとても効果的で楽しいので、またこういったイベントを開催して欲しい」といった要望も出されました。

さらに、「イベントに参加する前は、HIV陽性者の隣に座ったり、握手するのが怖かったし、HIVが感染するのではないかと心配だったが、それが間違いだったと感じる。今は、HIV陽性者と握手するのも怖くないし、同僚として一緒に働くこともできる」といった感想も聞かれ、HIV陽性者への偏見や差別が軽減されてきていることが確認されています。

この事業は、2009年4月末をもって終了しましたが、今後は、地域がHIVについての理解を深め、HIV陽性者に対する偏見や差別のない環境が持続されるよう、現地事務所が中心となって引き続き活動を行っていく予定です。

（事業部　尾立 素子）

エイズに対する意識向上を目的とした音楽イベント

娯楽施設の経営者に対する研修風景

私スタイルのCAREライフ

CARE ボランティアメンバー
田中 李歩

5月に横浜で開催されたアフリカン・フェスタ2009にて。アフリカのレソトを象徴するバソトハットをかぶり、ンデベレ族の人形を手にして写真撮影！（中央が筆者）

いつも楽しく、得るものたくさん！

私が CARE のボランティアに登録したのは、高校 1 年生の冬です。幼い頃から外国への憧れは強かったのですが、飛行機に乗ったこともない自分と海外とのつながりを見出せないまま高校生になりました。そんな中、学校で偶然ジェンダーについて学び、女性の教育は特に開発途上地域で重要なのだと知って、私の世界への漠然とした憧れは国際協力への興味に変わりました。せっかく興味を持ったからには何かしてみたい、国際協力を身近に感じてみたいと思い、私にもできることはないか探していたところ、CARE の週末ボランティアに出会いました。CARE のホームページを読んで、支援する人々の力を引き出すという方針や女性・子どものエンパワーメントが重点になっていることにひかれたので、すぐにここでボランティアを！ とメールを送っていました。

これまでに、アースデイ東京、アフリカン・フェスタといったイベントや路上でのリーフレット配布活動に参加させていただいています。イベントは活気に溢れていてたくさん刺激を受けています。リーフレット配布は大規模ではないですが、CARE について、国際協力について、さまざまな人に興味を持っていただくチャンスだと思っています。

CARE での活動を通して、スタッフの方やインターンの方、他のボランティアの方とお話できるのが、私にとっての喜びです。普通では行かないような珍しい国を実際に訪れた方の感想や NGO の現地活動の様子を会話の中で自然に聞けるのは、本当に貴重なことで、遠いと思っていた世界に少しずつ近づけているような気がします。いつも楽しく、得るものたくさん！ それが私にとっての CARE ボランティアです。

CARE ボランティアに参加することで、教育だけではなく、女性の地位やエイズなどの問題についても関心を持つようになり、将来はできるだけじかにそういった分野に携わりたいと思うようになりました。具体的な職業はまだあまり考えていませんが、CARE スタッフの皆さんがとても素敵なので、NGO の職員にも憧れています。まずは教養と語学力をしっかり身につけ、見識のある人間になることが当面の目標です。

今年は受験生ですが、大学生になったらもっともっと CARE に関わっていきたいです。これからもよろしくお願いします！

週末の JR 品川駅前にて、ほかのボランティアさんと積極的に配布活動に関わってくださる田中さん

CAREストーリー

サイクロン発生から1年。ミャンマー

サイクロンによる洪水で流されたとき、死ぬのが怖いとは思わなかった。私が怖かったのは、赤ん坊を失うのではないかということ。

2008年5月にミャンマーを襲ったサイクロン「ナルギス」は、13万人以上の命を奪い、その61%が女性でした。大半の女性は、子どもが流されてしまわないよう助けようとして命を落としました。Ma Win Maw は、なんとか生き残ることができた女性の一人です。彼女はそのとき妊娠9カ月でした。サイクロンが襲ってきたとき、彼女は4歳の息子を抱きかかえ、今にも飲み込まれそうになっている家から必死に逃げ出しました。「私が家を去ると同時に、家は崩壊しました」。

彼女は近くにある小屋の屋根によじ登り、怖がる息子を衣服で包んで、水が屋根まで上がってこないことをただ願いました。「息子は寒さで震えていました。私たちは屋根の上に座り、水位が下がるまで待ちました」。息子を失うかもしれない、夫やほかの子どもたちが無事かどうかもわからないという恐怖で、彼女は悪夢のようだったと振り返ります。「母親として、私は息子とお腹にいる赤ん坊のことが心配でした」。

幸運にも、Ma Win は息子を守ることができ、無事に7人目の赤ん坊を産みました。しかし、彼女のように生き残った人々は、その後、元の生活を取り戻すために痛ましい道のりを経験してきました。「サイクロンの後、残されたものは何もありませんでした。赤ん坊の人生がまだ始まってもいないのに、サイクロンがこの子の人生を変えてしまうのではないかと、とても心配でした」。Ma Win はこのように話しています。

今回のような災害の後、特に困難な状況に置かれるのは女性たちです。男性に比べて貯蓄は少なく、教育レベルも低く、頼るべき社会的なネットワークも小さいのです。これらの女性を支えるために、CARE は女性たちの専門的な技術を向上させ、収入を得られるよう支援しています。

サイクロンから1年たった現在、Ma Win のような女性たちは、自らの、そして子どもたちの将来の計画を立てることができるようになりました。CARE の支援を受け、Ma Win は村で商売を始めました。彼女は今、家族を養うだけの十分な収入があり、初めて将来のことを考えることができています。「私は子どもを学校に行かせることができます。私の最大の願いは、子どもたち全員が教育を受けることです。サイクロンは私たちの生活を破壊したけれど、以前よりももっといい将来のために努力することができる。母親として、子どもたちの見本になりたいと思っています。そして、どんな困難があろうと、私が子どもたちを守るということを彼らに知ってほしい」。

＊ミャンマー・サイクロン被災者支援のための緊急募金にご協力いただきました皆様に、紙面を借りてあらためて心よりお礼申し上げます。当団体ホームページに、この1年間に CARE が行った支援活動や現在の現地の状況などに関する記事を掲載しています。ぜひご覧ください。

CARE Notice Board

careギフトが新しくなりました！

「care ギフト」の URL は　www.caregift.jp

世界中で数多くの広告を手がけるワイデン＋ケネディトウキョウを始め各企業とのパートナーシップで誕生した、インターネットでの寄付システム「care ギフト」が生まれ変わりました！途上国の人々を支援する「care ギフト」をインターネットで購入することで、CARE が世界各地で取り組む活動を支援する、新しい寄付の仕組みです。

「care ギフト」を購入すると、支援を受けた国の人々の笑顔の写真が入ったカードを作成し、送ることができます。ご自分で「care ギフト」を購入し、カードを受け取ることはもちろん、お友だち、ご家族など大切な人の特別な日に、「モノ」をプレゼントする代わりに、支援を必要とする人に「care ギフト」を贈り、大切な人にはあなたからのメッセージを添えたカードを送ることで、たくましく生きる人々の笑顔をわかち合いませんか？

また、「care ギフト」のサイトを訪れると「care カントリー」という仮想上の国で暮らす可愛らしいキャラクターたちと出会うことができ、貧しい国の人々が置かれている状況について知ることもできます。

お誕生日、記念日、引き出物……あなたがこれまで注いでもらった愛情を今度は貧しさと立ち向かう人にあなたから贈ることで、大切な人を、そして世界を、温かい気持ちでいっぱいにしてください！

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol. 12
2009年6月30日発行（季刊）
発　行　人：野口 千歳
編　　集：菅沼 みゆき

財団法人 ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel. 03-5950-1335　Fax. 03-5950-1375
E-mail. info@careintjp.org
www.careintjp.org

＊このニュースレターのデザイン・レイアウトは、CARE のデザインボランティアさんのご協力により、制作されています。

CARE World

Vol. 11 ケア・インターナショナル ジャパン Newsletter
February 2009

ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREの日本事務局です。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

Contents

page 1 企業とCAREのパートナーシップ

page 3 理事長就任のご挨拶

page 4 事務局からの報告
日本ユニシスグループ・社会貢献クラブ「ユニハート」寄付団体展示会に出展／支援組織 カンボジア現地視察ツアー／会員の皆様とMGP参加者の皆様に対する特典のご案内

page 5 ベトナム「HIV/AIDS予防事業」終了報告と新規事業紹介

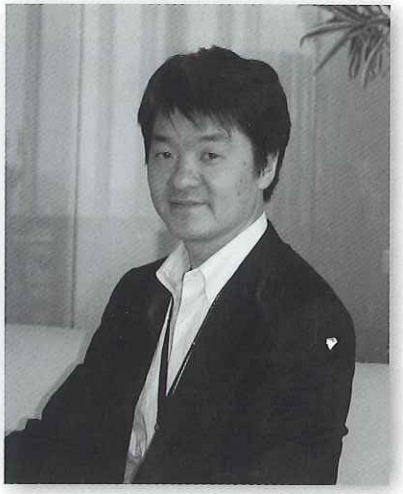
page 6 レソト「センク川渓谷における干ばつ被災者の栄養改善事業」終了報告

page 8 CAREストーリー ～ガザ地区「学校に爆弾が落ちたとき、友だちはそこにいたのかな？」
CARE Notice Board

企業とCAREのパートナーシップ

ソニーのCSRとNGOとのパートナーシップ

ソニー株式会社　CSR部 統括部長
冨田秀実



ソニーでは、CSR活動を２つの持続可能性の側面、「持続可能な経営」のために必要とされる活動と「持続可能な社会」の構築に向けた貢献と位置づけています。

「For the Next Generation」のキャッチフレーズのもと、グローバルな視点を持ち、特にソニーの持つイノベーションによる新たな価値創造と、さまざまなステークホルダーとのパートナーシップを重視した活動を展開しています。特に、気候変動問題や大規模災害のように１つの組織で解決するには、あまりにも大きな問題が世界には山積しています。その点で、NGOを含めた他の組織との連携は、今後も非常に重要なCSR活動の基本となると考えています。

企業から見た場合、どのNGOと連携するかが、活動の成否を決することにもなり、非常に重要な課題となります。

ソニーでは、まず第一に、そのNGOの能力すなわち、その対象としている分野での専門性、問題解決への手段、ノウハウ、経験、そして継続性と実績を重視しています。次に、説明責任。活動の結果、資金の使途、組織体制を明確に説明できることも重要です。企業であれば、法律的にも、CSRとしても多様な説明責任が求められていますが、同じレベルとはいかないまでも、一定レベルの説明責任を果たす覚悟がNGO側にもなければ、支援に参加する企業の社員等の理解を得ることはできませんので、NGOにも期待したい部分であります。

これまでもソニーでは、CSR活動の一環としてスマトラ島沖大地震や新潟中越沖地震、バングラデシュのサイクロンなど、世界中の災害に対し、緊急人道支援に取り組んできました。このような災害支援に際しては、現地のニーズに的確に対応できると考えられる組織を支援先として選定し、支援方法を選定します。2008年５月２日から３日にかけてミャンマーを直撃した大型サイクロン「ナルギス」の被災者支援については、そのような観点を考慮し、ケア・インターナショナル ジャパン(以下、CARE)との協働を行うこととしました。

今回、初めてCAREとの協働を選択しましたが、それは、現ミャンマー政権のもとさまざまな団体が人材派遣や物資の受け入れを拒否されている中、CAREは、ミャンマーにも長年現地事務所を持ち、現地ニーズにマッチした継続的な活動をされていると判断し、協働することに至りました。

この支援を行うため、ミャンマー・サイクロンの被害者支援に対する募金活動を全世界のソニーのグループ会社で開始。社員募金の方法として、グループ内の金融事業を行う各社と連携し、ソニーカードによるクレジット決裁やソニー銀行の専用口座の開設、また、電子マネーEdyの仕組みを用いて、社員が業務の合間にそれぞれのパソコンから募金ができるしくみや、イベント時にEdy端末を用意して、社員が募金がしやすいようにするなど当社独自の募金環境を整備しました。

支援によって提供されたトラクターにまたがり、笑顔の村人たち

このサイクロン被害に対して、社員から集まった募金にマッチング・ギフト(同額寄付)を行い、さらに会社からの義援金とあわせてソニーグループ国内外(東南アジア、日本、米国)で約2,000万円の支援を行いました。

ミャンマーでは、すでにCAREの緊急チームが結成され、被災地の調査と緊急支援が開始されていましたが、ソニーグループの寄付は、農村部の復興支援とコミュニティの再建を目的とした「ミャンマー・サイクロン早期回復のための農業支援事業」に活用されることになりました。

最も深刻な被害を受けたAyeyarwady地区およびYangon地区を対象に、種もみ5,000袋の調達と配布、農業の働き手として欠かせない牛もサイクロンの犠牲となったため、牛に変わるハンドトラクター50台の購入を行いました。コミュニティへのトラクター配布と関連機材・道具管理支援および燃料支援を約6カ月かけて実施するもので、実際に種もみを直接まき、現在は最終段階の収穫を待つ状況です。

サイクロンにより、物理的・精神的な被害を受けた被災者の農民の方々が、被害を乗り越えて、確実に収穫をあげることができれば、大変喜ばしく思います。収穫後もCAREのご協力のもと、定期的なモニタリングを続け、今後も現地の農民の人たちのコミュニティと生活の復興ができるよう見守っていきたいと考えています。

「寄付付き商品」の販売がスタートしました

企業の本業を通じて社会的な問題を解決する方法の一つに、「コーズ・リレーティッド・マーケティング（Cause Related Marketing）」があります。「寄付付き商品」の販売など、自社商品やサービスの販売と絡めた社会貢献型キャンペーンを積極的に実施することにより、お客様との信頼関係を深めて、企業イメージを向上するという付加価値をもったマーケティング手法です。

以下の２社ともに、「女性」を中心としたお客さまから支えられている商品が対象ということもあり、CAREの「女性と子ども」にフォーカスを置いた活動にご共感いただき、協働が実現しました。皆さまもぜひ商品の購入を通して、当団体の活動をご支援ください。

◆株式会社ヤマノビューティメイト 様

琥珀エキス入り高級美容液**「コハクセンチュリーセラム」**

創始者山野愛子様の生誕100周年を記念して、これまで同社を支えてくださったお客様である「“女性”に恩返し」がしたいという思いから本企画がスタート。今年１月より販売が開始された「コハクセンチュリーセラム」の売上の１％が当団体の活動に寄付されます。同商品に関する詳細はhttp://www.doronko.co.jpをご参照ください。

◆丸紅株式会社 様

フィリピン産の新ブランドバナナ**「富楽宝(ブラボー)」**

昨年11月より販売が開始されたフィリピン産の新ブランドバナナ「富楽宝(ブラボー)」の売上の一部が当団体の活動に寄付されます。キャッチコピーは、「”こころ”も”おなか”もいっぱいになろう！」。全国のダイエー店舗ほかにおいて販売されています。ラベル(左)に貼られている、かわいい「ブラ坊」キャラクターが目印です。

理事長就任のご挨拶

(財)ケア・インターナショナル ジャパン理事長　数原 孝憲

この度、「財団法人ケア・インターナショナル ジャパン」の理事長に就任致しました。故横田弘理事長にお仕えしたご縁で2004年６月理事に就任、あわせて、「ケア・インターナショナル」の理事として本財団の対外活動に従事して参りました。今回、理事長の大任をお引受けし身の引き締まる思いですが、開発途上国の人々ならびに支援者の方々の期待に応えるよう最善を尽くす所存です。

これまで私は、人生の大半を外交官として過ごし、ＮＹ国連代表部、インドネシア、インド、ナイジェリア他に在勤、アイルランド大使を最後に10年前退官しました。また、青年海外協力隊事務局長、ＪＩＣＡ理事を歴任し日本政府のODA活動に深くかかわってきました。そして退官後は二つの「夢」の実現に生きがいを求めてきました。

一つは最も困難な状況にある女性や子どもの幸福と安定した生活への「夢」、途上国の人々への人道支援です。第二次世界大戦後の数年にわたり、私どもは米国CAREの援助物資を受け取りました。私もその支援で育った世代に属し、2005年のCARE創立60周年には、内外の記念集会に参列、感謝の念を新たに致しました。今日わが国は、世界第二の経済大国として、開発途上国の開発と人々の生活向上を支援するとともに、内外の援助団体と協力して貧困・教育・女性のための支援のほか、地球環境保全・災害復旧支援などにも取り組んでいます。その一端を担うことが生きがいです。

もう一つの私の「夢」は私の所属する合唱団の外国公演です。３年前、大学ＯＢ/ＯＧ合唱団の仲間とウィーン公演を果たし、次いで今年、同じ仲間と９月パリ公演を目指しています。ナポレオンの墓のあるアンヴァリッドの教会堂でハイドン没後200年記念コンサートに参加し、ハイドンのミサ曲を歌います。これはCAREの慈善公演で、日本でも同様な公演を催したいと考えています。「自分一人の夢でなく多くの友の夢がほしい(羽仁もと子)」、これは亡き母の座右の言葉でしたが、この二つの「夢」を目指すことが今の私の生きがいとなっています。

他方、本財団理事長としての今年の「初夢」は、「新公益法人」の資格を取得して当財団の安定と発展の基礎を固めることです。この「夢」を実現すべく、現在、役員と事務局スタッフが一つになって鋭意努力しています。どうか、関係各位のさらなるご指導、ご協力、ご支援をお願いし、就任のご挨拶と致します。

2003年11月撮影。日本マラウイ協会会長として、マラウイ大統領招待で現地を訪問。マラウイ派遣青年海外協力隊員と(写真左から２番目)

1995年11月撮影。日本国大使として信任状奉呈後、アイルランド大統領メアリー・ロビンソン閣下と

1985年５月撮影。青年海外協力隊事務局長としてケニアの中学校を訪問(写真中央)。数学教師の安藤隊員(向かって右隣り)と生徒たち

事務局からの報告

日本ユニシスグループ・社会貢献クラブ「ユニハート」寄付団体展示会に出展

当団体は昨年度から、日本ユニシスグループ・社会貢献クラブ「ユニハート」からのご寄付に加え、同社からの同額のマッチングギフトをいただき、ベトナムにおける「HIV/AIDSと人権プロジェクト」をご支援いただいています。

2008年10月15日、同社から寄付を受けた団体が一同に会し、同社主催による社員向けの活動展示会が開催されました。お昼休みを挟んでの約2時間にわたる展示会には、約100名にも及ぶ社員の皆さまが来場され、当団体も展示していた事業紹介パネルや団体紹介リーフレットなどをご覧いただきながら、じっくりと社員の方一人ひとりとお話をさせていただくことができました。今回のプロジェクト実施地であるハノイに出張経験がある社員の方からは、「当社のように海外に拠点をもつ企業にとっても、HIV/AIDSの課題は本当に無視できない課題」と、プロジェクト推進にあたって力強いお言葉をいただきました。

当団体の活動は、多くの企業の皆さまにご支援いただいていますが、今回のように実際に社員の皆さまに直接お話をする機会は限られています。ご寄付に加えて、大変貴重な機会を与えてくださった同社に心より感謝いたします。

ケア・インターナショナル ジャパン支援組織 カンボジア現地視察ツアー

2008年11月23日～24日、ケア・フレンズ東京およびケア・フレンズ岡山の会員13名の方にカンボジア現地視察ツアーにご参加いただきました。ケア・フレンズのカンボジア支援事業「女子教育奨学制度事業」および「コミュニティのための人材育成事業」を通して、中学・高校課程を5年間にわたって支援を受けた奨学生のうち、9名との対談が実現しました。

ケア・フレンズの皆様は、奨学生代表のコサルさんから直接、感謝の言葉を聞き、また立派な女性に成長した女の子たちを前にして、「学校などの施設を建てること以上に、こうして人を育てることの大切さがようやくわかりました」と認識を新たにしてくださったようです。

一方で、奨学生が高校を卒業しても就職先が見つからずに農村に残っていることを懸念される方もいらっしゃいました。現在、ケア・フレンズに支援していただいているココン州の「青年男女の能力向上プロジェクト」では、まさにこの課題の解決に焦点をあてています。ケア・フレンズのご寄付と日本政府の助成金により実現した同事業では、若者が読み書き計算の習得だけでなく、手に職をつけ、収入を得られるようサポートし、貧困から抜け出せるように支援することが目的です。

ツアーに参加してくださった皆様にお礼を申し上げるとともに、今回の視察を契機に、今後もCAREの活動について一層のご理解と継続的なご支援をお願いしたいと思います。

ケア・フレンズ東京、安倍洋子会長のご挨拶

ツアーに参加されたケア・フレンズの皆様と奨学生

会員の皆様とマンスリー・ギビング・プログラム参加者の皆様に対する**特典のご案内**

このたび、会員(個人賛助正会員／準会員)の皆様とマンスリー・ギビング・プログラム(MGP)参加者の皆様にお届けする、「CARE Paper Blog(ペーパーブログ)」(年3回発行予定)を創刊しました。毎回、現地事業に携わるスタッフが、支援地域の人々の日常生活や自らの体験談など、ライブ感溢れる現地情報を紹介します。

さらに、2009年中にこれらの会員の更新手続きをしてくださった方とMGPに継続して参加してくださった方、そして、新たに会員またはMGPへの参加をお申込みくださった方に、支援地域の人々の写真入りポストカードと、株式会社ラブ・ラボ(www.rub-lab.com)のご協力により製作されたCAREロゴ入り携帯クリーナー付ストラップをプレゼントさせていただきます。ロゴ入りクリーナーを携帯に付けていただくことでCAREを身近に感じていただいたり、ポストカードをご友人にお送りいただくことで、CAREの活動をより多くの人に知っていただくきっかけ作りにしていただければ幸いです。

なお、これらの特典は、他の郵便物の送付時に同封させていただきますので、お一人お一人のお届け時期が異なりますことをご了承ください。皆様の会員、MGPへのご参加をお待ちしております！

ベトナム「HIV/AIDS予防事業」終了報告と新規事業紹介

事業部　濱岡 良子

終了報告 「カントー橋建設にかかるHIV/AIDS予防事業」の成果

ベトナム政府よりカントー橋の建設を受注した大成・鹿島・新日本製鐵ＪＯより、HIV/AIDS感染の危険性が高い労働者を対象としたエイズ予防事業の委託を受け、2006年２月～2008年８月にかけてこの事業を実施しました。

橋の建設などのインフラ開発では出稼ぎ労働者や移動労働者が雇われ、建設現場に一時的に滞在します。多くが男性である単身労働者が、家族から離れた寂しさや開放感、異郷で暮らすことの疎外感などから、娯楽を求める傾向があります。建設現場付近ではこれらの人々を顧客とするさまざまなビジネスが繁盛しますが、中には性産業も含まれ、エイズを含む性感染症の拡大が懸念されます。この事業では、カントー橋建設に関わる建設労働者とコミュニティの人々のHIV/AIDS感染のリスクを減少させるために、労働者や性産業従事者への情報提供や啓発、企業の健康管理者およびヘルス・クリニック関係者の能力向上、感染リスクの高い娯楽施設における情報提供・コンドームの普及などを行ってきました。その成果として、以下の点が挙げられます。

企業の健康管理担当者とヘルス・クリニック関係者を対象としたHIV/AIDSや性感染症に関するカウンセリングのトレーニング実施風景

- 建設労働者の性感染症に関する意識と知識が向上し、コンドーム使用率（自己申告に基づく）とコンドーム購入率が増えた。
- 性産業従事者の中から選ばれたピア・エデュケーター（同世代の知人などに伝える役割を担う人）の能力が向上し、仲間たちへの感染予防の普及活動が行われた。普及活動に用いられた感染予防のリーフレットは性産業従事者だけでなく、その顧客やカラオケ、レストランにも配布された。
- 感染リスクの高い娯楽施設（カラオケ、レストラン、ホテル）経営者の感染予防活動への参加は、事業開始時はゼロだったが、2008年２月までに22回に増えた。このような店ではコンドームやリーフレットが置かれており、感染予防の普及を促進している。
- 企業の健康管理の担当者とヘルス・クリニック関係者のHIV/AIDSや性感染症に関する知識およびカウンセリングスキルが向上した。また、カントー市内のHIV/AIDSと性感染症を取り扱う医療機関の照会システムが確立し、労働者が活用するようになった。

新規事業 「地域におけるHIV予防および偏見・差別の軽減事業」

■基本情報

活動期間：2008年11月～2009年４月（６カ月間）
地　　域：ベトナム カントー市 ニ・キウ、チャイ・ラン、ビン・トゥイ、オ・モン地区
対 象 者：地域住民、大学生、工場スタッフ、歓楽施設の経営者、HIV陽性者

前述の「カントー橋建設にかかるHIV/AIDS予防事業」では、建設労働者を主な対象とした取り組みを行いましたが、引き続き大成・鹿島・新日本製鐵ＪＯの支援を受け、地域コミュニティを主な対象とする新たなHIV/AIDS予防と偏見・差別を軽減するための事業を開始しました。

カントー市が位置するメコン地域では経済社会状況が急速に変化しています。特に人々の移動や移住が増加し、HIV感染拡大の原因となっており、カントー市はHIV感染の危険性が高い地区として認識されています。

HIV陽性者の多くは注射による薬物使用者や性産業従事者で、HIV陽性者に対する偏見や差別が存在します。地域社会の否定的な態度のために、HIV陽性者は医療やその他の社会サービスにアクセスすることが困難になっています。地域住民のHIV感染リスクやHIVの感染経路についての理解向上をはかることにより、新たなHIV感染の予防を促進できると同時に、HIV陽性者への偏見や差別の軽減にもつながるといえます。

この事業は、CAREとカントー市のエイズ予防センターが協働で実施しています。啓発イベントや路上キャンペーンを通じて、カントー市市民、特に若者におけるHIV感染リスクの高い行動の抑制およびHIV陽性者への偏見・差別の軽減を目指します。

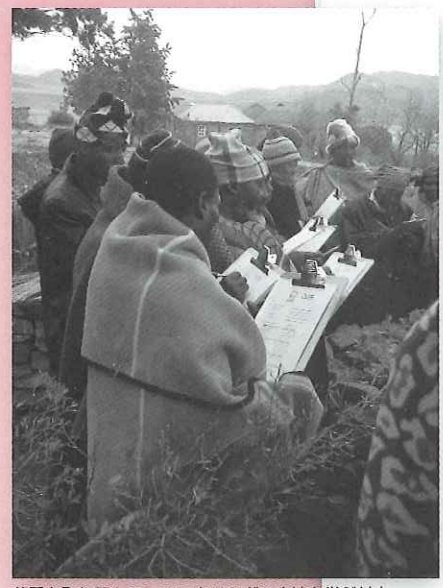
レソト王国

センク川渓谷における干ばつ被災者の栄養改善事業 終了報告

事業部　貝原塚 二葉

レソト王国

皆で協力して菜園作り



菜園を取り囲んで、モニタリングの方法を学ぶ村人

コミュニティにおけるミーティングで、支援する対象世帯を選定するため、真剣な表情で話し合う村人たち

南アフリカ共和国(以下、南ア)に周囲を360度囲まれた国、レソト王国。この国は、2006年～2007年にかけて、過去30年間で最悪の干ばつに見舞われました。この干ばつにより、レソト国内で生産される主要作物であるメイズ（白とうもろこし）などの農作物の出来高は激減しました。また、一部隣国である南アからの輸入に頼っていたものの、世界規模の気候変動や食糧価格高騰などの影響により、レソトの人々の置かれた状況は非常に深刻でした。手に入る作物が不足し、特にエイズ患者や孤児など影響を受けやすい人々の栄養状態が悪化しました。

そこで、ケア・インターナショナル ジャパンは、(特活)ジャパン・プラットフォームの助成金を受け、2008年4月よりセンク川渓谷東側において干ばつ被災者に対する支援を開始しました。山岳地帯の多いレソト国内においても、センク川渓谷周辺は特にアクセスが悪いなどの理由から、支援が十分に届いていない地域でした。この事業では、主に以下の活動を行いました。

- ●女性や子どもが中心である世帯・HIV陽性者およびエイズ患者を抱える世帯・特に貧しい世帯などを対象に、栄養改善のための家庭菜園設置の支援
- ●家庭菜園設置のためのボランティアの農業普及員の研修
- ●家庭菜園設置のための道具と種子の配布
- ●家庭における子どもの栄養状況の把握と栄養に関する知識向上を目的としたボランティアのコミュニティ・ヘルス・ワーカーに対する研修

家庭菜園を通じた栄養改善
～円形菜園と地表型菜園の設置と野菜栽培

野菜を購入することが難しい貧困家庭において、家庭菜園(円形菜園あるいは地表型菜園)を作り、作物を栽培して、必要な栄養を摂取することができるよう、支援を行いました。家庭菜園の設置にあたっては、すべてCAREからの支援に頼るのではなく、準備から実施までコミュニティが主体となった協議に基づく形で行われました。石や土壌の確保など菜園設置に必要な資材の準備にも、コミュニティが主体的に関わりました。

まず、支援対象地域である11コミュニティでは農業普及員(合計22名　男性：13名、女性：9名)が選出されました。菜園設置にあたっては、研修を受けた農業普及員がCAREの技術指導を受けながら、村人に対して家庭菜園や点滴灌漑キット(チューブ付き水タンク)設置のデモンストレーションを実施し、さらに各家庭におけるフォローアップも行いました。孤児のみで暮らしている世帯がデモンストレーションに参加しやすく

するために、学校においてもデモンストレーションが行われました。参加者たちはとても積極的に学び、熱心に作物を育てようとする姿が見られました。この事業の支援対象者でない村人たちの中にも、デモンストレーションに自主的に参加し、自ら家庭菜園を設置して活用する人々もおり、村人たちの家庭菜園に対する高い関心がうかがわれました。

事業終了時までに、活動対象地域11コミュニティ756世帯において、円形菜園が合計1,000個、地表型菜園が合計1,340個、設置されました。また、菜園設置に必要な道具と５種類の野菜の種子（ほうれん草、にんじん、トマト、かぶ、ビートルート）および点滴灌漑キット778セットを配布しました。

コミュニティ・ヘルス・ワーカーに対する栄養改善研修

レソトでは、各村に主に女性から構成されるボランティアのコミュニティ・ヘルス・ワーカーがおり、村人の健康相談への対応、５歳児以下の体重・身長測定、治療が必要な村人に対する最寄りの医療機関の紹介や輸送支援などの活動を行っています。しかし、政府はコミュニティ・ヘルス・ワーカーの能力向上を目的とした研修などを行っておらず、ヘルス・ワーカーたちの能力にもばらつきがあり、村人の健康状態などについて正確に把握されていない状況でした。コミュニティ・ヘルス・ワーカーとクリニックとの連携も弱く、必要に応じた措置がとられていないなどの問題が生じていました。

そこで、コミュニティ・ヘルス・ワーカーが子どもの栄養状態を正しく把握し、村人を対象とした栄養に関する講習会や家庭訪問の際に適切な栄養指導を行うことができるよう、ヘルス・ワーカーの能力向上のための研修を実施しました。ヘルス・ワーカーたちのレベルにあった現地語（ソト語）の研修用教材が乏しかったため、（特活）シェア＝国際保健協力市民の会の協力で派遣された日本人栄養専門家のアドバイスを得ながら、既存の研修内容の改定を進めました。

研修やその後のフォローアップの結果、ヘルス・ワーカーたちは、きちんと乳幼児の身長や体重を測ったり、記録をつけることができるようになりました。また、５歳児以下測定や村での集会、クリニックや病院での妊婦を対象とした母親健診などで、研修を受けたコミュニティ・ヘルス・ワーカーによる栄養や健康に関する講習会が実施されるようになり、主に母親たちが栄養についての知識を得るよい機会となりました。講習会のトピックは、妊産婦の高栄養摂取の重要性、乳幼児の食事、栄養失調にかかる５つの原因、乳幼児がどのような症状を発症した際にクリニックに連れて行くべきかなど11のトピックがあり、毎回、１トピックずつ取り上げられました。また、研修を受講したコミュニティ・ヘルス・ワーカーが所属するクリニックや病院では、改定された現地語の研修教材を使って彼らが自主学習を行うようになりました。以前は、きちんとした研修がなく、このような取り組みがほとんど行われていなかったことを考えると大きな前進です。この活動を通して、活動対象地域11コミュニティ69村から35名のコミュニティ・ヘルス・ワーカーが研修を受けることができました。

この事業の対象地域であるセンク川渓谷は、各村、各コミュニティへのアクセスの悪さから、なかなか支援が届かなかった地域でしたが、地域住民の積極的な参加が得られたことで、７カ月という短期間にもかかわらず、ある程度の成果を得ることができたと思います。しかし、この事業で支援した家庭菜園の普及・定着やコミュニティ・ヘルス・ワーカーのさらなる能力向上は長期的に取り組むべき課題です。現在、CAREレソトの現地スタッフにより、その後のフォローアップが行われています。ケア・インターナショナル ジャパンでは、今後、さらにこの事業の成果を確実にするための後続事業を実施する計画です。

ボランティアのコミュニティ・ヘルス・ワーカーを対象とした研修風景

研修で子どもの体重を測定するための器具の使い方を学ぶコミュニティ・ヘルス・ワーカーたち

CARE STORY

CAREストーリー
～ ガザ地区 ～

「学校に爆弾が落ちたとき、友だちはそこにいたのかな？」

ガザ地区CARE現地事務所
プロジェクト・マネージャー　Jawad Harb

2008年12月末から約３週間にわたって、パレスチナ自治区のガザ地区では、イスラエル軍による激しい攻撃が続きました。激しい爆撃のため、CAREのプロジェクトも中止せざるを得ない状況となり、CAREのガザ地区現地事務所のスタッフは自宅で身を潜め、あらゆる物資が不足する中、なんとか生き延びるだけで精一杯の状況でした。

以下は、そんな状況でまさにその瞬間、感じることを現地スタッフが記したストーリーです。彼は、2002年からCAREのガザ地区現地事務所で働くパレスチナ人スタッフです。以下のストーリーのほかにも、爆撃地で感じることをつづったストーリーが当団体ホームページに掲載されています。ぜひご覧ください。

◆　◆　◆

（2009年１月11日　現地時間午後12時）

私の息子の学校は今日、空爆によって破壊された。Ziadはまだ６歳で、９月に学校に行き始めたばかりだ。彼は学校が大好きで、特に好きなクラスは体育と美術だ。息子は絵を描くことが大好きなのだ。

しかし、この恐ろしい攻撃が始まってからの16日間、息子は学校に行くことができないでいるし、友だちにも会っていない。次々起こる攻撃と眠れぬ夜が続く中、Ziadが唯一楽しみにしていたのは、学校にまた行くことができるようになることだった。しかし今や、その学校も完全に破壊されてしまった。

兄弟からこの知らせを聞いたZiadは、驚いたことに、無言のまま、ただ銅像のように立ち尽くしていた。普段ははしゃぎ回っている少年が、５分間、一言も言葉を発することができなかったのだ。「パパ、僕は学校でもう友だちと会えないの？」ようやく、息子は私にこう聞いた。そして、「学校に爆弾が落ちたとき、友だちはそこにいたのかな？」。彼は苦しそうにこう聞いた。

私は息子を落ち着かせようとあらゆる努力を試みたが、Ziadは約一時間、激しく泣き続けた。それから夜になり、また苦しみと私たちが一番恐れている時間が始まる。絶え間なく続く空爆だ。爆弾が落とされる中、Ziadの熱が上がっていった。彼はベットで嘔吐（おうと）し、顔色は青白くなり、これまでに見たこともないほど具合が悪く見えた。

医者であるいとこを呼んだのは午前３時だった。しかし彼が診察する限り、Ziadの身体に悪いところは何もないと言う。

Jawadの６歳の息子、Ziad　(C)CARE

Ziadは朝８時に目を覚ますと、こう言った。「パパ、僕、もう学校には行かないよ。また爆弾が来たら怖いから」。

私は自分には何もできないことがあまりにも悲しく、涙が止まらなかった。この２週間、私は父親として、子どもたちが感じる恐怖や気持ちへの理解を示すことができていない。自分の目の前で子どもを失いつつあると感じる恐ろしさほど、つらいものはない。

＊ケア・インターナショナル ジャパンでは、ガザ緊急募金へのご寄付を受付中です。詳細は、ホームページをご覧ください。ご不明な点は事務局までお問い合わせください。皆様のご協力をお願いいたします。

CARE Notice Board

皆様の応援メッセージが、東ティモールの子どもたちに届きました！

昨年４月、支援者の皆様に、紙製定規に東ティモールの子どもたちへのメッセージを書いていただくことをお願いし、多くの皆様から温かいメッセージ入りの定規をお送りいただきました。当団体では、メッセージ一つひとつに英語の翻訳をつけて東ティモールのCARE事務所に送付、現地スタッフが、それをさらに東ティモールの言語であるテトゥン語に翻訳しました。

そして、新学期が始まった昨年の11月初め、皆様のメッセージが添えられた定規が子どもたちに手渡されました。現地事務所スタッフから、「子どもたちはみんな大喜びでした」という報告が届いています。皆様のおかげで、東ティモールの子どもたちに、日本にも彼らのことを思い、支援している人たちがいるのだということを伝えることができました。ご協力いただきました皆様に、子どもたちに代わり、心からお礼を申し上げます。

受け取った定規と現地語で書いたメッセージを見せる子どもたち

私の名前はアントニアです。皆さんのことが大好きです。

こんにちは。メッセージを受け取ることができてうれしいです。日本の子どもたちと遊びたいです。

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol.11
2009年2月28日発行（季刊）
発　行　人：野口 千歳
編　　集：菅沼 みゆき

財団法人 ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel. 03-5950-1335　Fax. 03-5950-1375
E-mail. info@careintjp.org
www.careintjp.org

＊このニュースレターのデザイン・レイアウトは、CAREのデザインボランティアさんのご協力により、制作されています。

CARE World

Vol. 10 ケア・インターナショナル ジャパン Newsletter October 2008

ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREのメンバーです。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

Contents

page 1 企業とCAREのパートナーシップ

page 4 事務局からの報告
ケア・サポーターズクラブ大分総会／ミャンマー・サイクロン被災者支援活動 スタッフ帰国報告会を開催／日本テレビ「24時間テレビ」で、CAREのカンボジア事務所が支援する子どもたちの様子が放送されました

page 5 バングラデシュ・サイクロン緊急支援活動報告

page 6 スリランカ After-TEA プロジェクトの終了にあたって

page 7 ミャンマー・サイクロン被災者支援活動の現場から

page 8 CARE Notice Board

企業とCAREのパートナーシップ

日産自動車の社会貢献活動 人道支援について

日産自動車株式会社
グローバルブランドコミュニケーション部 菰田(こもた)雄士

■日産自動車の社会貢献活動について

日産は、利益ある成長を遂げながら、将来にわたって持続可能な企業であることを目指し、企業市民として社会の持続可能性を実現するために、「教育への支援」「環境への配慮」「人道支援」といった分野を中心に、さまざまな社会貢献活動を行っています。活動にあたっては、日産が掲げるビジョン「人々の生活を豊かに」のもと、一企業市民として同じビジョンや目的をグローバルに共有した上で、それぞれの国や地域の実情に配慮し、社会との共生に根ざした活動を展開しています。人道支援の分野においては、主に緊急災害支援で社会に貢献しており、一番最近の事例では、岩手・宮城内陸地震における義援金の寄付が挙げられます。

■スマトラ島沖大地震での日産の緊急支援

2004年12月26日に発生したスマトラ島沖大地震に対し、翌2005年1月6日、日産は総額1億円の緊急支援とグローバルレベルでの従業員募金活動の実施を決定しました。その後、複数のNGOと対話を繰り返し、スリランカにおいてはケア・インターナショナル ジャパン(以下、CARE)との協働を選択しました。当社がこれまで、「ニッサン童話と絵本のグランプリ」などの活動を通じて次世代育成への貢献を行ってきたことと、「子どもの心のケアプロジェクト」で傷ついた子どもたちのメンタル面でのサポートを計画したCAREの困難な状況にある子どもに寄せる思いが合致し、プロジェクトをスタートさせることになりました。プロジェクトスタートまでに多くの時間を費やしましたが、遅すぎるということはなく、それだけ大きな被害であったとも言うことができるでしょう。

■CAREと パートナーシップを組んで

被災地支援は必ずしも当初描いたような計画で進むものではありません。CAREとのプロジェクトにおいても、子どもたちを取り巻く環境、家庭や学校、コミュニティなど、刻一刻と変化していきました。被害の大きかった南部のハンバントタ県に、日産の支援は届けられましたが、当初は学校を中心としたプログラムが組まれていました。

演劇クラスで発表する子どもたち。さまざまなレクリエーション活動への参加を通して、子どもたちの表情も明るくなりつつある

しかしながら時が経ち、次第に問題が各家庭やコミュニティに内在していること、特に貧困層の多いコミュニティに存在していることがCAREおよびボランティアの活動を通じて明らかになってきました。CAREと日産は再び対話し、計画の変更を決断しました。勇気のいる決断ではありましたが、結果としてより受益者のためになる変更であったと考えています。

歯ブラシを受け取る子ども。「心のケアプロジェクト」では子どもたちが心身ともに健全な生活を送ることができるよう健康促進のための支援として、歯の健康について学ぶ機会を提供した

企業もそうであるように、NGOも運営の透明性やステークホルダーへの説明責任を負う時代となり、経営上求められる質もより高次元になっていると考えられますが、CAREは一NGO団体として、その責任を十分に果たしてくれていると考えています。より一層、企業の関心事や要望にも理解を示していただけるようであれば、そのパートナーシップの可能性はさらに拡がるものと考えられます。

現在、私たちの手元には、今回のプロジェクトの概要を総括したビデオが届けられております。これを社員向けテレビに活用することを計画しており、社員からのフィードバックが楽しみです。

■今後の活動について

日産は人道支援の分野において、今後も協働パートナーを限定することなく、緊急災害の際の支援活動を中心に取り組んでまいります。スマトラ島沖地震被災地支援で得たもの・学んだことをいかし、各NGOの強みや特徴についてさらに理解を深め、効率的かつ実行力のある活動を選択していきたいと思います。「人々の生活を豊かに」。この企業ビジョンをあらためて心に留めて今後も活動にあたっていきます。

「心のケアプロジェクト」を行っていくことで、津波直後には閑散としていた教室にも多くの子どもたちが戻ってきた

■スリランカ津波 事業報告ビデオ制作

事務局長　野口 千歳

スマトラ沖で発生した津波が、インドネシア、インド、スリランカなどで約23万人の命を奪ってから3年余りが経った2008年3月末、「子どもの心のケアプロジェクト」の事業報告ビデオ制作のためにスリランカ南部を訪れました。このプロジェクトは日産自動車株式会社からの支援で実施され、また同社にはビデオ制作費もご支援いただきました。

当団体としては初めての事業報告ビデオ制作となりましたが、最大のチャレンジは子どもたちの「心の回復」という目に見えにくい変化をどのように映像で伝えるかという点でした。しかし撮影を進めていく中で、その変化は、演劇などの課外活動に積極的にまた真剣に取り組む姿勢と希望に溢れた表情、そしてインタビューに答える自信に満ちた言葉から明らかだということに気づきました。カメラが回っていないところでも、「CAREは私の人生を変えてくれた」という言葉を何度も聞き、そのたびに勇気づけられました。多くの方にこのビデオをぜひ見ていただき、CAREの緊急支援から復興支援に至るまでの活動、そしてその成果を実感していただきたいと思います。

また、このビデオ制作にあたり、現在、映画やCMなどで大活躍の国際派女優、木村佳乃さんにナレーションをお願いしました。紙面を借りて、心よりお礼申し上げます。

＊DVD（パソコンで再生可）の貸し出しを行います。ご希望の方は、当団体事務局までご連絡ください。

スリランカ

スマトラ沖津波復興支援 子どもの心のケアプロジェクト終了報告

事業部　貝原塚 二葉

2004年12月26日、アジア各国を襲ったスマトラ沖地震とそれに伴う津波から、約４年という月日が経ちました。被災国の一つ、スリランカ南部のハンバントタ県も、津波で甚大な被害を受けた地域でした。4,500人以上が亡くなり、4,000棟以上の家屋が倒壊・破損し、１万7,000人以上が避難生活を強いられました。同県の約14%にあたる約７万人の住民がこの災害で直接的な被害を受けました。

現在は、一見、町も村も平穏を取り戻したかのように見えます。しかし、津波の被害は、インフラや地域経済、産業といった目に見えるものだけではなく、家族やコミュニティ内の信頼関係の低下、社会システムの悪化、女性への暴力の増大、アルコール依存症の増加を引き起こしたと考えられます。この結果、この地域における子どもたちを取り囲む環境は危険な状態に陥っていました。CAREは、ハンバントタ地域において、災害発生直後から支援を開始した数少ない支援組織の一つでした。

ケア・インターナショナル ジャパンは、子どもたちが当然の権利として教育を受け、社会生活における能力と適性を高められるよう、また、保護者や教育関係者の能力向上を通じて子どもが学校・家庭・コミュニティの中で精神的にも肉体的にも健康で安全な生活を送ることができるよう、支援活動を展開してきました。

まず、子どもたちの活動の軸となる子どもクラブがハンバントタ県の６つの地域で結成されました。このクラブを通して、子どもたちのリーダーシップ育成のためのトレーニングやこれまであまり機会のなかったスポーツおよび文化・芸術活動が活発に実施されました。また、勉強が遅れている子どもに対する補習や学校教材の提供を行うことで、学校から遠ざかっている子どもたちが再び学校へ通うための支援を実施するとともに、歯の健康について学ぶ機会を通じて自分の健康や体について考える機会を提供してきました。

さらに、子どもに対する直接的な支援だけではなく、子どもが健康で安全に暮らすための環境づくりも重要な活動目標の一つでした。そこで特に貧しい家庭に対する生計支援や学校の設備支援などを行うと同時に、保護者やコミュニティの住民、学校関係者といった子どもを取り巻く人々のキャパシティー・ビルディングや意識の向上をはかりました。

活動を続けていくなかで、当初は活動参加に消極的だった子どもが徐々に積極的に参加するようになり、子どもクラブのリーダーとして活躍する子どももいました。多くの子どもたちが学校に戻り、就学率も災害直後に比べて上がりました。また、保護者、先生、コミュニティなどの大人たちもより前向きになり、子どもたちの保護を第一に考え、彼らが子どもらしく生きていくためにサポートするようになったことは重要な変化の一つです。一方で、これから取り組んでいかなければならない課題もまだ多く存在しています。

これまでの４年間の変化はハンバントタに住む人々が自ら成し遂げたことであり、今後、課題に向き合い、この変化をより持続的・発展的なものにしていくことができるのも現地の人々です。今後は、現地事務所のCAREスリランカが、別のプロジェクトを通してコミュニティの支援を継続していきます。

2008年３月末にスリランカ南部のハンバントタにて行われた撮影風景

■日産自動車広報部「オールスタッフミーティング」にて事業報告

９月９日に日産自動車株式会社 本社２階の講堂で開催された上記ミーティングに事務局長が参加し、「子どもの心のケアプロジェクト」のビデオ報告をさせていただきました。このミーティングには、グローバルコミュニケーション・ＣＳＲ本部サイモン スプロール執行役員をはじめ、広報部の方68名が参加されました。参加者からは、「とても良い活動に日産が貢献できてよかった」「感動しました」「お客様とのコミュニケーションでも活用すべき」など多くの好意的なフィードバックをいただきました。今後、このビデオは、国内の日産ギャラリーなどで放映される予定です。紙面を借りて、ご協力に心よりお礼申し上げます。

事務局からの報告

ケア・サポーターズクラブ大分 総会

８月２日にケア・サポーターズクラブ大分の総会が開催されました。カンボジアのCAREのプロジェクト地を初めて訪れた会員の方が、現地にたどり着くまでの大変な道のり、農村に暮らす人々の生活などについて、見たこと、感じたことをスライド写真を交えて報告されました。また、大分県の広瀬知事のユーモアに溢れた逸話、大分県立芸術文化短期大学の学生さんの演奏、大分県の特産物の販売やバザーなども行われ、活気溢れる会となりました。

ミャンマー・サイクロン被災者支援活動　スタッフ帰国報告会を開催

７月18日にソニー株式会社　御殿山テクノロジーセンターNSビルの会議室にて、「ミャンマー・サイクロン被災者支援活動スタッフ帰国報告会」を開催しました。被災者支援のための緊急募金にご支援いただきました企業や関東近辺にお住まいの個人寄付者の皆さま、30名にご参加いただきました。

報告会では、６月12日～７月12日までロジスティックス担当として現地で活動してきた事業部スタッフ貝原塚（かいはらづか）二葉が、最新の映像や写真を織り交ぜながら、CAREの現地での活動や被災地の状況、今後の中長期的ニーズなどについて説明しました。参加者からは、「緊急物資の内容」や「軍事政権下での支援活動の難しさ」などについて踏み込んだ質問やご意見が寄せられるなど、関心の高さを伺い知ることができました。また、報告会終了後には、複数の方より「写真や映像を多用していて非常に興味深い内容だった」とのコメントをいただきました。

当日は、発表したスタッフが通信社からの取材を受けるとともに、報告会の様子が撮影されました。なお、詳しい報告内容については、本誌７ページ目の「ミャンマー・サイクロン被災者支援活動の現場から」の記事、もしくは当財団ホームページをご覧ください。

最後に、今回の緊急募金では、200件を超える個人や企業の皆様より、総額 計32,472,873円（2008年７月末現在）にもおよぶご支援をいただきました。紙面を借りて、心よりお礼申し上げます。また当日会場をご提供くださいましたソニー株式会社様にも重ねてお礼申し上げます。

現地での支援活動は着実に進んではいるものの、まだまだ回復には遠い道のりです。これからも引き続きミャンマーにおける支援活動に対してご関心をお寄せいただき、ご支援・ご協力いただきますよう、お願いいたします。

日本テレビ「24時間テレビ」で、CAREのカンボジア事務所が支援する子どもたちの様子が放送されました

８月31日、毎年恒例の「24時間テレビ」（日本テレビ）にて、CAREのカンボジア事務所（CAREカンボジア）が支援するＨＩＶ/エイズとともに生きる子どもたちの様子が放送されました。

今回、番組の取材を受けたOur Villageは、CAREカンボジアが支援する現地パートナー団体、New Hope for Cambodian Children（NHCC）が運営する施設です。この施設では、ＨＩＶに感染している子どもたち、家族がＨＩＶに感染していたり家族がエイズで亡くなってしまった子どもたちなどをサポートしています。８月初旬に、今年の24時間テレビのメインパーソナリティを務める人気グループ「嵐」のメンバーである松本潤氏がOur Villageを訪れ、撮影がなされました。

番組の中では、現在、カンボジアにおけるＨＩＶの主な感染経路である母子感染によってＨＩＶに感染した子どもたちが普通の子どもと同じようにはしゃいで遊ぶ様子を写しながらも、毎日決まった時間に薬を飲むことで命をつないでいる様子や母親にエイズを移してしまった父親に対する少女の複雑な思いなどを、映像を通して伝えていました。エイズとともに生きる子どもたちの現実の一端を多くの視聴者の方に知っていただけたのではないかと思います。

放送日当日は、世界のビールを楽しむことができるダイニング・ビア・バーにて特別イベントを開催し、生放送の24時間テレビを皆で見た後、カンボジアとベトナムのエイズプロジェクトのリポートを行いました。特にカンボジアやエイズ問題に関心をお持ちの方が多く来場され、リラックスした雰囲気で楽しんでいただけたようです。

バングラデシュ・サイクロン緊急支援活動報告

事業部　武田 勝彦

2007年11月15日、バングラデシュ南西の海岸部をサイクロン「シドル」が襲いました。政府公式発表（2007年12月31日現在）では、死者3,363人、被災者892万3,259人、損傷家屋152万2,077軒の被害状況が報告されています。この災害により、家、道路、通信手段は破壊され、漁業や農業といった生計手段は壊滅的な打撃を受けました。サイクロン前からすでに貧困に苦しんでいた人々の生活状況はより悪化しました。

活動内容

CAREはバングラデシュにおける自然災害対応の豊富な経験から、サイクロン「シドル」の被害に対して最も早く支援活動を開始しました。特に、以下のとりわけ困難な状況にある人々に対して、支援活動を実施しました。

- ●災害によって夫と離れ離れになった女性、離婚した女性
- ●未亡人が家長となっている家庭
- ●女性が家長をしており、他に稼ぎ手のいない家庭
- ●子ども、特に孤児が家長をしている家庭
- ●妊娠中・授乳中の女性
- ●大勢の扶養者を抱える貧困で脆弱な家庭
- ●高齢者または障害を抱えている人
- ●生計手段を持たない家庭

主な活動内容として、CAREは、被害が大きかった3地区（Bagerhat、Barguna、Pirojpur）において、食糧・安全な飲料水・緊急の避難所（シェルター）・医療サポートなどの提供を行いました。

食糧配布においては、1世帯につきお米、じゃがいも塩、そのほか必要となる食糧を配布しました。また、食糧以外の救援物資として、一時的なシェルターを建てることができるようビニールシートとロープ、さらに石けんやろうそくなどの必需品の配布を行いました。安全な飲料水確保のための活動では、共用の貯水槽の消毒と修繕を行うとともに、1日に1万リットル以上の水をろ過することができる可動式の浄化設備を提供しました。この浄化設備は、1日に最低でも800世帯、約4,000人の人々に安全な飲料水を提供しました。さらにCAREは首都ダッカのコミュニティ病院の医者による医療チームを構成し、被災者の治療に当たりました。

救援物資の配布場所で列を作って並ぶ被災者の人々
©CARE/William Dowell 2007

現地NGOとの連携

被災地には、支援団体などから大量の食糧が届けられましたが、配布が均一でなく、十分な食糧供給を受けている村もあれば、供給を受けられていない村もあるという状態でした。そのような状況の中、CAREの強みはこれまで実施してきたプロジェクトにおける活動でSouth Asia Partnership, Coast Bangladesh and Resouce Integration Centreなど現地NGOと長期的な協力関係を築いてきたことです。現地の市民団体との緊密な関係と現場に持っているネットワークにより、CAREは実際に最も支援を必要としているのは誰なのか、最も効果的な支援物資の配布方法は何なのかということについて、より正確な判断を行うことができました。

サイクロンなどの自然災害に対する対応はスピードが命です。このバングラデシュへの緊急支援では、多くの方々から非常に早い段階でご寄付をいただくことができました。皆様の迅速な対応と温かいご支援に心より感謝いたします。

スリランカ After-TEAプロジェクトの終了にあたって

事業部　尾立 素子

ケア・インターナショナル ジャパンは、スリランカにおいて2003年５月～2006年５月まで実施した「プランテーション居住者の生活改善事業（TEAプロジェクト）」に続く第二期事業として、2006年７月から独立行政法人 国際協力機構（ＪＩＣＡ）との連携により「紅茶農園内住民組織の運営能力向上プロジェクト（After-TEAプロジェクト）」を実施しました。ここでは、2008年６月をもって終了したAfter-TEAプロジェクトの成果と今後の課題についてご報告します。

これまでの成果

After-TEAプロジェクトは、紅茶農園内の約150の住民組織に属する農園内居住者4,500人を対象とし、農園居住者に対する公共・社会サービスを継続的に提供することで、農園コミュニティ内の社会保障システムを強化することを目的として実施しました。具体的には次の３点を目指し、これらのすべての面において成果が見られました。

①農園内コミュニティおよび住民組織と農園経営者側双方の連携・コミュニケーションの強化

②住民組織の運営能力の強化

③農園内外の公共・社会サービスのための連携システムの構築

コミュニティおよび住民組織と農園経営者側双方の連携・コミュニケーション強化については、住民組織と農園経営者の協力を促す目的で、意見交換の機会を提供したことで、関係者間のコミュニケーションや協力体制が改善され、お互いへの理解が深まりました。

住民組織の運営能力にも大きな変化が見られました。住民組織自ら各種研修で学んだ知識を生かし、農園コミュニティ内の道路整備など小規模インフラ事業を計画、実施しました。また、住民が必要とする行政サービスの提供を可能にするため、他団体や行政担当者と調整を行うなど、活動面で大きな役割を果たしました。

公共・社会サービスのための連携システム構築の面では、出生届けなどの行政書類や医療・就職情報の取得、ローンの申込みといった、これまで農園内で受けられなかった多くのサービスの利用が可能になりました。また、第一期事業において設置されたインフォメーション・センターは、第二期事業でも会議・情報交換・サービス提供の場として最大限に活用されました。

農園内に建設されたトイレ。住民組織が自ら計画を立て農園内の生活環境改善に向けて、小規模なインフラ整備を行っている

今後、事業で実施してきたさまざまな活動やインフォメーション・センターで提供されるサービスは、引き続き農園経営者からの協力を得ながら、すべて住民組織の主導によって継続されます。

インフォメーション・センターは、会議・情報交換・サービス提供の場としてさまざまな役割を担っている。写真は、農園内の青少年を対象とした補習の様子

今後の課題

２年間のAfter-TEAプロジェクトの成果を振り返って今後、改善が期待される点がいくつかあります。まずインフォメーション・センターで提供するサービスの多様化です。現在、行政書類や就職情報が得られるなど有益なサービスが提供されていますが、より多様なニーズに応えていく必要があります。例えば、収入向上に役立つ技術訓練の提供、お年寄りや子どもにとっても有益なサービスの提供などが挙げられます。さらに、住民組織が活動を主導していくために、現地NGOなどによる住民組織リーダーへの訓練が継続して行われていくことも必要です。

最後になりましたが、皆様の温かいご支援のおかげで、第一期・第二期事業とも計画通りに活動を進め、成果を出すことができましたことを心より感謝いたします。スリランカの紅茶農園におけるケア・インターナショナル ジャパンの支援は終了しましたが、今後は現地事務所のCAREスリランカが紅茶農園の住民たちと共に生活改善・福祉向上のための活動を継続していきます。

ミャンマー・サイクロン被災者支援活動の現場から

事業部　貝原塚 二葉

2008年５月３日、大型サイクロン「ナルギス」がミャンマーを襲いました。CAREはサイクロン発生直後から緊急支援チームを構成し、食糧や安全な水の供給、衛生用品や家庭用救援セットの配布を行うとともに、48万戸以上が被害にあった被災地で住宅の修復および再建の支援を継続して実施してきました。サイクロン発生から２カ月目に、まだ災害の影響が生々しく残る被災地域に滞在したときの状況についてリポートします。

サイクロン発生から２カ月経過した７月３日、CAREのミャンマー現地事務所の緊急支援チームメンバーと視察のために被災地へと向かいました。これは、サイクロン発生直後から実施している支援活動の状況を確認すると同時に、最新の現場の情報を自分たちの目と耳で把握し、状況の変化に応じた対応をするための視察でした。

被災地に入って行くにつれ、現場の状況がよく見えてきました。２カ月が経過した今も根こそぎ倒された木々や破壊された家屋、ただ残された家の土台などは、サイクロンの威力のすさまじさを物語っているようでした。そして、もう一つ見えてきたのは支援活動を難しくしている要因の一つである、被災地までのアクセスの悪さです。非常に状態の悪い道を何時間も進まなければなりません。また雨が降ればさらに悪化してしまいます。そして、CAREが支援を行っている村には、多くの場合、ボートに乗って１，２時間、さらに小さなボートに乗り換え、数十分揺られてようやくたどり着きます。支援物資の運搬となると、一度に運べる量は限られてしまいます。

支援地域の村まではボートで行く。写真は、雨と満ち潮で増水した船着場を歩くスタッフ

サイクロンで破損した船を修復する村人たち。被災地では被害を受けた船が多く見られた。大小の川が張り巡らされた地形のイラワジ・デルタ地区では、船は重要な交通手段

このような困難な状況の中、村での人々の様子は至って日常的な生活風景であるように思いました。多くの人が忙しそうに働き、商店や朝のマーケットは非常に活気があり、徐々に被災地域は落ち着きを取り戻しつつあります。よく見ると、村人たちが助け合いながらサイクロンで壊れた家の修復をしたり、壊れた船を修理したり、あるいは支援物資の運搬作業にボランティアとして参加するなど、彼らなりの復興への参加がその活気を生んでいるのだと気がつきました。今回の現場視察を通して、ミャンマーの人々がお互いに助け合い、生活再建へ向けてそれぞれが努力する姿に、彼らの力強さ、たくましさを感じました。

ようやく届いた支援物資を受け取り、明るい表情で運ぶ被災者の人々

ケア・インターナショナル ジャパンでは、サイクロン発生直後からの緊急支援に続き、復興へ向けた支援の一つとして、農業支援をすでに開始しています。農繁期の始まった被災地において、サイクロンですべてを流された人々がすぐに農作業を開始できるように、トラクターや種もみを配布すると同時に、必要に応じてトラクターの維持・管理の技術的サポートなどを行います。ミャンマーの人々はお米を主食としています。特に被害の大きかったイラワジ・デルタ地域は、ミャンマーでも有数の稲作地帯です。そこで、この地域の人々が生活を再建し、自立することは、ミャンマーの人々が自国米を確保することにもつながり、CAREの支援の中でも重要な活動の一つなのです。

「食糧をもらうことはありがたいけれど、それよりも自分たちの手で作物を育て、収穫したい」と、ある農家の男性が話していました。これは、この地域で被災した多くの人々の気持ちを代弁しているようでもありました。被災地が本当に復興するまでにはまだ多くの時間と努力を要しますが、人々がこのような気持ちを持っていることは、ミャンマーで活動を続けるCAREにとっても大きな希望であると強く感じました。

CARE Notice Board

新しい寄付サイトのお知らせ

世界的なスポーツブランドなどの広告を手がけるワイデン＋ケネディ トウキョウの全面的協力と、システム会社やデザイン会社など複数の企業によるマルチパートナーシップが実現し、インターネットでの新しい寄付システム「careギフト」が11月10日に誕生します。

「careギフト」は、大切な人にプレゼントを贈るときのお金と気持ちを、寄付という形で地球のどこかで貧困に苦しんでいる人々に届け、代わりに、あなたの大切な人には支援を受ける地域の人の笑顔の入った E カードまたはポストカードが送られる、というシステムです。「careギフト」サイトを訪れた人は、「care country（ケア・カントリー）」に入国し、支援パッケージをショッピング感覚で購入することによって、寄付をすることができます。また、この体験の中で、貧しい国の人々が置かれている状況について知ることもできます。

大切な人のお誕生日、特別な記念日、入学のお祝い、母の日、父の日などにぜひ、「careギフト」をご利用ください。

「careギフト」のURLは

www.caregift.jp

日産自動車の社会貢献活動
www.nissan-global.com/JP/CITIZENSHIP

NISSAN

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol.10
2008年 10月31日発行（季刊）
発 行 人：野口 千歳
編 集：菅沼 みゆき
＊このニュースレターのデザイン・レイアウトは、CAREのデザインボランティアさんのご協力により、制作されています。

財団法人 ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel. 03-5950-1335 Fax. 03-5950-1375
E-mail. info@careintjp.org
www.careintjp.org

がんばろー山田
希望
平成23年10月11日
第2号
仮設住宅情報発信所発行

味処舟源さん豊間根にオープン

豊間根の国道沿いにオープンした『味処舟源』のオーナー斎藤富雄さんは、震災前、大槌町でお店を構えていたそうです。残念ながらお店は被害を受け、再開することも悩まれたそうですが、ご友人の力添えもあり、豊間根で再開することができたそうです。

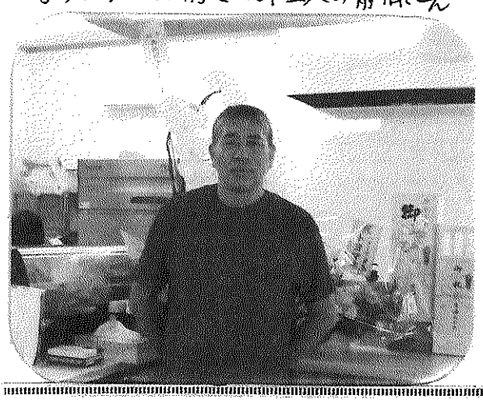
来店してくださったお客様が料理を食べて笑顔になってくれたり、かつての常連のお客様が立ち寄ってくださるのが何よりも嬉しいそうです。来年で開店30周年だったそうですが、また一から頑張っていきたいと笑顔を見せてくれました。お店が軌道に乗ったらまた改めて大槌町にもお店を持ちたいとおっしゃっていました。『初めて来店してくださったお客様が、また行きたいと思ってくれるような料理を提供できるように、常に心がけています』と、斎藤さんは、お話しくださいました。

看板メニューの天ぷらやお刺身の他に、定食もご用意しているそうです。そろそろ、いろいろな食べ物がおいしい季節になります。『味処舟源』で秋の味覚をたんのうしてみるのは、いかがでしょうか。

とても、おいしかったです。

- 場所　ホームセンターサトーさんとなり
- 営業時間　11時30分～14時　17時～21時30分まで
- 定休日　月曜日

カウンターの前で御主人の斎藤さん



山田町の希望の花

町内を車で通る度に、国道沿いの花だんによく手入れがされた花が並んでいるのが目に留ります。側に立てかけられている看板には、山田町の復興へ向けたメッセージや、ボランティア団体へのお礼の言葉と一緒に『北浜老人クラブ』と書いてあります。

北浜老人クラブの事務局長をされている東海林和彦さんからお話を聞くことができました。北浜老人クラブでは、毎年花だんへの植栽活動をしていたそうです。三陸国道事務所の協力もあり、花だんの増設をしたり、夏だけでなく春の花も植栽するようになり、山田北小学校PTAのおやじの会と協力しながら活動していた矢先の震災だったそうです。震災後は、瓦礫の撤去や復興へ向けての活動がメインとなっていたそうです。そんなとき、ボランティア団体から花の種や苗をいただき一緒に植栽活動をしたのがきっかけとなり、今まで手掛けていた花だんの手入れをし直し、活動を再開することができたそうです。今は北浜だけにとどまらず、豊間根から船越方面まで『山田花の会』という会を立ち上げ、活動されているそうです。国道沿いに、色鮮やかな花が並び、その光景にホッとするのは私だけではないと思います。そんな皆さんが作りあげて来た花だんがたくさんの方の目に留まり、一人でも多くの方の気持がなごんでもらえたらいいなと思いました。

思い出の写真展

山田町社会福祉協議会では、10月末から津波で標流していた写真の展示会を開催します。今回の展示会では、ボランティアの協力によりきれいに洗浄した写真を展示し、希望される方には、その場で渡してくださるそうです。大切な思い出の写真が一人でも多くの方の手に戻りますようにと願っているそうです。

写真展示会
- 期間　10月29日・30日
- 時間　9時から16時まで
- 場所　旧山田病院3階

思い出のある大切な写真さがしてみませんか！

いま、仮設住宅川柳の掲載を考えています。問題はどうやって集めるか？決まりましたら、投稿をお願いしますね。

仮設では……

お知らせ

◎仮設住宅の入居期間

仮設住宅への入居期間が当初2年3ヶ月となっていましたが、県などの判断で一年ごとに延長できるようになりました。従って入居期間は、復興状況を見極めながら延長されることになると思います。

◎被災者生活再建支援金の申請期間

被災者生活再建支援金の加算支援金とは、震災により住宅が著しい被害を受けた世帯に対し、住宅の再建方法に応じて、建設・購入の場合は200万円が支給される支援ですが、その申請期間は震災の日から37ヶ月となっています。しかしこの申請期間についても復興状況を見ながら延長できることになっていますので、復興状況によって必要な期間延長がされることになると思います。

◎被災者相談センター

被災された方のための相談センターが設置されています。船越防災センター・山田町中央コミュニティセンター2階豊間根生活改善センターで、午前9時から午後5時まで受け付けています。気軽に相談に出かけてみてはいかがですか。

協賛　ケア・インターナショナル　ジャパン

CARE World

Vol. 9 ケア・インターナショナル ジャパン Newsletter July 2008

ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREのメンバーです。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

Contents

page 1 パキスタン緊急支援活動 終了報告

page 3 企業最前線 ～南アフリカ

page 4 事務局からの報告
ケア・インターナショナル ジャパン支援組織講演会／「アジアの祭典 チャリティーバザー」に今年も出展／「アースデイ東京」に初参加！／「アフリカン・フェスタ」にも初参加！

page 6-7 ベトナム訪問記
～HIV/エイズ 偏見と差別をなくすために
私スタイルのCAREライフ
CAREボランティアメンバー 門田 りえ

page 8 CAREストーリー ～ミャンマー
「ミャンマーのすべての人々にとっての悪夢」
CARE Notice Board

パキスタン緊急支援活動 終了報告

2007年6月に巨大なサイクロンがパキスタン南部を襲いました。

このサイクロンは、大雨・高波・洪水を引き起こし、パキスタン南西部２州と山岳部１州に甚大な被害をもたらしました。災害から１カ月以上経っても、水没したままの被災地さえありました。この災害の発生を受け、ケア・インターナショナル ジャパンは、７月13日～23日の間、スタッフ２名を南部のシンド州に派遣し、災害被害の調査を行いました。住居を失った被災者のうち、他地域に親類縁者のいる人々や経済的に余裕のある人々は既に別の地域に移っていましたが、頼る親類縁者がいなかったり、経済的に余裕のない貧困層の人々は、水の及ばない幹線道路沿いや川の土手などで、防水シートで屋根を作っただけの簡易テントで避難生活を送っていました。その数は、シンド州カンバー・シャダッドコット県内だけで、推定約17万人。政府・国連・NGOなどによる被災地調査では、被災者の多くが家屋と共に衛生環境を維持する上で必須の生活用品、トイレや水場などの施設を失ったことが明らかになりました。安全な水やトイレが十分に確保されない状況の中、被災者の間で下痢や皮膚感染症など劣悪な衛生状態に起因する健康への悪影響が出ていました。

水が引いた後、避難所から村に戻ってきた人々。住居が全戸なくなってしまった村もあり、手に入る木材などで仮の住居を作って生活する被災者もいた

ケア・インターナショナル ジャパンはこのような状況をふまえ、ジャパン・プラットフォームによる事業助成金を得て、スタッフ1名をプロジェクト・マネージャーとして現地に派遣し、最も支援が届いていない地域の一つであったシンド州カンバー・シャダッドコット県ワラ郡で、衛生状態の改善による感染症の予防・治療・流行拡大の阻止を目的とした緊急支援事業を開始しました。

この事業では、「保健医療」「水・衛生」「物資配布」の3つを柱として活動を行いました。

■「保健医療」の活動

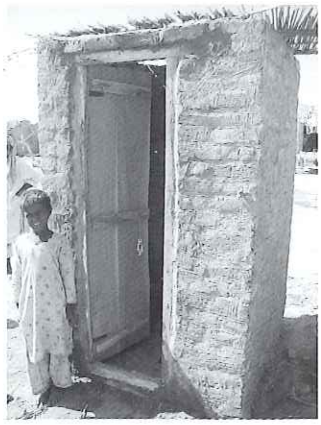
避難キャンプにおける劣悪な衛生状況が原因で発生している下痢や皮膚感染症などに対応するため、医師・女性医師助手・医療専門家各1名から構成される診療チーム2チームが避難キャンプなどを巡回しました。支援が届いていない地域や女性と子どもが多い村を優先的に巡回し、基本的な治療を行うとともに、より高度な医療が必要な患者には設備の整った医療施設への照会も行いました。また、下痢などの水因性疾患・コレラ・マラリア・蛇による被害などのケースを監視し、感染症の流行を予防するための措置を講じました。

診療チームは3カ月間に153箇所を巡回、協力NGOや村開発委員会との連携により、モスクの放送を使った事前告知活動が功を奏し、当初の見込みより45%増のおよそ1万7700人が診療にやって来ました。この巡回診療を通して、母子保健と衛生環境に対する意識の向上が被災者の間に見られるようになっています。

巡回診療にて被災者の診察にあたる医師

■「水・衛生」に関する活動

感染症を予防するために、安全な水と衛生状態を確保することが重要であるため、井戸とトイレの設置を行いました。当初は、避難キャンプに簡易なハンドポンプ式の井戸とトイレを設置する計画でしたが、水没した地域の水が引いた後、避難していた人々が予想以上に早く村に帰還し始めたため、避難キャンプではなく、村に恒久的に使用可能なハンドポンプ井戸とトイレを設置する計画に変更しました。最終的には、93箇所に150式のハンドポンプ井戸と、1～3世帯に1式、合計250式のトイレを設置しました。現在、井戸は約2万人、トイレは約5,400人の人々に利用されています。



村に設置されたハンドポンプ式の井戸(左)とトイレ(右)

■「物資配布」の活動

衛生状態の改善と安全確保を目的として、被災者のニーズに最も適合する12品目の衛生関連品(水浄化剤、水瓶、ふた付きのバケツ、石けん、蚊帳、マットレス、女性用生理用品、サンダルなど)を配布しました。住宅被害が深刻で生活再建がより困難な未亡人や高齢者などの500世帯を対象としました。物資の配布に関しては、計画段階から物資を受け取る被災者の選定・配布に至るまで、各村の村開発委員会の全面的な理解と協力を得て実施しました。

CAREの支援活動では、必ず住民や住民組織に計画段階から参加してもらうようにしています。今回のパキスタン緊急支援事業でも、被災者や住民組織にそれぞれの活動の計画・実施に関わってもらいました。それによって、保健医療活動では効果的な告知を行うことができ、より多くの人が診療を受けることができました。また、「水・衛生」の活動では、事業開始前には想定していなかった被災者の早期帰還による彼らのニーズの変化にも柔軟に対応することができました。さらに、個々の被災者や住民組織が一体となり、計画・実施することで、住民間の結束・協力体制が強化されました。

また、今回の緊急支援事業では、現地のパートナーNGO(Family Planning Association in Pakistan, Pirbhat Women & Development Society など)、現地行政機関(シンド州保健局、ワラ郡行政府)、国連機関(WHO、ユニセフ)などと連携して、活動を行いました。それぞれの団体のもつ専門性や経験を組み合わせることによって、より効率的で効果的な活動を実施することができました。

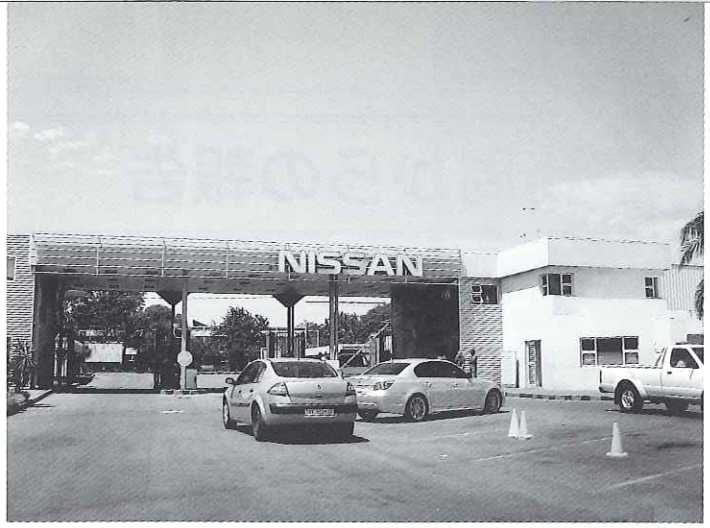
4カ月間にわたって緊急支援事業を行った結果、被災住民の衛生状況を改善することができ、懸念された感染症の流行を未然に防ぐことができました。

＊パキスタン・サイクロン緊急支援募金(受付期間：2007年7月～2007年12月)には、個人および企業の支援者の皆様から合計210万5979円が集まりました。皆さまの温かいご支援に心より感謝いたします。

(事業部インターン 齊藤 佳央里)

企業最前線
～南アフリカ

事業部　武田 勝彦



首都プレトリア近郊の産業地区にあるNissan South Africa(PTY)Ltdの建物

■企業の抱えるリスクとコスト・南アのエイズ問題

喜望峰、ダイヤモンド、アパルトヘイト、ネルソン・マンデラ、ルイボス茶、BRICS、2010年ワールドカップ……。南アフリカ共和国を連想させるものはたくさんある。そして、HIV/エイズもこの国の代名詞となりつつある。500万人以上の人が感染しており、世界で最もエイズ感染者が多い国となっている。急速な経済発展を続けるこの国にとって、HIV/エイズは労働力を奪う結果となっている。労働者がどんどん亡くなっているのである。外国企業の進出が増えているが、労働者のHIV/エイズ問題は企業にとってリスクとコストとなっている。

Standard Chartered Bank、Mercedes-Benz South Africa(Pty) Ltd.、BMW(SA)(Pty) Ltd. などの欧米企業は、自社の労働者と顧客を守るために、積極的にエイズ対策を講じている。一方、日系企業の対策はそれほど進んでいない。日系企業の進出を促すJETRO(日本貿易振興機構)は、日本の企業が参入しやすいようにエイズ対策の情報を収集し、提言を行っているが、意識の差は欧米企業と日系企業とでは開きがあるようだ。しかし、南アのエイズ問題こそ、日本政府・日系企業・市民社会という官民パートナーが、互いの強みで互いの弱みを相殺し取り組んでいける場であろう。

■Nissan South Africaの取り組み

今回、首都プレトリア近郊の産業地区にあるNissan South Africa (PTY) Ltdを訪問した。コーポレートアフェアーズ・コミュニケーション部のQolo氏とヘルスサービスマネージャーのDr.Rajooに会い、Dr.Rajooから同社のヘルスケアについての説明を受けた。HIV/エイズ対策は、社員健康プログラムという同社のプログラムで行っており、①エイズ予防、②エイズ治療、③モニタリング・評価、④コミュニティ支援の4つの柱から成る。

具体的な内容としては、啓発キャンペーン、研修、自発的カウンセリング・検査(VCT)などを実施して予防し(①)、VCTを通して認識されたエイズ感染者に薬品を処方して治療を行う(②)。また、VCTへの参加と行動変容をモニタリングし、評価を行うとともに(③)、近隣住民の中からコミュニティ・カウンセラーを育成したり、同社の教訓を取引業者と共有している(④)。予算の関係上、労働者が住むコミュニティでの啓発活動にまでは対策があまり及んでいないようだ。

また、Qolo氏から同社の地域貢献活動の説明を受けた。移動眼科検診機器を搭載できる車両の寄贈、地方自治体が子どもたちに書籍を配布するための車両の提供、孤児院への物資配布などを行っている。

今後は、同社と近隣コミュニティに向けたHIV/エイズ啓発活動について協議する予定である。

事務局からの報告

ケア・インターナショナル ジャパン支援組織講演会

CAREを長年支援してくださっているケア・フレンズは、現在、全国に３組織あります。今年も、恒例の講演会を楽しみにされている多くの方々にご来場いただき、各地で盛大に開催されました。

ケア・フレンズ岡山　講演会

３月１日に岡山プラザホテルで北大路欣也さんをお迎えして講演会が行われました。初めてお芝居に魅了された少年時代から、木村拓哉さんと共演なさった「華麗なる一族」の撮影談、そして携帯電話の広告で白犬の「お父さん」の声で大活躍されている現在までを、あの威厳のある声で語ってくださいました。

ケア・フレンズ東京　講演会

３月22日にグランドプリンスホテル赤坂で開催されたイベントでの講演者は、曽野綾子さんでした。自らボランティア活動に精力的に取り組んでいらっしゃる曽野さんは、カンボジアなどでの支援活動を通して経験されたさまざまなチャレンジ、そしてボランティアをする側の心構えや責任などについてお話しくださいました。

ケア・フレンズ札幌　講演会

６月２日に札幌パークホテルで由紀さおりさんと安田祥子さんをお迎えして、童謡とトークを中心としたチャリティ・コンサートが開催されました。日本の唱歌と合わせて昔懐かしい日本のお話をしてくださったほか、歌を通したボランティア活動について語ってくださいました。

講演会でのチケットやバザーの売り上げから、多額のご寄付をいただきました。紙面を借りて心よりお礼申し上げます。

「アジアの祭典　チャリティーバザー」に今年も出展

４月16日、ANAインターコンチネンタルホテル東京にて、毎年恒例のアジア婦人友好会主催「アジアの祭典」が開催されました。アジア各国からの料理や民芸品が販売され、例年通り多くの方が来場されました。CAREは横田評議員をはじめとする多くの方のご協力のもと、出展させていただき、Ｔシャツやバッグなどを販売しました。特に今年初めて販売した子ども用Ｔシャツは大好評でした。今年も当日のバザーによる収益をご寄付としていただきました。紙面を借りて、ご協力いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

「アースデイ東京」に初参加！

あいにくの天気でしたが、ブースには環境問題や国際協力に関心のある方が立ち寄ってくれました

４月19日(土)、20日(日)の２日間、代々木公園で開催された「アースデイ東京」にCAREは今年初めて出展しました。「地球のことを考える日」、アースデイ。気候変動など環境問題がクローズアップされることの多い昨今、CAREが取り組む活動とは一見関連が薄いように思われがちですが、環境の変化は貧困問題・食糧問題などCAREが支援する途上国の人々の生活に深刻な影響を与えています。

CAREブースでは、水問題・貧困・飢餓などさまざまなことを見て、触って、考えて世界とつながっている実感を持ってもらいたいと、「プチ体験」を企画しました。ブースを訪れ、プチ体験に参加してくださった方々にとって、何かを考え、始めるきっかけになったことを期待します。両日とも強風に悩まされ、雨に降られるといったあいにくの天気の中、ブースまで足を運んでくださった皆さん、お手伝いいただいた皆さん、ありがとうございました！

「アフリカン・フェスタ」にも初参加！

晴天に恵まれた５月17日(土)、18日(日)の両日、第４回目のアフリカ開発会議(ＴＩCAD Ⅳ)の開催地である横浜において「アフリカン・フェスタ2008」が開催されました。ケア・インターナショナル ジャパンは、今年の４月からレソトにおいて初のアフリカ事業を開始したことから、初めてこのイベントに参加しました。会場となった赤レンガ倉庫イベント広場には、暑いぐらいの日差しに陽気な音楽、おいしそうな各国料理のにおいに誘われて、多くの人が来場しました。

CAREでは、今年２月から３月にかけてレソト現地調査へ行ったインターンが特設会場において活動紹介を行ったほか、彼女が撮影・作成したレソト紹介映像をブースで流し、多くの方にレソト、そしてCAREの活動について知っていただく良い機会となりました。駐日レソト王国大使館の大使もCAREブースまで足を運んでくださり、映像を見て大変喜んでくださいました。レソトは、日本においてあまり知られていない国ですが、興味を持っている方、すでにレソトを知っている方や行ったことのある方まで、多くの方がブースに来てくださいました。

ブースまで足を運んでくださった皆さん、お手伝いいただきました皆さん、ありがとうございました！

パソトハットと毛布というレソトコスチュームに身を包むCAREインターン(左)と、ンデベレ族の人形をもとに制作した衣装(？)を着てポーズをとるCAREボランティアスタッフ(右)

CAREブースは、CAREグッズや民芸品に関心を持つ来場者で大盛況！

ベトナム訪問記
～HIV/エイズ　偏見と差別をなくすために

マーケティング部　荒井 康子

■HIV陽性者たちに対する差別と偏見

HIV/エイズに関する知識不足が原因で、HIV陽性者たちはさまざまな場面で偏見や差別に直面する。特に医療施設での治療の拒否や制限は、直接生命に関わる。2004年から2006年にかけて実施された調査結果はとても衝撃的だ。ハノイ市、ホーチミン市、クアン・ニン県の医療従事者の60%がHIV陽性者に触れると感染するのではないかと不安を抱き、11%はHIV陽性者を担当したり、触れたりしないようにしていると答えている。また、政策策定者の90%が、性産業従事者・麻薬摂取者・同性愛者を隔離して精神的に更正させることがHIV感染予防の最良策であると回答している。

このような状況の中、CAREは前述の3地域で、HIV陽性者・医療従事者・政策策定者のそれぞれが、HIV/エイズと陽性者の人権について正しく理解し、HIV陽性者たちが差別をなくすための活動の中心となることで、自信を持って前向きな生活を送ることができるよう、支援している。

■HIV陽性者自助グループの活動

今回のベトナム訪問で、私は5つのHIV陽性者の自助グループのメンバーに会った。その一つのグループの事務所は、首都ハノイから北東に車で4時間ほど、クアン・ニン県ヴァンドン島の簡素な漁師町にある。薬物を摂取した夫からHIVに感染した3人の女性が2004年に立ち上げたこのグループのメンバーは、現在、総勢130人。代表を務める30代の女性、ハンは、夫はその後、薬物を断ち、CAREベトナムのスタッフとして働いていたが、今年3月に亡くなったことを静かに話してくれた。

ヴァンドン島は、船の往来が激しいトンキン湾沿岸の観光地に近く、国境も近いため、薬物の入手が容易である。人々は、生活の厳しさから逃れようと薬物に手を出し、注射針を複数人が共用することでHIVに感染する。グループでは、HIV陽性者やその家族に対するカウンセリング、港湾労働者や女性の性産業従事者などHIV感染リスクの高い人々へのアプローチ、HIV/ エイズの基礎知識や人権に関する法律を周知させるための広報キャンペーンなどを実施するほか、エイズを発症して体調が悪化した人々の家を定期的に訪れてサポートする活動も行っている。

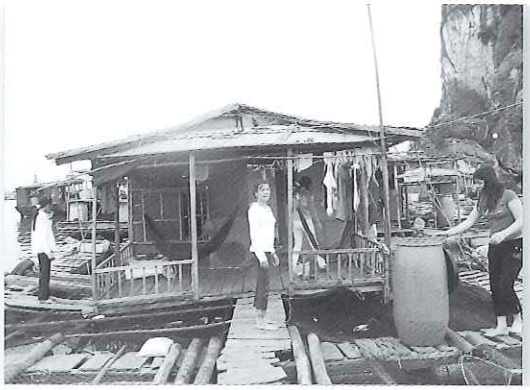
ハンによると、今ではメンバーの9割が、エイズウイルスの増殖を抑える抗レトロウイルス薬治療(ART)を受けられるようになったとのこと。メンバーのある男性は、次のように話してくれた。「以前はただ死ぬのを待つだけだった。差別が怖くて、家族にさえ病気のことを話すのをためらっていた。今はARTのおかげで体調が良くなっただけでなく、生活の質を改善するための知識を得て、地域や行政も私たちの人権について少しずつ理解を示してくれるようになった」。

女性メンバーの一人が、自宅に招いてくれた。港から手漕ぎボートで10分ほど行った場所にある島の脇の海上に、彼女が小さな娘二人と住む家があった。木で作られた質素な一間の家で、部屋の半分が作りつけのベッドになっており、壁には娘の描いた絵や数年前に亡くなった夫の写真が飾られていた。HIV陽性の彼女を雇ってくれる職場がないため、家の周りの木枠と網で囲った海中で魚を育て、それを売って生計を立てている。彼女は、長女は学校での成績が良くて、絵や歌も得意なのだと誇らしげに教えてくれた。私たちの横でくったくなく笑う長女は、グループの広報キャンペーンで歌を歌い、母親たちの活動を支えている。

病院でカウンセリングを受ける女性(左)。HIV感染の可能性がある妊婦などが訪れる。院内にはCAREが提供したHIV/エイズに関する資料が配布用に設置されている

■大学生を対象とした広報キャンペーン

ヴァンドン島からハノイに戻った私は、「フェイス(信頼)」という名の別の陽性者自助グループが市内の大学の講堂で行う広報キャンペーンに参加した。最初にハノイ・エイズ予防センターの副所長が、HIV感染を防ぐ10項目の助言をメロディーに乗せて歌い、学生たちの心を一気に引き付けた。さらに画像やグラフなどを使ってHIVや人権に関する基礎的な情報を学生たちの日常生活と関連づけながら説明した。その後、フェイス・グループのメンバーによる歌と踊りが始まり、会場は学生たちの歓声と熱気に包まれる。グループの代表3名が、自らの経験を語る場面もあった。30代前半の男性メンバーは、大学生のときに遊び心から薬物を試して感染したことを話し、絶対に薬物に手を染めないで欲しいと訴えた。そして最後に、今日学んだことに関するクイズ大会まであり、会場はさらに盛り上がった。驚いたのは、2時間のキャンペーンの最初から最後まで、学生たちが興味を持ち続けて参加できるよう運営されていたことと、実際に彼らは楽



海上にある木造の家に住むＨＩＶ陽性者

しみながら確実にエイズの知識を身につけていたことである。このキャンペーンは新聞やテレビでも取り上げられ、ハノイだけでなく、さまざまな地域からイベント実施の依頼があるとのことだった。

■偏見・差別へのさらなる挑戦

今回、訪れた５つのＨＩＶ陽性者自助グループは、行政・医療関係者・学生・地域の人々など異なる対象に、偏見や差別を取り除くためのアプローチを行っている。どのグループも、以前と比べて状況はとても良くなった、と話している。彼らと出会い、最も強く印象に残ったのは、その明るさと自信に満ちたエネルギーである。しかし一方で、イベントの壇上で堂々とＨＩＶへの理解を訴えるグループ代表者が自分の子どもの学校には病気のことを隠していたり、ＡＲＴは受けられるようになったものの医療現場での差別は簡単には変えられないといった声も聞かれるなど、今も多くの課題が残されている。生きていくために収入を得る方法を模索しながら、病気だけでなく偏見や差別とも日々対峙し、それを変えるために自ら行動するという、健康な人間でも体力や精神力を要する取り組みをＨＩＶ陽性者たちが行っていることの大変さ。彼らが時折、垣間見せる「疲れ」から、それが強く感じられた。それでも、ハンが言った謙虚な言葉の中に、今後のさらなる大きな変化が見えたような気がした。

「まず、私たちＨＩＶ陽性者自身が変わり、自分で自分を差別することをやめることによって、医療関係者や行政の考え方も変えることができると信じています」。

陽性者自助グループによる広報キャンペーンの様子。技術系の大学の講堂で行われたこのイベントの参加者は、大半が男子学生。彼らは、エイズの正しい知識を身につけるのにとても意欲的だ

私スタイルのCAREライフ

CAREボランティアメンバー
門田 りえ

昨年の「世界難民の日」に関連して国連大学で開催されたイベントにて(一番右が筆者)。スタッフ、ボランティアさんと

～ やってよかった！～

私が国際協力に興味を持ったのは、小学生のころ経験した阪神大震災がきっかけでした。年月が流れると、震災で味わった不便さがまるでウソみたいに、何不自由ない生活が当たり前のようになっていました。しかし、このあまりの違いと、それを当たり前のように受け入れている生活に疑問を覚えました。今、手に入れている幸せを「当たり前」に思ってはいけないと感じるようになりました。私は家族に恵まれ、衣食住には困らない生活ができています。しかし、世界中には環境に恵まれず不自由な生活を強いられている人が数多くいる。「自分には関係ない」と済ませるのではなく、どんどん関わっていきたいと感じるようになりました。そんな中、出会ったのがCAREでした。

CAREでは、イベントへの参加やメルマガ作成に関わっています。初めてメルマガ会議にお邪魔したとき、会話の中で国際協力に関する単語がバンバン飛び交っていたことに度肝を抜かれたのを覚えています。わからない単語だらけで、自分の知識のなさを反省しました。しかし、これを機会に知識を吸収しようと、メルマガ作成に参加するようになりました。毎回奮闘しながら原稿を書いていますが、いろんな人から意見をもらい、修正を重ね、完成した原稿を見ると、多くの人に支えられていることを実感し、書き上げた達成感でいっぱいになります。

初めは「何か自分にできることがあれば」とCAREのボランティアに応募したのですが、いざ活動してみると勉強になることばかりで、今では自分のためになっています。NGOってかなり敷居が高いイメージがあったのですが、あの時、勇気を振り絞って応募してみてよかった！本気でそう思えます。これからも、自分のできる範囲で活動を続け、それが結果として支援につながればいいなと考えています。

メルマガメンバーと、事務局にて

お米を布に包んで持ち帰る被災者。ヤンゴンにて　©CARE

CAREストーリー
～ ミャンマー ～

ミャンマーのすべての人々にとっての悪夢

文・写真：CARE緊急支援チーム　Yiyi Cho

2008年５月20日
サイクロン発生後、私はまず娘のことを考えた。多くの家が損傷したり、破壊されたりして、CAREのスタッフは衝撃を受けていたが、今は皆、忙しくしている。ショックを受けて立ち尽くしている場合ではないのだ。しかし、やはり自分の国がこのような大被害を受け、被災した人々を見るのはつらい。皆、家族や友人など誰かが被害に遭っているのだ。

２日前、海の近くに位置するある村を訪れた。サイクロンからすでに２週間がたっていた。村に行く途中、二人の小さな子どもの遺体を目にした。二人とも私の娘と同じくらいの年齢だ。私の娘は９歳である。一人の母親として私は衝撃を受け、目をそらさずにはいられなかった。

彼らの母親はどこにいるのだろう、もし母親が生きていたら、子どもを亡くした彼女がこれから経験しなければならないであろう苦難はどのようなものだろう、と私は思った。そして、自分だったら何をしただろう、娘を救うことができていただろうか、と考えた。

村で年老いた女性に会った。70歳とのこと。サイクロンが襲ってきたとき、彼女は洪水から身を守るために木によじのぼって一命をとりとめたそうだ。彼女には中学２年生と小学４年生の二人の孫がいるが、二人とも海の近くの水田で働く両親のところに行っていた。サイクロンによる嵐は、孫とその両親の命を奪った。そして、この女性は家族全員を失い、独り、後に残されてしまった。

CAREは、生存者にろうそく・衣類・毛布などの必需品を含む5人家族用の救援キットを配布している。この女性は救援キットの中身をほかの家族に寄付した。失った娘、義理の息子、そして二人の小さな孫のことを想いながら。

多くの人々が食糧を求めて路上に座っている。彼らの家は破壊されてしまった。これは、ミャンマーのすべての人々にとって悪夢である。人々は助けを求めている。彼らが求めるのは、何はさておきお米である。シェルターと食糧が人々にとって最も重要なのだ。私たちが支援をすると、人々はまた来てほしいと言う。そして、ほかに支援を必要としている人々がまだいる、と話す。

私たちは、明日再びこの村に来て、もっと多くの食糧や救援物資の配布を行う予定である。私はまたこの年老いた女性を探すだろう。

９歳の娘は、被災者を助けるために私がどんなことをしているのか、たずねる。私はこのように答える。私にできることすべてをやっているのよ、と。

＊ケア・インターナショナル ジャパンでは、サイクロン発生直後からサイクロン被災者支援のための緊急募金ご協力の呼びかけを行い、2008年6月15日現在、14,870,972円のご支援が寄せられています。ご支援いただきました皆様に、紙面を借りて心よりお礼申し上げます。

CARE Notice Board

定期支援のお願い

ケア・インターナショナル ジャパンでは、毎月、決まった金額をご支援いただく、「CARE マンスリー・ギビング・プログラム」にご協力いただける方々を募集しています。継続的で安定したご寄付は、途上国の人々の自立を助けるという息の長い活動を、より確実に、より効果的に進めることを可能にしてくれます。ぜひご協力をお願いいたします。

CAREマンスリー・ギビング・プログラムとは

1000円単位でご自由にお決めいただいた定額寄付金を、毎月１回、ご指定の金融機関や郵便局の口座から自動的に引き落とすことで、継続的にCAREの活動をご支援いただく制度です。なお、自動引き落としに手数料はかかりません。また、ご連絡いただければ、寄付額の変更やご寄付の停止にもすぐに対応いたしますので、安心してご参加ください。

CAREマンスリー・ギビング・プログラムに参加いただいた方には

世界各地で行われている支援活動についての最新情報やコミュニティの人々の生の声などを紹介するニュースレターを随時お届けするとともに、年１回発行する「年次報告書」で、ケア・インターナショナル ジャパンの活動内容や運営状況について詳しくご報告いたします。

そのほか、個人賛助会員（年会費 1口 10,000円）や個人準賛助会員（年会費 1口 5,000円）も随時募集しています。

「CAREマンスリー・ギビング・プログラム」や会員制度への参加をご希望の方は、以下までご連絡ください。すぐに、関係資料をお送りさせていただきます。多くの皆様のご参加をお待ちしています。

(財)ケア・インターナショナル　ジャパン
募金・個人会員担当
TEL: 03-5950-1335　FAX: 03-5950-1375
E-mail : monthly@careintjp.org

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol. 9
2008年７月31日発行（季刊）
発　行　人：野口 千歳
編　　集：菅沼 みゆき

財団法人 ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel. 03-5950-1335　Fax. 03-5950-1375
E-mail. info@careintjp.org
www.careintjp.org

CARE World

Vol. 7 ケア・インターナショナル ジャパン Newsletter October 2007

ケア・インターナショナル ジャパンは、世界70カ国で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREのメンバーです。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

Contents

page 2 2007年度事業計画

page 5 事務局からの報告
ケア・インターナショナル ジャパン 支援組織講演会
広島平和記念資料館にて60年前の「ケア・パッケージ」を展示
世界難民の日イベントに参加 ほか

page 7 東ティモール「テトゥン語民話集出版プロジェクト」最新報告 事業部 竹中 宏美
私スタイルのCAREライフ CAREボランティアメンバー 稲垣 佳奈

page 8 CAREストーリー ～パキスタン「両親も家も失い、自らの命も危機的状況に置かれた少年がCAREの支援を受けて…」
CARE Notice Board

パキスタンにおいて緊急支援事業を実施中

現地で活動を行うプロジェクトマネージャーの熊澤ゆり

2007年6月にパキスタン南部を通過したサイクロンは、

南西部2州と山岳部1州の広範囲に雨・高波・洪水による大きな被害をもたらしました。ケア・インターナショナル ジャパンは、7月13日～23日の間、スタッフ2名を避難生活者が約17万人にも達する南部シンド州の視察に派遣しました。

視察時には、被災地は広範囲にわたって水没しており、幹線道路沿いや川の土手には、頼る親類のいない貧困層の人々が主に防水シートで屋根を作っただけのテントで生活していました。安全な水やトイレが十分に確保できず、被災者の間に下痢・皮膚感染症など劣悪な衛生状態に起因する健康への悪影響が出ていました。CAREはこの状況をふまえ、ジャパン・プラットフォームによる事業助成金を得て、最も支援が届いていない地域の一つであるシンド州カンバー・シャダッドコット県ワラ郡で、衛生状態の改善による感染症の予防・治療・流行拡大の阻止を目的に緊急支援事業を開始しました。

プロジェクト開始から2カ月が過ぎた現在、モンスーンは終了して水没していた地域でも水が引き、ワラ郡では避難していた人の85%が元の村に帰還していると推定されています。しかし住宅、公共施設を含む建物、農耕地、家畜への被害は深刻で作物が全滅した地域も多く、被災者の生活の再建は容易ではありません。安全な飲み水やトイレも確保できないため衛生状態は相変わらず劣悪で、下痢、気管支炎、皮膚感染症のほかマラリアや蛇による被害も発生していますが、一部の医療保健施設はまだ活動を再開できる状況にはありません。種もみを食料にし始めた人たちもおり、住民の栄養不良が深刻になっています。避難民が滞在していて授業を再開できない学校も少なくありません。

CAREは現在、住民が帰還した村を中心にハンドポンプやトイレの設置、巡回診療を継続しています。医師・女性医師助手・医療専門家各１名から成る診療チームが2つワラ郡内を巡回し、基本的な医薬品類を使った治療、およびより高度な治療が必要な場合には設備の整った医療施設への照会を行っており、１日に200人程が受診しています。また衛生状態改善と安全の確保を目的に水浄化剤、水瓶、バケツ、石けん、蚊帳、サンダル、マットレス、女性の生理用品を配布しています。対象は住宅被害が深刻で生活再建がより困難な未亡人、高齢者、障害者などの500世帯で、同時に女性スタッフによる水浄化剤の使用方法を含む衛生教育を行っています。

（プロジェクトマネージャー　熊澤 ゆり）

ケア・インターナショナル ジャパン
2007年度 事業計画

ビジョン

CAREは、貧困が克服され、人々が尊厳をもって安全に暮らすことのできる、希望に満ちた、寛容で公正な世界を目指します。私たちは、貧困の根絶に向けた世界的な動きの中で、グローバルな知見と起動力を発揮し、選ばれる存在となります。そして、人々の尊厳に対する私たちの揺るぎない姿勢が、世界中の人々に知られるようになります。

ミッション

CAREの使命は、世界の最も貧しいコミュニティにおける個人や家庭を支援することです。グローバルな多様性・資源・経験を強みとして革新的な解決策を導き出し、世界の一員として果たすべき責任について提言します。私たちは、次のことを通して永続的な変化を促します。

1. 自立のための能力を高める
2. 経済的機会を提供する
3. 緊急時に救援を届ける
4. あらゆるレベルで政策提言を行う
5. すべての形態の差別に取り組む

現地コミュニティの意志に導かれ、私たちは人々が享受するにふさわしい、質の高い、そして思いやりのある活動を通して使命を達成します。

＊ケア・インターナショナル ジャパンは、本年度から、CAREの組織全体が用いている英語のビジョン、ミッションの表現に沿った日本語表現を使用することにしました(基本的な考え方が変更になったということではありません)。

世界では、一日一ドル以下の貧困下で暮らす人の数が1994年から2004年の間に1.35億人減ったと言われていますが、依然として10億人の最貧困層が存在します。また、世界の非識字者の三分の二が女性であり、男女の格差はいまだに顕著です。2006年の時点でエイズとともに生きる人は4000万人、同年にエイズで命を落とした人の数は290万人に上ります。さらに、地球温暖化の影響により干ばつや洪水に悩まされ、安定した生活が脅かされているコミュニティが増加しています。

日本国内においては、これらの世界規模の課題に関する一般市民の関心が深まり、特に2008年に日本で開催されるG8サミット（主要国首脳会議）などにも関連して、さまざまなＮＧＯが一般市民対象のキャンペーンや政策決定者へのアドボカシー活動を計画・実施しています。

本年度の焦点

2004年9月にケア・インターナショナル ジャパンの長期計画「グランドプラン」の実施が始まり、2007年3月～4月にかけて中間レビューを行いました。その結果、今後さらなる財政基盤の強化をはかり、貧困解決への貢献度を高めるために、「人道支援（緊急・復興）」「ＨＩＶ/ＡＩＤＳ」「女性と子ども」にフォーカスを当てていくことを決定しました。今年度から上記3つのテーマを、国際協力事業（緊急・復興・開発）、国内活動（アドボカシー、キャンペーンなど）およびマーケティング活動（ファンドレージング・広報）に反映させていきます。同時に、寄付・会費および協賛金・助成金などを組み合わせた適切な規模の事業を展開して、限られた予算の中での効率的な組織運営と活動効果の向上をはかり、日本国内およびグローバルなＣＡＲＥのネットワークにおける当団体の特異性を生かした貢献方法を模索していきます。

支援活動の概要

本年度は、現在実施中のカンボジア、ベトナム、スリランカ、アフガニスタンにおける事業に加え、昨年度から検討しているカンボジア、インドネシア、パキスタンの事業を開始します。また、初のアフリカ地域案件として、レソトでの事業の開始を目指します。緊急支援事業に関しては、アジア地域における自然災害の発生に備えるとともに、アフリカおよび中東の難民支援に関する情報収集を進め、今後の対応を検討します。

また、本年度の課題として日本の市民社会との連携を掲げ、日本で活動を展開する団体・企業・学校などとの関係構築、2008年度に日本で開催されるG8サミット（主要国首脳会議）やＴＩＣＡＤ　ＩＶ（第4回アフリカ開発会議）に関連するＮＧＯネットワークへの参加などを行っていきます。

■活動計画

1．開発支援事業

①コミュニティのための人材育成事業（女子教育奨学制度事業Ⅱ）

対象地域：カンボジア カンダール州ルックダイク地区
対 象 者：女子教育奨学制度事業で高校に進学した奨学生
実施期間：2004年10月～2007年9月
主支援者：ケア・フレンズ岡山
ケア・フレンズ東京

この事業は、前事業の女子教育奨学制度事業で高校に進学した奨学生62名が、就学を継続し、コミュニティの発展に役立つ知識・技能を身につけることを目標としています。

本年度は、奨学生たちの高校課程の修了を支援すると同時に、コミュニティに必要な知識・技能を習得し、それをコミュニティの人々と共有するための活動を継続して行います。2007年8月の卒業資格認定試験の終了後、コミュニティでのワークショップなどを実施して、この事業は終了します。

②スマトラ沖津波復興支援 子どもの心のケアプロジェクト

対象地域：スリランカ 南部州
ハンバントタ県アンバラントタ、ティッサマハラマ、スーリヤウェワ
対 象 者：アンバラントタ、ティッサマハラマ、スーリヤウェワの津波で直接的・間接的な被害を受け、子どもの心理的・精神的な問題が深刻であると判断された6村の約600世帯3000人
実施期間：2005年4月～2008年3月
主支援者：一般寄付、学校、日産自動車株式会社

この事業は、2004年のスマトラ沖津波により被災した子どもたちの心の傷が癒され、心身ともに健全な生活を送ることができるようになることを目標としています。

本年度は、最終年度として、昨年度に引き続き被災地域のコミュニティの子どもの心理的・精神的ニーズに着目し、学習を再開、継続するための支援を行います。また、支援が終了した後もコミュニティが子どもを支える活動を継続できるよう、コミュニティ・ボランティアなどの能力向上のためのプログラムを実施します。

③コミュニティ運営による 初等教育プロジェクト

対象地域：アフガニスタン 南東部および中央部の遠隔農村地域
対 象 者：アフガニスタン 南東部および中央部9州の遠隔農村地域の教員、コミュニティの人々と生徒3038名および地方教育行政機関
実施期間：2004年7月～2008年6月
主支援者：ケア・フレンズ岡山（山陽放送株式会社）

この事業は、教員・コミュニティ・地方教育行政機関の能力を高め、コミュニティ運営による学校での活動を通して遠隔コミュニティの生徒が質の高い初等教育を受けられることを目標としています。

本年度も、教師やコミュニティ関係者への研修、生徒への教材を提供する活動を継続して行います。

④カントー橋建設にかかる HIV/AIDS予防事業

対象地域：ベトナム カントー県カントー市
対 象 者：カントー橋建設に関わる移動建設労働者と周辺コミュニティの人々
実施期間：2006年2月～2008年2月
主支援者（契約先）：大成建設・鹿島建設・新日本製鐵JO

この事業は、移動建設労働者と周辺コミュニティの人々のHIV/AIDSなど性感染症のリスクを減少させることを目標としています。

本年度は、昨年度に引き続き、ヘルスワーカーや仲間に対して感染防止を働きかける役割を担うピア・エデュケーターを育成しながら、建設労働者と性産業従事者への情報提供、啓発活動、コンドームへのアクセス改善に向けた施策などを継続します。本年度は最終年度にあたりますが、2008年2月に事業終了後、カントー橋の完工まで約10カ月を残すことになるため、約8カ月の事業延長に向け、関係者への働きかけを行います。

⑤紅茶農園内住民組織の運営能力向上プロジェクト

対象地域：スリランカ 中央州およびウバ州にある15の紅茶農園
対 象 者：紅茶農園における住民組織 約100グループ（4500人）
＊間接的には、農園居住者 約40,000人を含む。
実施期間：2006年7月～2008年6月
主支援者：国際協力機構（ＪＩＣＡ）

この事業は、社会的・経済的に外部社会から隔絶された状況にある紅茶農園住民の生活改善を目指した前事業に続く事業です。農園内で行き届いていない公共サービスを紅茶農園住民が活用できるよう、住民組織の運営能力を向上させること、および農園外部からの行政・商業サービス（地方行政、郵便、銀行、地元NGOなど）との連携を定期的なものにし、社会保障システムを強化することを目標としています。

本年度は、昨年度に引き続き、インフォメーション・センターを活用しつつ、住民組織へのトレーニングやミニプロジェクトを実施します。また、本年度は最終年度にあたることをふまえ、農園内外の社会・行政サービス団体や組織とのネットワーク強化に努め、農園での活動やサービス提供に向けた働きかけを行います。

⑥ HIV/AIDSと人権プロジェクト

対象地域：ベトナム ハノイ市、ホーチミン市、クアン・ニン県
対 象 者：ＨＩＶ陽性者、医療従事者、政策策定者
実施期間：2007年5月～2008年6月（全体で3年間を予定）
主支援者（契約先）：日本郵政公社、一般寄付

この事業は、ＨＩＶ陽性者が感染による健康状態の悪化によって弱者となるだけでなく、社会・経済的差別により虐げられている状況を克服すること、また、医療従事者や政策策定者の間でＨＩＶ陽性者に対する理解が深まり、人権が確保されるようになることを目標としています。

本年度は、対象地域のＨＩＶ陽性者、医療従事者、政策策定者それぞれに対する意識向上をはかるため、ワークショップやパイロット・プロジェクトの実施、教材・ハンドブックの作成・配布などの活動を展開します。

2．緊急・復興支援事業

ジャワ島地震復興支援住宅再建プロジェクト

対象地域：インドネシア 中部ジャワ州クラテン県
対 象 者：15世帯 約70人
実施期間：2007年4月～2007年8月
主支援者：一般寄付
＊この事業は、同地区において実施した復興支援事業「水と衛生プロジェクト」「保健衛生改善プロジェクト」に続くプロジェクトです。

この事業は、2006年5月に発生したジャワ地震の被災者の中でも、特に住宅再建が困難な経済的・社会的弱者を対象として、専門的なデザイン、質のよい資材、技術者へのアクセスを改善すること、また、地元の経済システムと労働者を活用しながら建材などを支給することにより、耐震住宅の再建を支援することを目標としています。本年度は、住宅再建を完了し、新しい住宅で被災者が生活を始めることができるように活動を進めます。

3．新事業の開拓

事業資金の調達状況を踏まえつつ、外務省やＪＩＣＡなどの政府系助成金への申請を行い、新たにカンボジア、パキスタン、インドネシア、レソトなどにおける事業の開始を目指します。緊急支援事業については、ジャパン・プラットフォームと連携し、主にアジアにおける自然災害発生時のタイムリーな出動を検討します。また、中東やアフリカ地域における難民支援に関して情報収集を行い、事業形成の機会を得るように努めます。その際、CAREの組織全体の緊急支援方針や緊急支援体制の中で、ケア・インターナショナル ジャパンとして効果的・効率的に活動できるよう、ネットワークの中での連携や協力関係を強化します。

4．その他

2008年に日本での開催が予定されているG8サミット（主要国首脳会議）とＴＩＣＡＤ ＩＶ（第4回アフリカ開発会議）およびこれらに関連する国際会議に向け、2007年度に加入した「2008年G8サミットNGOフォーラム」と「ＴＩＣＡＤ ＩＶ・NGOネットワーク」を通して、ほかのNGOやケア・インターナショナルと連携しつつ、アドボカシー活動を継続します。また、外務省と保健分野で活動するNGOによるＧＩＩ/ＩＤＩ懇談会、ＪＩＣＡ・NGO協議会、日本UNHCR・NGO協議会などへの参加を継続するとともに、当団体の重点分野である「人道支援」「ＨＩＶ/ＡＩＤＳ」「女性と子ども」に関連するアドボカシーやキャンペーンに積極的に参加していきます。

国際理解教育に関しては、カンボジアにおける若い世代を対象とする事業やレソトにおける小学校を対象とする事業などに関連し、日本の学校にCAREの事業を紹介し、国際協力への理解を深める機会を提供します。

事務局からの報告

■ ケア・インターナショナル ジャパン 支援組織講演会

6月10日(日)にケア・サポーターズクラブ大分の講演会・総会が開催されました。一年間の活動報告が行われ、来年の計画が承認された後、大分出身の書家、柏木白光氏がダイナミックな筆さばきをご披露されながら、ユーモアに溢れたお話をしてくださいました。アメリカ、フランス、イスラエル、そしてネパールと、世界中を飛び回り、「書」を通して平和のメッセージを訴え続けていらっしゃる柏木氏が大きな屏風に大きく書かれた書は「愛」。生きていく上でいろいろな困難に直面するけれども、お互いに助け合ってそれを乗り越えていくことの尊さを語られ、多くの参加者の心を打つお話でした。

6月13日(水)には、黒柳徹子氏を講演者にお迎えしてケア・フレンズ札幌の講演会が開催されました。今回は同組織の5周年ということで、800人近くの方が出席されました。タンザニアやエチオピアなどアフリカを中心に24年間も支援活動の現場を目の当たりにされてきた黒柳氏の、途上国で起きていることに「関心をもつ」ことがいかに重要かというお話は、大変説得力があるものでした。なお、ケア・フレンズ札幌の皆様から多大なご寄付をいただきましたことに、心より感謝いたします。

■ 広島平和記念資料館にて60年前の「ケア・パッケージ」を展示

1945年当時のCAREの活動の象徴であり、実際に60年前に配布された「ケア・パッケージ(ケア物資)」が7月25日～10月31日までの間、広島平和記念資料館に展示されました。

広島平和記念資料館では、年２回、企画展を開催しており、平成19年度第１回企画展として「海外からの支援－被爆者への援助と込められた再建への願い」を開催しました。企画展は、物質面と精神面の両面で被爆者と広島の復興を支えた海外からの支援や国内で支援に関わった人々などに焦点をあてたもので、広島に寄せられた支援の一つとして「ケア・パッケージ」が紹介されました。会場には、当団体がドイツから取り寄せた60年前の「ケア・パッケージ」および中に入っていた物資のサンプルが、戦後の日本でケア・パッケージを受け取った人々の写真数点とあわせて展示され、広島を訪れる人々に当時のCAREの活動について知っていただくよい機会となりました。

＊当団体では、当時、ケア・パッケージを受け取られた方やケア・パッケージに見覚えのある方からの情報を求めています。情報提供いただける方は、当団体事務局までご連絡ください。

■ 世界難民の日イベントに参加

6月20日の世界難民の日に国連大学で行われたイベントに出展し、CAREブースにてCAREグッズや民芸品の販売などを行いました。スターバックス コーヒー ジャパン 株式会社様からはコーヒーをご提供いただき、大変好評でした。また、UNギャラリーでの展示に出展し、CAREがインドネシアにおいて実施した「マドゥーラ避難民の生活復興支援プロジェクト」の写真を多くの来場者の方に見ていただきました。

また、6月24日には、味の素スタジアムにて「世界難民の日・J-FUNチャリティーサッカー2007」が開催されました。東京ヴェルディ1969のご協力を得て、味の素スタジアムにおける試合会場にてJ-FUN参加団体とともに特設ブースを設け、募金協力の呼びかけなどを行いました。

上記2つのイベントにて集められたご寄付は、当団体の活動に役立たせていただきます。募金にご協力いただきました皆様、ありがとうございました。

＊J-FUNとは、UNHCR(国連難民高等弁務官)駐日事務所と国内外で難民支援の活動を行うNGOなどのゆるやかな連携の枠組みです。

■ グローバルフェスタJAPAN2007に参加

10月6日(土)と7日(日)に日比谷公園にて、毎年恒例の国際協力イベント「グローバルフェスタ」が開催されました。今年のCAREブースでは、「緊急支援」「HIV/AIDS」を主なテーマとしてパネル展示などを行い、CAREの緊急支援活動やHIV/AIDSに対する取り組みについて来場者に説明するとともに、ワークショップでは、パキスタンにおける緊急支援活動について実際に現地で配布している支援物資を見せながら報告を行いました。また、今年も企画したクイズは大好評で、多くのブース訪問者やJ-FUNスタンプラリー*参加者がクイズに挑戦してくれました。これまでCAREのことについて知らなかった多くの方に、少しでもCAREの活動について知っていただけたのではないかと思います。

今年も多くのCAREボランティアさんに支えられ、ブースを盛り上げることができました。ご協力いただきました皆さん、ありがとうございました。

＊今年のグローバルフェスタでは、J-FUN(上記記事の注釈参照)参加団体によるスタンプラリーが行われ、CAREはスタンプラリーに参加しました。スタンプラリーは、各団体のブースをまわり、クイズなどに参加することで活動について知ると同時に、スタンプを集めていくという企画です。

タイにおいてCAREと日本企業の連携による事業を実施

タイ王国は、HIV/AIDSが深刻な国の中でHIV/AIDS予防対策キャンペーンが成功した数少ない国と言われていますが、HIV陽性者への偏見や差別、都市部と農村部との格差などいまだに問題が多いのが現状です。

CAREは10年以上のHIV陽性者支援活動を通して、陽性者を家族に持つ子どもが精神的に不安定になりやすいことがわかりました。これは家族が子どもの面倒を十分に見られないことや、同年代の子どもにからかわれたり、他の子どもたちから隔離されたりすることが原因です。

そこで、CAREのメンバーであるラックスタイ財団は、タイ北部のパヤオ地区でHIV/AIDSによって困難な立場におかれた子どもたちが、社会的なスキルを身につけ、自信を持つようになり、生きていく上で必要な能力を高めることを目的とする「コドモ活動センター」を設立しました。活動内容は文化的な活動や職業訓練、僧侶を招いての道徳教育など多岐に渡ります。

この度、株式会社ディアーズ・ブレイン様からのご寄付により、上記活動や建物の修繕などを含む5つのセンターへの支援が実現することで、今後より充実した活動が可能になります。

テトゥン語民話集出版プロジェクト最新報告

東ティモール民話集がついに出版されました！

■基本情報

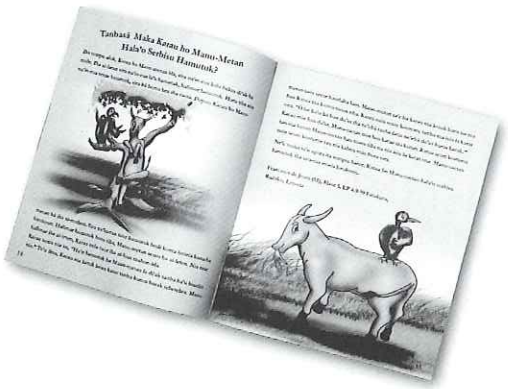
活動期間：	2007年1月～2007年4月（4カ月間）
地　　域：	東ティモール全域
対 象 者：	東ティモールの全小学生(257,999人)と教員。配布先は全小学校および図書館
関 係 者：	教員、コミュニティ、地方教育行政機関
支 援 者：	協賛企業および一般寄付（この事業は、花王株式会社、花王ハートポケット倶楽部、株式会社毛利建築設計事務所、ディアシステム株式会社、飛鳥建設株式会社、株式会社スミロン山本様からの事業協賛を受けました。）
事業規模：	850千円

2002年に独立を果たした東ティモール。16世紀からポルトガル、その後インドネシアに統治され、長い植民地時代下での言語統制は、母国語であるテトゥン語を含む東ティモール人のアイデンティティの喪失という問題を生みました。

こういった問題に対応すると同時に、出版物が極端に少ない東ティモールにおける教材不足を補うため、CAREは2000年にテトゥン語による初の教育誌「ラファエック」を創刊し、全国の小学校を通じて全児童に配布しました。これは半数以上の子どもが一冊も教科書を持っていない状況において唯一、子ども一人ひとりが所有できる本となりました。

このプロジェクトでは、ラファエック誌上での公募により、テトゥン語初の民話集を作るための活動を行っていましたが、この度、ついに民話集が出版されました。各家庭で代々語り継がれてきた民話が集められ、子どもたちがその民話の記録を担当しました。他援助機関からのご支援もあり、最終的に民話集は30,000冊制作され、読み物および教材として活用されるよう、この事業の対象者である東ティモールの全小学生と教員に配り、また、コミュニティの図書館にも配布しました。

子どもたちが記録を担当し、出版されたテトゥン語初の民話集



このプロジェクトでは、子どもたちの作文能力の向上や読み書きの促進、新たな教材の提供による教育の質の向上とともに、独自の文化の再認識に貢献することを目的として実施しました。この場を借りて、ご支援いただきました皆様に心からお礼を申し上げます。

（事業部　竹中 宏美）

私スタイルのCAREライフ

CAREボランティアメンバー
稲垣 佳奈

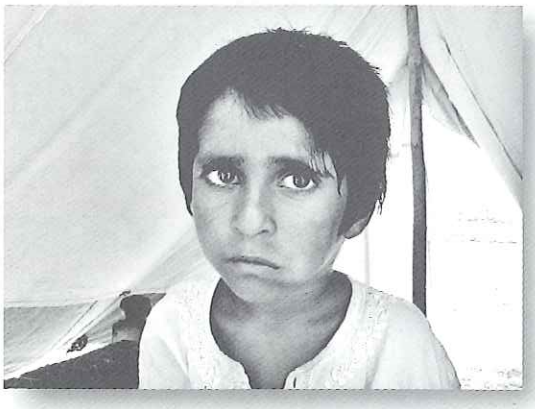
日比谷公園にて毎年、開催されているグローバルフェスタにて、ほかのボランティアさんと（左から3番目が筆者）

学生時代から人権問題に興味があり、卒業後はNGOなどで働きたいと強く思い、就職活動をしたものの、気づいたら他の業界で仕事を始めていた。毎日の仕事に没頭しつつ学生時代の思いを大切にしたいと考え、2年前、ケア・インターナショナル ジャパンの週末ボランティアに応募してみた。

初めて参加した大きなイベントは日比谷公園にて開催された「グローバルフェスタJAPAN」であった。さまざまな思いを抱え、参加しているほかのボランティアの方々と交流する貴重な機会に加え、CAREのブースに足を止める人たちと話をするのは私にとっては今までにない新鮮な体験であった。日本ではあまりNGOなどの活動が活発ではなく、市民活動も消極的なイメージが先入観としてあった私にとって、このイベントに参加するCAREを含めた多数のNGOの職員や来客した一般の方々と接することは、広がりつつある新しい領域に踏み入れた気分であった。

最近は毎日の仕事に追われ、週末ボランティアにも参加できずにいるが、翻訳の手伝いを通してCAREの活動に参加させてもらっている。翻訳作業を通してCAREの世界各国における活動内容について学び、日常生活の中では思いも及ばない貧困や人道援助について考えることは、人のために自分が何をできるかということを考える貴重なきっかけにもなっていると思う。

どのような形で参加する場合でも、CAREでは自分の出来る範囲のボランティア活動に意義を見出すことができるのではないかと思っている。最初は誰かのために何か自分のできることをしたいと思い始めたボランティアだったが、気づいたらCAREの活動を通して新鮮な感覚が磨かれ、自分を見つめ直す機会にもなっている。



CAREストーリー
～ パキスタン ～

両親も家も失い、自らの命も危機的状況に置かれた少年がCAREの支援を受けて…

5歳のBakhatは、パキスタン南部のシンド州の村に両親と住んでいました。父親は村の地主のために農地を耕し、母親は裕福な家のお手伝いさんとして働いていました。しかし、2年前、Bakhatは両親を失いました。両親は結核にかかっていましたが、医者にみてもらうお金も、薬を買うお金もなかったのです。孤児となってしまったBakhatは、叔父の家に移り住み、家事や家畜の世話などをして働きました。しかし、7月に激しい大雨が近くの湖の水位を押し上げ、周囲の村に洪水を引き起こしました。洪水は、Bakhatと叔父が住んでいた家を破壊し、二人は家を失いました。

現在、Bakhatは、10キロ離れた道路脇のテントで暮らしています。Bakhatと叔父は、水が引いて、元の場所に戻れるのを待っています。Bakhatが住む避難場所の水は、洪水によって汚染されており、Bakhatは皮膚感染に苦しみ始め、水を飲んだ後はすぐに熱を出し、ひどい下痢に悩まされました。

Bakhatは、CAREの現地パートナー団体によって設置された診療所による緊急治療を受けなかったら、命を落としていたかもしれません。彼が診療所を訪れたときは、下痢によるひどい脱水状態になっていましたが、簡単な治療で、彼はすぐに元気になり、また走り回れるようになりました。それ以来、Bakhatは、完全に回復したことを確認するために診療所を定期的に訪れ、検査を受けています。最近、診療所を訪問した際にBakhatは、自分のような子どもたちの命を救うために医者になる決意をした、と診療所の医者たちに話しています。

また、Bakhatは、避難所にCAREが設置した子ども向けの娯楽センターを楽しんでいます。「センターの先生たちは本当に優しいんだ。歌を歌ったり、色塗りをしたり、ゲームをしたり、いろんな活動があるんだよ。手を洗うことや歯を磨くことの大切さも学んだ。家に帰ると、先生が言ったことを思い出すんだ。もう病気にはなりたくないから。このセンターにいると、自分の家や村に起きたことを忘れられるんだ。ありがとう、CARE！」

CARE Notice Board

定期支援のお願い

ケア・インターナショナル ジャパンでは、毎月、決まった金額をご支援いただく、「CARE マンスリー・ギビング・プログラム」にご協力いただける方々を募集しています。継続的で安定したご寄付は、途上国の人々の自立を助けるという息の長い活動を、より確実に、より効果的に進めることを可能にしてくれます。ぜひご協力をお願いいたします。

CAREマンスリー・ギビング・プログラムとは

1000円単位でご自由にお決めいただいた定額寄付金を、毎月１回、ご指定の金融機関や郵便局の口座から自動的に引き落とすことで、継続的にCAREの活動をご支援いただく制度です。なお、自動引き落としに手数料はかかりません。また、ご連絡いただければ、寄付額の変更やご寄付の停止にもすぐに対応いたしますので、安心してご参加ください。

CAREマンスリー・ギビング・プログラムに参加いただいた方には

世界各地で行われている支援活動についての最新情報やコミュニティの人々の生の声などを紹介するニュースレターを随時お届けするとともに、年１回発行する「年次報告書」で、ケア・インターナショナルジャパンの活動内容や運営状況について詳しくご報告いたします。

そのほか、個人賛助会員（年会費 1口 10,000円）や個人準賛助会員（年会費 1口 5,000円）も随時募集しています。

「CAREマンスリー・ギビング・プログラム」や会員制度への参加をご希望の方は、以下までご連絡ください。すぐに、関係資料をお送りさせていただきます。多くの皆様のご参加をお待ちしています。

(財)ケア・インターナショナル　ジャパン
募金・個人会員担当
TEL: 03-5950-1335 FAX: 03-5950-1375
E-mail : monthly@careintjp.org

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol. 7
2007年10月31日発行（季刊）
発　行　人：野口 千歳
編　　集：菅沼 みゆき

財団法人 ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel. 03-5950-1335 Fax. 03-5950-1375
E-mail. info@careintjp.org
www.careintjp.org

CARE World

Vol. 6
ケア・インターナショナル ジャパン
Newsletter
June 2007

ケア・インターナショナルジャパンは、世界70カ国以上で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREのメンバーです。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

care

CARE International Japan Newsletter 2007年6月号

CARE World Vol.6

Contents

page3 事務局からの報告

page6 東ティモール
「テトゥン語民話集出版プロジェクト」
～失われた文化を母国語でまなぶ～
事業部インターン　青木 真理子

page8 フィールド最前線
スリランカ After-TEAプロジェクト
「改善される紅茶農園における住民の生活」
事業部　武田 勝彦

page10 カンボジア
「女子教育事業 サマキクマールⅡ」終了報告
事業部　竹中 宏美

page11 私スタイルのCAREライフ
ケア・インターナショナルジャパン ボランティア　廣瀬 匠子

page12 CARE Notice Board

表紙写真：ハイチ
©2004 CARE/Holly Wilmeth

事務局からの報告

ケア・インターナショナル ジャパン支援組織講演会

2月11日に赤坂プリンスホテルにて、ケア・フレンズ東京の講演会が開催されました。講演会では、数週間前に北京オリンピックの日本代表監督に選任されたばかりの「時の人」、星野仙一氏がご自身の生い立ちや野球体験談を交えたお話をしてくださり、決断に迷ったときは「前へ」と、ポジティブなメッセージを会場の約1600人の参加者に贈ってくださいました。

3月24日には岡山国際ホテルにて、ケア・フレンズ岡山の講演会が開催されました。ジャズサックス奏者の渡辺貞夫氏が、当時の日本では珍しかったサックスとの出会い、ニューヨークでのライブステージ、アフリカやミャンマーでの演奏活動などを、自ら撮影された美しいスライド写真を背景にお話してくださいました。

この講演会を通じて、ケア・フレンズ東京およびケア・フレンズ岡山の皆様から温かいご寄付をいただきました。紙面を借りてお礼申し上げます。

CARE支援組織代表者会議が開催されました

1992年に岡山で設立されて以来、現在、全国には5つのCARE支援組織（ケア・フレンズ岡山、ケア・フレンズ東京、ケア・フレンズ札幌、ケア・サポーターズクラブ大分、ケア・サポーターズクラブ熊本）がケア・インターナショナル ジャパンの活動を支えています。2月23日には、初めて代表者会議を開き、各組織における共通の課題について、情報・アイディアの交換を行いました。また、今後、他の都道府県に組織を広げていく計画についても話し合いがなされました。

外務省による立ち入り検査が行われました

3月2日、外務省による「公益法人の立入検査」が実施されました。当財団の主務官庁である外務省により3年に一度、行われる定例の検査です。組織の定款に沿って堅実な運営が行われているか、海外や国内での活動内容は公益性が高く適切なものか、財政管理は会計基準にのっとって透明性のある形でなされているか、ガバナンス（理事会・評議員会など）が機能しているか、などが検査のポイントとなりました。当財団は、検査項目のすべてにおいて一番良い評価を得ました。今後も堅実な組織運営を行っていく所存です。

麻布郵便局にて60年前の「ケア・パッケージ」を展示しました

東京都港区の麻布郵便局の協力を得て、3月1日～4月20日までの間、60年前の「ケア・パッケージ」*の展示を行いました。また、ケア・パッケージの中に入っていた物資のサンプルと、戦後の日本でケア・パッケージを受け取った人々の写真も展示しました。

展示に立ち寄られた方の中には、ケア・パッケージに見覚えがある方や、中に入っていた物資を受け取ったことがあるという方がいらっしゃいました。ケア・インターナショナル ジャパンは、60年前にケア・パッケージを受け取られた方を探しています。この小包に心当たりのある方は、当団体事務局までご連絡ください。

*1945年当時のCAREの活動の中心であった「ケア・パッケージ」と呼ばれる小包は日本にも届き、戦後8年間にわたり、1000万人がケア・パッケージの支援を受けました。食糧や衣類などの生活必需品だけでなく、農具のような生活を立て直すための物資が詰められていたケア・パッケージは、当時から長期的視野に立った支援を重視するCAREの活動を象徴するものです。戦後の日本において郵便局の窓口でケア・パッケージが配布されたことから、今回、麻布郵便局での展示企画が実現しました。

テンプル大学において事務局長が講演を行いました

テンプル大学*からの依頼を受け、3月22日にテンプル大学の“NGOs and International Development”のクラスで当団体事務局長が講演を行いました。

国際ネットワークの中で活動するCAREの組織的なしくみや、グローバルなスタンダードに沿った現場でのCAREの活動について話をしました。また、CAREの方針やアプローチについて、「ジャワ地震の緊急・復興支援におけるマーケット・ベースのアプローチ」「カンボジアの女子教育事業における女性のエンパワーメント」「ベトナムのインフラ事業における労働者のHIV/AIDS感染予防」の3つのケーススタディを用いて説明しました。

さまざまな国籍・経験を持つとても意識の高い学部生の方は熱心に話に聞き入り、講演終了後には多くの質問が出されました。今後、授業の一環としてインドに現地視察に行かれるとのこと、実体験を通してより視野と見識が深まり、将来的に国際協力になんらかの形で参加されることを期待しています。

*数年前から当団体はテンプル大学との協力関係があり、同大学の方がインターンやボランティアという形でCAREをサポートしてくださっています。

恒例の「アジアの祭典 チャリティーバザー2007」に出展しました

4月18日、ANAインターコンチネンタルホテル東京にて、恒例のアジア婦人友好会主催「アジアの祭典」が開催されました。会場では、アジア各国の民芸品、食べ物などの販売、楽器や歌などの民族音楽の演奏やくじ引きなどがなされ、大変な賑わいを見せていました。ケア・インターナショナル ジャパンは例年同様に横田評議員を中心にブースを出展し、このバザーによる収益金からご寄付をいただきました。ご協力いただきました皆様に、紙面を借りて心よりお礼申し上げます。

ケア・サポーターズクラブ熊本主催にて活動報告会を開催しました

5月12日（土）、熊本市の熊本機能病院内の地域交流館において、ケア・サポーターズクラブ熊本主催のスリランカ「TEAプロジェクト」活動報告会を開催しました。

当日は、ケア・サポーターズクラブ熊本の会員の方を中心に多くの方にお集まりいただき、現地駐在スタッフによる報告をとても熱心に聞いていただきました。また、アンケートでは「日本とは異なった文化や生活環境に驚きました。自分がどれほど恵まれた環境にいるのかということを痛感しました」「具体的にCAREの活動内容を聞くことにより、熊本の私たちの活動が見え、人に対する呼びかけもできると思った」など多くのご感想をいただきました。

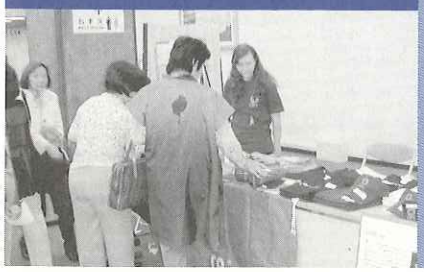
準備段階から当日の運営までいろいろと対応してくださいましたケア・サポーターズクラブ熊本の事務局の皆様に紙面を借りてお礼申し上げます。

JICA九州にて活動報告会を開催しました

熊本における活動報告会開催に合わせて、福岡県北九州市にあるJICA九州においてもスリランカ「TEAプロジェクト」の報告を行いました。参加していただいた方からは、「複雑な事情を抱えている現実を知りました」「CAREの活動が現地で有効に行われていて、子どもたちの笑顔が印象的だった」「普段飲んでいる紅茶の裏側にある現状を知り、少しでも周りの人に伝えられたら、と思いました」などのご感想をいただきました。また、「今後、さまざまな国の貧困層がどのような状況に置かれていて、何を思っているのかということを報告していってほしい」「もっと九州でCAREの活動を知ることができるイベントがあるとよい」という声も聞かれました。

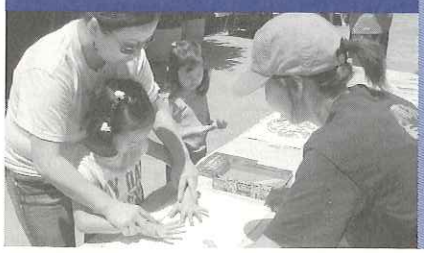
準備段階から当日の運営までいろいろとお世話になりましたJICA九州ご担当者の方にこの場を借りてお礼申し上げます。

「じゃがいもの会」に参加しました



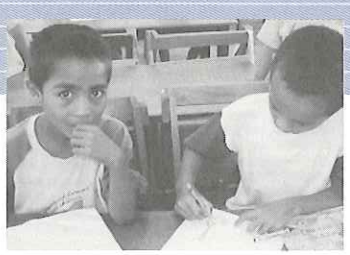
5月17日、NHKホールにて行われた「じゃがいもの会」に参加、出展をしました。歌手の森進一さんの呼びかけで1985年に始まり、多くの歌手や著名人の方々が集まって23年という長い間、開催されてきた会ですが、今年で最後ということもあり、大勢の方が会場に詰めかけました。CAREのブースにも多くの方々にお越しいただき、Tシャツなどを買っていただきました。この収益金はCAREの活動に有効に役立たせていただきます。ありがとうございました。

西町インターナショナルスクールイベント“Spring Fling”に参加しました



晴天に恵まれた5月26日土曜日、元麻布にある西町インターナショナルスクールにて毎年開催されている“Spring Fling-Nishimachi Community Service Day”に参加しました。今年はお子さんたちの手でCAREのロゴを作り、それを使ってTシャツを作成しました。子どもたちの小さな手で作られたロゴのTシャツはどれも個性的でかわいらしくできました。ご協力いただいた西町インターナショナルスクールの皆様に紙面を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

テトゥン語民話集出版プロジェクト
～失われた文化を母国語でまなぶ～
東ティモール



雑誌「ラファエック」。小学校低学年用、高学年用、教師用の3種類がある

事業部インターン　青木 真理子

■基本情報

活動期間：2007年1月1日～4月30日（4カ月間）

地　　域：東ティモール全域（面積：約1万4000平方キロメートル、人口：約94.7万人［2005年］）

対 象 者：東ティモールの全小中学生（257,999人）と教員。配布先は全小中学校および図書館（約2,000箇所）

関 係 者：教員、コミュニティ、地方教育行政機関

支 援 者：協賛企業および一般寄付

＊この事業は、花王株式会社、花王ハートポケット倶楽部、株式会社 毛利建築設計事務所、ディアシステム株式会社、飛島建設株式会社、株式会社スミロン山本様からの事業協賛を受けました。

事業規模：民話集出版プロジェクト850千円

事業の背景

東ティモールは、インドネシアの東に位置する岩手県ほどの小さな国です。16世紀にポルトガルの植民地となり、450年の統治の後、インドネシアに27年間統合され、2002年にようやく独立を果たしました。独立前の内乱で多くの人が命を失い、インフラや学校・保健施設をはじめとする国の公共サービスが多大な損害を受けました。現在、国民の多くは貧困レベルにあり、一日55セント以下で暮らす人の数が40%にも達し、5歳以下の子どもの47%が発育不全であるとされています。また昨年5月には、首都ディリにおいて、ストライキを起こして解雇された元軍人の反乱が失業している若者を中心とする暴動に発展し、ディリの住民の大半が郊外に逃れるといった出来事がありました。「世界で最も若い国」で安定した社会が形成されるまでには、まだ時間を要します。

東ティモールにおいて最も話されている言語はテトゥン語です。インドネシア統治時代にはインドネシア語の使用が強要され、それまで学校で使われてきたポルトガル語も禁止されました。テトゥン語および東ティモール独自の文化を認めることは、ナショナリズムを高揚させ、内乱にもつながる可能性があるため、インドネシア政府はこれを抑制してきました。長い植民地化と抑制が、東ティモール住民のアイデンティティの喪失という問題を生みました。

問題点

長い植民地経験と高い成人非識字率(40%)により、東ティモール独特の文化を伝える書物の不足は深刻です。また内戦中に、学校教師の大半を占めていたインドネシア人教師のほとんどが離職したため、教員も不足しています。95%の学校を焼失し、多くの学校設備と教材も失いました。独立後は公用語としてまずポルトガル語、後にテトゥン語が認められるようになりました。現在はポルトガル語で書かれた教科書が供給されていますが、その数は圧倒的に不足しています。全科目の教科書を一式持っている子どもは全体の10%のみで、半数以上の子どもは一冊も持っていません。テトゥン語の教育に関しては、歴史的・文化的背景からテトゥン語で書かれた書物がほとんどなく、テトゥン語で発信される情報自体が極端に少ない状況です。一方で、出生率が高く、全人口のうち15歳以下の割合は48%であるため、将来を担う次世代への教育の充実が緊急課題です。

CAREによる教育支援

CARE の教育プロジェクトにおいて、初のテトゥン語による教育誌「ラファエック誌」が2000年に創刊され、東ティモールのすべての小中学校を通じて生徒に配布されました。出版物が極端に少ない東ティモールで、唯一自分のものとして所有できる本です。隔月で刊行されるラファエック誌は学校の副教材として活用され、教材不足を補っています。国内の郵便制度が未整備なので、CAREのスタッフがオートバイで国内全13州のすべての小学校に直接届けており、その際に学校や生徒からの投書なども回収しています。ラファエック誌に投稿することは、情報を発信する機会が非常に少ない子どもたちにとって、「書くこと」へのモチベーションを高め、コミュニケーション能力を向上させる機会になっています。この活動は、教育省からの全面的な支持と協力を得ており、ラファエック誌を使って指導する教員に対する訓練もなされています。

テトゥン語民話集出版プロジェクトの目標と活動

このプロジェクトでは、テトゥン語による民話集の作成と使用を通じて、東ティモール独自の文化を再認識し、初等教育の向上と子どもの権利の推進に貢献することを事業目標とします。このプロジェクトでの活動は、ラファエック誌上での公募をもとに実施されています。

1）民話の公募

読者から、地域に語り継がれている民話を公募します。各家庭で語り継がれてきた民話を記録する作業は、子どもたちの作文能力を向上させることにつながります。

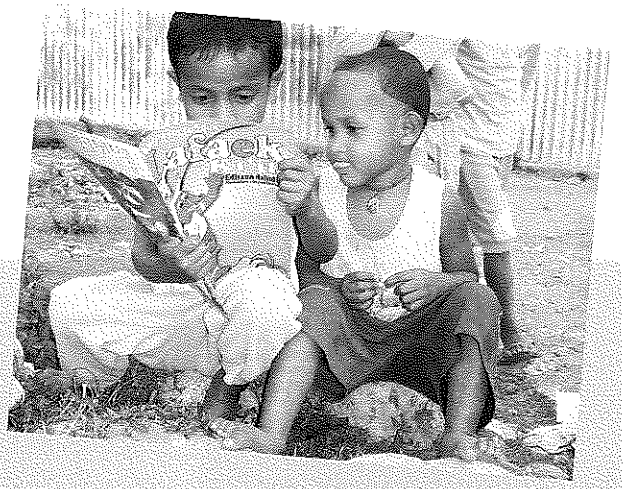
2）民話本の出版

公募した民話を編集し、3000冊出版します。出版された本は、東ティモール史上初のテトゥン語による民話集となります。東ティモール独自の文化やアイデンティティの再認識に貢献することが期待されます。

3）学校・図書館への配布

出版された本は、東ティモールのすべての小中学校に3冊ずつ配布し、読み物および教材として使用されます。地域の図書館にも配布されます。学校や図書館に配布することでテトゥン語の書物を増やし、普段なかなか書物を手にできない子どもたちの読み書きを促進します。また質の高い教材の提供により、教育の質の向上をはかります。

ケア・インターナショナルジャパンは、今年度以降も東ティモールの子どもたちのための支援事業を継続していく予定です。募金・書き損じハガキや使用済み切手収集などの皆様のご協力を引き続きお願いいたします。



東ティモールからのストーリー

紛争に苦しむ国において言葉が持つちから

東ティモールには、定期的な郵便システムは存在しません。古くから、東ティモールの人々は友人や他人の好意に頼り手紙を届けてもらっています。別の町へ出かける家族や友人、またバスやタクシーの運転手が配達人になってくれるのです。しかし東ティモールは山の多い地形であり、通るのも困難なほど整備されていない道路状況は、どんなに意気込んだ配達人にも大きなチャレンジとなります。それでも、大きな目の物静かな11歳のAnoは、辛抱強く手紙の到着を待ちます。

Anoはすでに自分の文通相手が誰かを知っています。なぜなら彼は数カ月も前に、初めての手紙を同じ4年生の文通相手の子にあてて書いているからです。Anoの書いた手紙は、新しい形の配達人によって文通相手に届けられました。その配達人とは、東ティモール13地域の28万人の子どもたちに児童雑誌Lafaek（ラファエック）を届けるために、困難な道をバイクで定期的に行き来する13人のCAREスタッフの一人です。Lafaekは、母国語にあたるテトゥン語で発行されている唯一の児童雑誌で、市民教育、平和構築、子どもの権利などの話題を提供しています。このLafaekを届けるために作られた配達システムを生かし、CARE は東ティモール中の子どもたちを、子どもたち自らの言葉によってつないでいくことを実現しました。

4,5,6年生の子どもたちは、異なる地域に住む同じ学年の子どもたちに、他の誰かに読まれる心配をすることなく自由な内容の手紙を書きます。文通制度は、子ども、先生や女性の権利についての情報を提供するCARE の Haburas Labarik（子どもたちの育み）プロジェクトの一貫として行っています。手紙を交換することで、子どもたちは表現の自由という権利を体験すると共に、お互いの生活について学ぶことで地域の違いについての理解を深め、友情を育てていきます。

Anoの文通相手のPutuはディリから200キロ離れたOecussiという、隔離された地域に住んでいます。Anoは、もっとOecussiについて知りたいと思っています。「手紙の中で、PutuにOecussiはどんなところか聞いてみたんだ。いいところか、悪いところかって」とAnoは話します。「あと、学校でテトゥン語やポルトガル語を習ったり、友だちとサッカーをやって遊ぶことなど、僕の好きなことについても書いたんだ」。

現在、Anoは彼の好きなことに以前ほど時間を費やすことができなくなっています。これは、Anoの自宅近くで起こった若者による暴動の影響で、二カ月前から、彼の家族が約1000人の人々と共にディリにある教会の敷地で避難生活を始めたからです。「争いの音が聞こえてきたとき、僕はとても怖くなったんだ。怪我をする人たちを見たし、殺された人もいたと聞いたよ」とAnoは振り返ります。今年初めに首都ディリ各地で再び起こった暴動により、既にディリ周辺に散らばる難民キャンプで生活を強いられている何万人もの人々に加え、新たに約8千人が避難民となりました。ディリで昨年4月に14万人の避難民を出した暴動が発生してから既に1年が経過していますが、未だに約3万7千人の人が難民キャンプで生活をしており、また7万人が郊外で親戚の家に身を寄せています。

Anoの家族は6人で、小さなマットレス1つと持ち物を入れる籠1つだけがあるテントで、他の10名の人々と一緒に生活しています。キャンプに住む子どもたちはほとんど玩具を持っておらず、輪ゴムと棒を使って輪投げをしたり、多くの輪ゴムをつなげて作った長いゴムの上を、歌を歌いながら跳ぶなど、キャンプにあるものからゲームを考え出して遊びます。

ディリに住む多くの子どもたち同様、Anoも暴動によって何週間も学校に通うことができませんでした。彼は、最近になって近所が落ち着きを取り戻しつつあるために自宅に足を運べるようになったこと、また時折学校に通えるようになったことを嬉しく思っています。将来人を助ける仕事に就きたいAnoは、勉強を続けることの大切さを説明しています。「大きくなったら医者になりたい」と彼は言います。「多くの人が病気になるのを見てきているので、医者になることが彼らを助ける一つの方法だと思っているよ」。学校では、暴動で怪我をしているのではないかとAnoが心配していた親友のSimaoと再会することができます。また、間もなくCARE OecussiのスタッフからCARE ディリのスタッフGremaldoを介して届けられる、長く楽しみにしていたPutuからの返事も受け取ることもできます。

現地のCAREスタッフは、子どもたちの重要な手紙の配達人であると同時に、参加校に情報の入ったパッケージを配布し、先生や生徒に対して文通活動についての説明も行います。2004年に文通活動が開始した際には、東ティモール全地域、260校の6543名の子どもたちが活動に参加しました。そのうちの95%が新しく知り合った友だちとの文通を今後も継続していきたいと話しています。昨年4月からの情勢不安が手紙の配達を中断させたため、子どもたちは通常より長く返事を待たなければなりませんでした。現在は活動が再開されつつあり、Anoや彼のクラスメートたちは初めての返事を5月初旬までに受け取ることができそうです。それ以降のCARE の文通活動では、最終学力テスト期間中と卒業式の時期を除いて月一回、手紙が配達されていきます。

コミュニティの分裂や競争、偏見が暴動を駆り立てている状況の中で、相手に対する理解を促進し、橋渡しをすることは以前にも増して重要となっています。Anoは、人々が結束することの大切さを信じる一人です。「僕は、政府に他の人々と一緒に力を合わせてこの危機を解決してほしい」と彼は語ります。次の手紙で彼が新しい友達と分かち合いたいことがたくさんあることは、言うまでもないでしょう。

＊CAREは子どもたちの安全に真剣に取り組む団体です。本文で使用されている子どもたちの名前は、子どもたちの安全を確保するため変更されています。

フィールド最前線

スリランカ After-TEA プロジェクト「改善される紅茶農園における住民の生活」

事業部
武田 勝彦

ケア・インターナショナル ジャパンは、2003年よりスリランカにおいて、「プランテーション居住者の生活改善事業（TEAプロジェクト）」を行ってきました。そして、2006年7月から第二期事業として、独立行政法人 国際協力機構（JICA）との連携により、「紅茶農園内住民組織の運営能力向上プロジェクト（After-TEAプロジェクト）」を実施しています。

前事業のTEAプロジェクトにおける活動を通して、紅茶農園に住む居住者たちの社会生活はかなり改善されました。その改善された生活が持続するような環境を整えることがAfter-TEAプロジェクトの目的です。このプロジェクトでは、①農園内の連携・コミュニケーションの強化、②住民組織の運営能力の強化、③農園内外の連携システムの構築という3つの目標に基づいて活動を行っています。

農園内外の接点：インフォメーション・センター

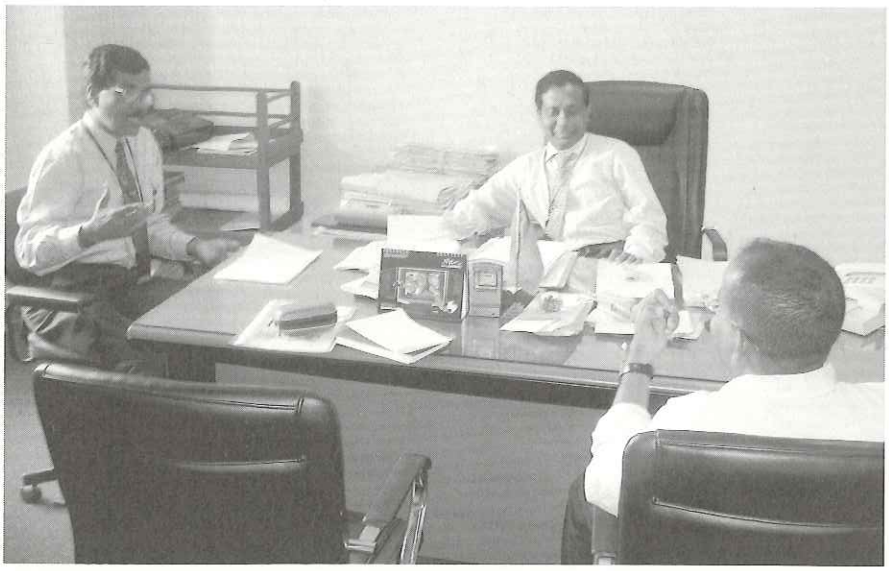
前事業のTEAプロジェクトにおいて、この事業が対象とする15箇所の各農園に設置されたインフォメーション・センターは、農園内と農園外部の社会をつなぐ窓口としての機能を持っています。この施設を通して外部のサービス提供団体は公共・社会サービスを提供し、農園内住民はそれらを利用することができるようになりました。これまで農園内には公共使用目的の建物が存在しなかったため、インフォメーション・センターは情報発信・情報収集の拠点として重要なものであるという認識が農園内住民の間で高まっています。

国民の基本的権利：公的書類の取得

インフォメーション・センターには、テーマ別にいくつかのブースがあります。その一つに公的書類のコーナーがあります。

農園外の人々と比較して、農園内の住民の多くは、これまで出生証明書、IDカード、婚姻証明書などの主要な公的書類を持っていませんでした。例えばIDカードを持っていないと、高等教育を受けられない、銀行口座を開設できない、国内で自由に移動することも難しい、という状況に置かれます。国民として当然の権利を行使できないのです。行政官が農園内へ来て、書類発行などの行政手続きを行うこともありませんでした。

しかし現在は、聞き取り調査の結果、各農園において重要な公的書類を所持していない住民のデータが収集され、行政官がインフォメーション・センターを定期的に訪問し、出生証明書など公的書類発行のための処理を行うようになりました。



スリランカ郵政省と農園内郵便配達について協議する

公共サービスの向上に向けて：郵便事情の問題点

インフォメーション・センターには郵便コーナーもあり、郵便制度や料金などについての説明が掲示され、住民が郵便事情についての情報を得ることができるようになりました。しかしその一方で、住民宛の郵便が届くのはプランテーション会社の郵便受けであり、会社の善意で職員が届けない限り、住民に郵便物はなかなか届かないというのが現状です。住民の住居（長屋）には住所や私書箱など郵便が届く番地がないのですが、郵便局側で各住居に勝手に番号を振ることもできません。インフォメーション・センターは、住民代表組織である参加型チームが農園内の課題と解決策について話し合う場にもなっていますが、この郵便問題も参加型チームを通して住民から提示された主要な課題の一つです。

現在、この問題の解決に向けて、郵政省や地方行政など郵便サービスの関係者との協議を重ねています。また、参加型チームによる話し合いの中で解決に向けた行動計画が作成され、住民の住居まで直接、配達を行う試みが現場レベルと行政レベルでなされることになりました。

インフォメーション・センターという「箱」に住民の力という「息吹」

「インフォメーション・センター」という拠点ができたことで、公的書類が発行され、住民の権利が確保されるようになっただけでなく、ここで住民代表が集まり、話し合い、解決策を検討・実行することで、農園内の環境や住民側の意識に新しい変化をもたらしつつあります。インフォメーション・センターの運営も住民組織が主体となってなされています。ある農園では、住民組織がこのプロジェクトや他団体などから支援を得て、手工芸品の展示会を開催し、その入場料をインフォメーション・センターの運営費として集めました。さらに、センターを運営する住民の主要メンバーからの要望により、運営に必要な会計知識などを身につけるためのトレーニングも行われることになりました。

今後は、農園内外の連携システムの構築に向けて、行政機関などの公共・社会サービス提供組織との連絡会を設立するとともに、農園経営側や地方行政官などに対して意識向上ワークショップやトレーニングを実施し、農園における基礎社会サービスの必要性を引き続き訴えていきます。また、2007年6月までには連携構築に向けた第1回目のミーティングが開催され、行政関係者、NGO、そして住民組織が参加する予定です。

インフォメーション・センターで農園内の問題について話し合う参加型チーム。女性メンバーが積極的に活動している

インフォメーション・センターにて開催された手工芸品の展示会の様子。インフォメーション・センターをどのように活用するかということも住民自ら考える

カンボジア

「女子教育事業 サマキクマールⅡ」終了報告

事業部 竹中 宏美

家庭菜園教室の様子。基礎識字教室、上級識字教室を終了した大半の女子が家庭菜園教室まで進学した

■基本情報
活動期間：2004年2月～2006年12月（2年10カ月）
活動地域：カンボジア王国 プレイベン州 ピムチョア地区
対 象 者：退学の可能性が高い小学校高学年女子と、就学していない13歳～25歳の女子約1,400名およびコミュニティ住民
資金提供者：国際協力機構（JICA）、アートコーポレーション株式会社

カンボジアでは、子どもの就学率は全体的には改善してきていますが、親や地域の人々の女子教育に対する理解は十分ではありません。特に近年は、若い女性において、首都プノンペン市に建設された縫製工場で働き、現金収入を得る機会が増えています。家庭の収入が低く生活が苦しい家庭に生まれ、労働力として家族を支えることができる年齢の女子は、村で家族を支えるという伝統的な役割に加え、出稼ぎに出て家族を支援するという、二つの要因によって教育を受ける機会をあきらめなくてはならない状況にあります。

3つのアプローチ

このプロジェクトは、就学年齢の女子が教育を受けられる、あるいは、継続できるよう、家庭・学校・地域全体が教育に対する理解を深め、女子教育を支援する環境を築くことを目的としました。また、「生きる力」「コミュニティの参加」「信頼関係の構築」という3つのアプローチを大切にしました。活動を皆で運営していくことで、住民、特に女子は、自分の意見を持ち、人前で発言する力を伸ばしました。また、地域行政が住民からの声を聞き、それに応えられるよう知識と技術を身につけていく過程で、人々のつながりや信頼関係が築かれていきました。

活動の成果

まず一つ目の成果として、女子が学校教育を受ける機会が向上しました。貧しい家庭の482名の女子生徒は、奨学制度によって制服や学用品など学校教育に必要なものを受け取りました。また、単に奨学品という「もの」の支給だけではなく、コミュニティと女子生徒グループが家庭訪問などを通じて奨学生を支える仕組みを作りました。

第二の成果として、質の高い教育の提供がなされました。生活に密着した題材をもとに学ぶ基礎識字教室（6カ月間）、保健知識を取り入れた上級識字教室（4カ月間）、そして識字能力だけでなく、栄養学や有機栽培を学ぶ家庭菜園教室（4カ月間）があり、コミュニティの人々とともに運営されました。1,052名の女子が基礎識字教室で生活に必要な識字能力を身につけ、大半が上級識字教室、家庭菜園教室へと進学しました。終了した学生のうち90%は国家識字試験に合格し、昨年の州の識字能力コンテストでは、上位の1、2位を識字教室の学生が獲得しました。

識字教室の教員24名には、コミュニティに貢献したいという熱意を持った人がコミュニティから採用されました。全員教員の資格を持っていませんでしたが、継続的に学生中心の教授法やクラス運営の方法についての訓練を受けました。その結果、識字教室の教員はコミュニティの重要な人材となり、村や地区のチーフに選ばれたり、事業終了後に公教育の学校教員として働くことになるなど活躍の場を広げました。

第三の成果として、女子教育に対するコミュニティの理解が深まりました。トレーニングを受けたコミュニティの活動グループにより、コミュニティの幅広い人々を対象に多くのワークショップが開かれ、話し合いの場が作られました。その結果、親や村人は女子教育の重要性を理解し、女子に学校を続けるよう促すなど、意識の変化が行動の変化として現れるようになりました。

最後に、女子教育支援のための枠組みの基盤が構築されたことが成果として挙げられます。枠組み形成に不可欠なコミュニティの自信、コミュニティと地域行政のネットワークや信頼関係がプロジェクトを通して構築されました。お金やものではなく、新しい情報、人々からの尊敬・理解・信頼といった「目に見えない利益」によって生きていくための力や自信を得た、という声が活動に関わった人々から多く聞かれました。今後のコミュニティの発展に必要となる資源を生み出したといえます。

これから

このプロジェクトは、女子教育に対する意識を向上させただけでなく、コミュニティの発展の基盤となる人材育成、意識の改革、ネットワークや信頼関係を成果として生み出し、個人にもコミュニティにも前向きなインパクトを与えました。CAREは、このプロジェクトの経験を生かし、今後もコミュニティにおける包括的な支援を継続していきます。

事業終了にともない、これまでの活動をふりかえるサマキクマールのプロジェクトチーム↓

私スタイルのCAREライフ

CAREとの出会い

ケア・インターナショナル ジャパン
ボランティア　廣瀬 匠子

私が初めてCAREに出会ったのは、小学校二年生のときでした。７年半住んでいたアメリカのジョージア州を離れてニューヨーク州に引っ越すときに、母が世界に恵まれない人が多くいることを伝えたい、クリスマスにプレゼントをもらうだけでなく自分からも何かを与えられる人間になってほしい、という思いでCAREを紹介してくれたのです。CARE USAの事務局が私たちの住んでいたアトランタにあったこともあり、私たちは初めてその年のクリスマスに少しばかりの寄付をしました。しかし母は、支援することを決して強制することはなく、それ以降、CAREと関わりを持つかどうかを完全に私の意志に任せました。私はこのことを今でも感謝しています。「ボランティア精神」とは、人から言われて嫌々するものであってはいけないと私は信じていますし、もしその時に母が強制していたら、恐らく高校生になる現在まで活動を続けなかっただろうと思います。

CAREに出会うまで私は衣食住が足りていることや五体満足であることに感謝したこともなく、世界のどこかで私と同い年の子どもたちが銃の音を聞き、恐怖で震えながら眠ろうとしていることもほとんど考えたことがありませんでした。しかし、棒のような手足と膨らんだお腹の子どもたちの写真を見たときに、私は世界中で苦しんでいる人々の生活の向上に少しでも貢献したいと思い、CAREを通して何かをしようと決心しました。

そして私は母に代わり、CAREの活動を家族に伝える役割を担うことになりました。CAREのホームページや送られてきたニュースレターを参考に、CAREのさまざまな事業についてポスターを描いたり、事業のより詳しい説明と感想を交えた独自のニュースレターを作ったりしました。私の部屋のドア近くには「CAREコーナー」を設け、自分で作ったポスターやニュースレターを展示し、毎年末にCAREに送るお金を少しずつ貯めていくためにティッシュ箱で作った募金箱も置きました。

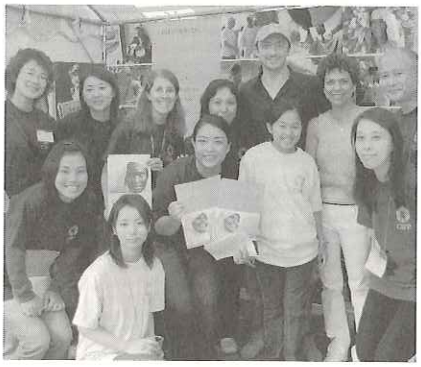
ある日、私は当時のCARE USAの事務局長であったPeter D. Bellさんに手紙を書いてみることにしました。今思うと多少大胆な行動だった気がしますが、そのときには「返事がこないかも」というより「CAREが大好き！」という思いを伝えたいという気持ちのほうが強かったことを覚えています。その後、事務局のJamie Stewartさんから返事があり、彼女が担当していたニュースレター『HealthCARE』に記事を書いてみないかという依頼をいただきました。記事を書いた後もJamieは世界中の国から私に手紙を送ってくれたり、自分の活動について教えてくれたりしました。本当に素晴らしい経験をさせていただいたと思っています。

HealthCARE
CARE is So Special To Me
TECHNICAL updates
REGIONAL updates
RESOURCES available
UPCOMING events
CARE

当時のCARE USAのニュースレター、HealthCAREの表紙を飾った廣瀬さんの記事。CAREに対する熱い思いが伝わってくる

そしてアメリカ生活12年の後、私は日本に帰国し、初めて日本の学校に入学しました。今までとは全く違う環境に期待と不安を抱きながら楽しく充実した毎日を送っていましたが、完全に新しい生活に慣れることは難しく、知らず知らずのうちに負担になっていたこともあり、あっという間に時間だけが過ぎていきました。心の奥では今までと同じようにCAREの活動に関わりたいと思いながらも実行に移すことはありませんでした。しかし高一の夏休みに学校でボランティアの課題が出たときに、私は迷うことなくCAREの日本事務局に行くことにし、そこで私は日本のCAREチームの皆様に出会うことができました。そして今でも事務局の作業やイベントなどでのお手伝いを通じてアカデミックかつ楽しい活動に関わらせていただいています！

今までの活動で最も印象に残っているのは、イベントでCAREブースに来てくれたおじいさんがCAREパッケージの展示を見て「私はこれに助けてもらったのだよ。チョコレートがすごくおいしかったのを今でも鮮明に覚えているよ」と言っていたことです。そこで私は改めてCAREの活動の重要性を痛感し、一人でも多くの人に笑顔をもたらすことができたらなと感じました。私にとってCAREは初めて世界の貧困について教えてくれた「先生」です。また、国連関係の多くの団体が実現できないでいる「世界の最も貧しい地域の人々を助ける」というミッションを現実のものにしているということや、支援だけに留まるのではなく現地の人々の自立をも重視しているという点にCAREの活動の意義があると私は信じています。CAREの「現地の人々の尊厳を守る」という姿勢が私は大好きです。



2005年秋に日比谷公園にて開催されたグローバル・フェスタにて。CAREスタッフ、ボランティアさんと

今年は受験生になることもあり、CAREの活動に参加することは難しいかもしれませんが、これからも自分のできる範囲内で関わらせていただきたいと思っています。「愛の反対は無関心である」というマザー・テレサの言葉があります。特に私と同年代の人において、アメリカに比べて日本でボランティアに興味を持っている人が少ないように感じるので、まずは関心を持つ（＝ＣＡＲＥする）ことから始めてほしいと思います！

CAREとして昨年の夏に初めて参加した麻布十番納涼まつりにて。友だちを誘って、CAREブースにて呼びかけをしてくれました

北海道への修学旅行のときの１コマ。
学校では手話部の部長を務め、さまざまな活動にも積極的に参加する廣瀬さんは、現在、高校３年生

CARE World

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol.6
2007年6月30日発行（季刊）
編集責任者：野口 千歳
編集：菅沼 みゆき

財団法人
ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel：03-5950-1335
Fax：03-5950-1375
E-mail：info@careintjp.org
www.careintjp.org

CARE Notice Board

定期支援のお願い

ケア・インターナショナル ジャパンでは、毎月、決まった金額をご支援いただく、「CARE マンスリー・ギビング・プログラム」にご協力いただける方々を募集しています。継続的で安定したご寄付は、途上国の人々の自立を助けるという、息の長い活動を、より確実に、より効果的に進めることを可能にしてくれます。ぜひ、ご協力をお願いいたします。

● CAREマンスリー・ギビング・プログラムとは ●

1000円単位でご自由にお決めいただいた定額寄付金を、毎月１回、ご指定の金融機関や郵便局の口座から自動的に引き落とすことで、継続的にCAREの活動をご支援いただく制度です。

なお、自動引き落としに手数料はかかりません。また、ご連絡いただければ、寄付額の変更やご寄付の停止にもすぐに対応いたしますので、安心してご参加ください。

● CAREマンスリー・ギビング・プログラムに参加いただいた方には ●

世界各地で行われている支援活動についての最新情報やコミュニティの人々の生の声などを紹介するニュースレターを随時お届けするとともに、年１回発行する「年次報告書」で、ケア・インターナショナル ジャパンの活動内容や運営状況について詳しくご報告いたします。

そのほか、個人賛助会員（年会費 1口 10,000円）や個人準賛助会員（年会費 1口 5,000円）も随時募集しています。

「CAREマンスリー・ギビング・プログラム」や会員制度への参加をご希望の方は、以下までご連絡ください。すぐに、関係資料をお送りさせていただきます。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

（財）ケア・インターナショナル ジャパン　募金・個人会員担当
TEL：03-5950-1335　FAX：03-5950-1375
E-mail：monthly@careintjp.org

＊皆様のご意見をお寄せください。

CARE Worldでは、皆様からのご意見、ご感想、ご要望を募集します。ご意見、感想などは、CARE World 誌面上にてご紹介させていただきます。また、「CAREの活動のこの点が知りたい」「今後のCARE Worldでこういったことを取り上げてほしい」などのご要望については、次号以降の企画に順次、盛り込んでいきます。皆様と一緒に“CARE World”を広げていきたいと思います。

ご意見、ご感想、ご要望は、当財団事務局まで郵送、ファクス、メールのいずれかの方法でお送りください。お待ちしています！

CARE World

Vol. 5
ケア・インターナショナル ジャパン
Newsletter
February 2007

ケア・インターナショナルジャパンは、世界70カ国以上で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREのメンバーです。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

care®

CARE International Japan Newsletter 2007年2月号

CARE World Vol.5

Contents

page3 事務局からの報告

page4 スペシャルリポート
「CARE設立60周年記念ディナー」報告
事務局長 野口 千歳

page7 カンボジア「レインボー事業」終了報告
事業部インターン 青木 真理子

page8 インドネシア スマトラ沖津波復興支援
「国内避難民のための水と衛生プロジェクト」終了報告
プログラムコーディネーター 鈴木 幸子

page9 インドネシア
「マドゥーラ避難民の生活復興支援プロジェクト」終了報告
プログラムコーディネーター 鈴木 幸子

page10 フィールド最前線
カンボジア「コミュニティのための人材育成事業」
プログラムコーディネーター 竹中 宏美

page12 Smile from Cambodia ～カンボジア発スマイル宅配便

page13 世界のCARE
CARE in Indonesia
～スマトラ沖津波から2年　インドネシア アチェからのストーリー

page14 私スタイルのCAREライフ
ケア・インターナショナル ジャパン会員、ボランティア Eric Korpiel（エリック コーピエル）

page15 ジャワ通信
ジャワ島地震緊急支援事業プロジェクトマネージャー 熊澤 ゆり

page16 CARE Notice Board

表紙写真：インドネシア
©2005 CARE/Edy Purnomo

事務局からの報告

カンボジア「女子教育事業 サマキクマールⅡ」終了報告会

2006年11月30日(木)、JICA地球ひろばにて、カンボジア「女子教育事業サマキクマールⅡ」の事業終了報告会を開催しました。現地で活動を行ってきたプロジェクトマネージャーの遠藤 惠が報告を行いました。

女子に対する教育の機会が制限されている貧困地域において、彼女たちの置かれている社会構造の理解と教育の重要性に対する意識が向上し、それを行動に移すための枠組みが作られるようになった成果をさまざまな事例を通して説明しました。

特に、事業に参加したカンボジア人女性たちに対して行ったインタビューの内容から、知識を得て自信を持ち、尊敬されるようになった喜びが報告され、参加者からは具体的な成果を聞くことができたのがよかったという感想が多数寄せられました。

参加者は女子教育や開発援助に関心のある方が大半で、事業の計画法や評価手法について専門性の高い質問が相次ぎ、終了後も報告者に質問しようとする人たちがずらりと並ぶ盛況ぶりでした。

静岡県立大学において事務局長が講演を行いました

2006年12月5日(火)、「貧困を生み出す根源の解決に向けて：ニーズベースからライツベースのアプローチ」と題し、静岡県立大学で野口千歳常務理事・事務局長が講演を行いました。看護学部、国際関係学部、経済情報学部などの学部生を中心に50名ほどの方が参加してくださいました。効果的・効率的で、かつコミュニティの自立発展につながる支援方法を常に模索し続けているCAREが、事業を実施していく中でどのようにアプローチを変えてきたのかということについて、理論とケーススタディを通して紹介しました。

参加された方は、特にカンボジアやスリランカにおける事業の事例に大変関心を持ち、活動現場の写真を交えての具体的な話に真剣に耳を傾けていました。途上国の現場を視察したことのある学生さんからは、ライツベース・アプローチにおけるモニタリング手法や指標などについての質問が出されました。また、社会人の参加者の中にはCAREにおけるボランティアの具体的な参加方法について関心を持ってくださる方もいらっしゃいました。

特集 Special Report

「CARE設立60周年記念ディナー」報告

事務局長　野口 千歳

第二次世界大戦後、1945年にヨーロッパの被災者を支援する目的でアメリカで設立されたCAREは、今では日、英、仏、豪などを含める12カ国のメンバーから構成され、約70カ国の途上国や紛争地域において4500万人以上の人々の自立を支援するNGOに成長しました。その設立60周年を祝い、2006年11月18日、帝国ホテル３階富士の間にて、「CARE設立60周年記念ディナー」を開催しました。

主なゲストとして高円宮妃殿下のほか、CAREの活動国の大使ご夫妻や代表者（ヨルダン、マリ、スリランカ、USA、UK）および関係者の方々にご臨席いただきました。また、ケア・インターナショナルからは、副会長でありCARE60周年委員会の委員長であるマリナ・ドゥ・ブラント夫妻が参加しました。

当日は、ケア フレンズ・東京会長の安倍洋子氏のほか、ケア フレンズ岡山名誉会長の加藤睦子氏、当財団初代理事長夫人の横田笑氏の表彰式が行われました。CAREは設立60周年を祝うにあたり、特に貧困をなくし、平和な社会をつくる過程における女性の重要な役割に光をあてています。安倍氏、加藤氏、横田氏は、途上国の女性やコミュニティのエンパワーメントを目指し、日本の人々の意識を高め、また理解を深めることに長年、貢献してくださっています。記念式典ではこの献身的なご努力を称え、ケア・インターナショナルから表彰のレターと記念品が贈られました。

CARE設立60周年記念ディナー

日時：2006年11月18日（土）
場所：帝国ホテル３階富士の間
後援：フランス大使館、スリランカ大使館
特別協賛：株式会社VSN
協賛：セイコーインスツル株式会社、ティファニー・アンド・カンパニー・ジャパン・インク
協力：スターバックス コーヒー ジャパン株式会社

ディナーの後には、1990年の第4回「マリア・カラス国際声楽コンクール」の優勝を機に世界的に活躍されているソプラノ歌手、中丸三千繪氏のコンサートが開催されました。

当日は400名以上の会員・寄付者・関係者の方にご参加いただき、CARE60周年の節目にあたり皆さまに日頃の感謝の意を表するとともに、親睦を深め、支援活動についてより一層の理解を促進し、ご協力を仰ぐという意味で、大変意義深い会となりました。

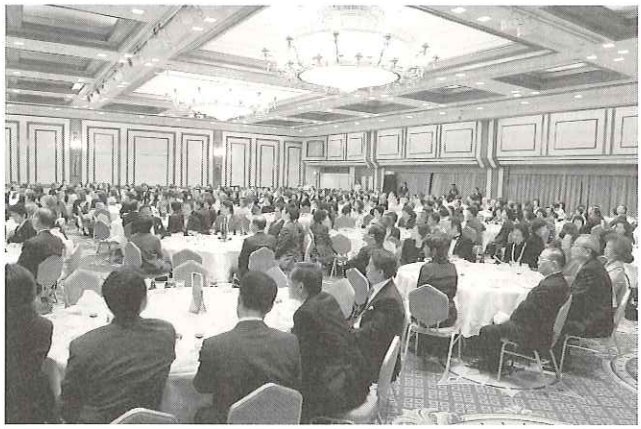
ご参加いただきました皆様、ラッフル景品などの協賛をしていただきました企業の皆様、そして運営の面でご協力いただきました方々に心よりお礼申し上げます。

なお、ディナー入場券およびチャリティ・ラッフル券販売からの500万円近い収益は、CAREの貧困をなくすための活動に役立たせていただきます。

日本におけるCAREの発展に長年、多大なるご貢献をいただきました安倍洋子氏(左)、加藤睦子氏(中央)、横田笑氏(右)がケア・インターナショナルから表彰されました

世界的に活躍中のソプラノ歌手、中丸三千繪氏によるコンサートが開催され、会場は記念ディナーにふさわしい優雅な雰囲気に

来賓のお客様とともに(以下、敬称略。左より、横田笑、加藤睦子、安倍洋子、高円宮妃殿下、関口房朗、Marina de Brantes, Guy de Brantes, Kalvinder Pook, Chris Pook 英国大使館参事官)



帝国ホテル3階の富士の間において開催された記念ディナーに、400名以上の会員・寄付者・関係者の方々にお集まりいただきました

CARE設立60周年記念ディナー
ケア・インターナショナル ジャパン理事長 関口房朗　開会の挨拶

本日は、高円宮妃殿下、ヨルダン大使閣下ご夫妻、マラウィ大使閣下ご夫妻、英国大使館参事官ご夫妻、米国国際開発庁参事官様、外務省国際協力局長様のご臨席のもと、ケア・フレンズやケア・サポーターズクラブの会員の皆様をはじめ、大勢のお客様にご出席いただき、このように盛大にCAREの60周年を祝うことができますことを、心より嬉しく存じます。

また、今回初めてケア・インターナショナル副会長であり、CARE60周年委員会の委員長でおられますマリナ・ドゥ・ブラントご夫妻に海外からお越しいただき、この特別なディナーにご参加いただけることになりましたことは、ケア・インターナショナル ジャパンにとりまして、大変光栄なことでございます。

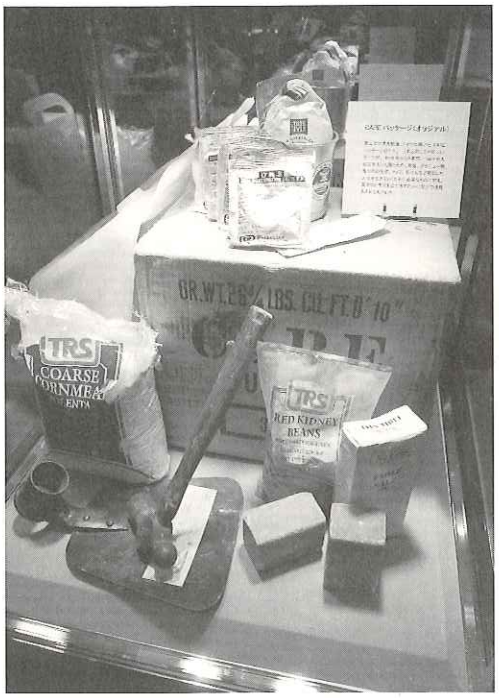
CAREは第二次世界大戦後、ヨーロッパの被災者を支援するためにアメリカで設立された市民団体として1945年に活動を開始しましたが、3年後には敵国であった日本にもその支援は届きました。

当時の日本はご存知の通り、温かいご飯もおなかいっぱい食べられないような状況でした。そのような中で、CAREは粉ミルクや砂糖、せっけんなど生活必需品が詰められた「ケア・パッケージ」を1000万人の日本人に寄付してくれたのです。実は私もその恩恵を受けた1000万人の中の一人でした。

当時私は10歳でしたが、その情景は今でも鮮明に覚えています。キティ台風、ジェーン台風が立て続けに日本を襲い、私の住んでいた家や近所の家はすべて浸水してしまい、食糧も不足していました。ケア・パッケージが10個 父のところに届いたときは、遠い国から海を越えてやってきたこのダンボール箱に何が入っているのか、ワクワクしながら父が開けるのを肩越しからのぞき込みました。すると、見たこともないような食糧や缶詰がたくさん出てくるのです。当時日本では簡単に手に入れることができなかったチョコレートを口にほおばったときの感動は今でも強い記憶に残っています。

開会の挨拶を述べる当財団の関口理事長

おいしいものがたくさん詰まったケア・パッケージを10箱すべて取っておきたいという気持ちはやまやまでしたが、実は父はこのケア・パッケージの中身を町の人たちに配布する重要な役割を担っていました。まじめで責任感が強い父は、町の中で最も大変な被害に遭った人が誰かを調べ、最も必要な人たちにしっかりと物資が届くようにしました。一生懸命、CAREにまかされた任務を果たそうとする父の姿を見ていた私は、村人が「関口はいいものを全部自分で独り占めしようとしているに違いない」などとうわさしているのを知ったときは、怒りがこみ上げてきました。子ども心に、「どんなに良いことをしようとしても、必ず悪いことを言う人はいる」「大切なことは、自分の心の中で正しいことをしていることを確信していること」だと思いました。



会場には、60年前に実際にアメリカからドイツに届けられたCAREパッケージと、その中に入れられていたもののサンプルが展示されました

あれから何十年も経ち日本は豊かになり、私もビジネスで成功し、いつか恩返しをしたいと思っていました。ある日、日本でのCARE設立の中心的存在でいらした横田大使からお声がかかり、任意団体であったCAREを財団にするために協力してほしいという申し出を受けました。CAREの支援を受けて育った私にとって、これ以上光栄なことはありませんでした。そこで、財団設立の条件であった基本財産を寄付することになりました。

CAREが設立されてから60年が経ちましたが、今ではCAREはアメリカや日本を含め、世界12カ国のメンバー国から成り、アジア、アフリカ、中南米、中東、東欧の70カ国以上で4500万人の人々を支援する組織に成長しました。そして数十名で始まった組織は、今では13000人以上のプロフェッショナルなスタッフが活躍する組織となりました。

地域コミュニティの人々との深い信頼関係、途上国政府との協力関係、政策レベルでの国連などとの連携、そして何よりも常にCAREを支援してくださってきたケア・フレンズやケア・サポーターズクラブの会員の皆様やCAREの会員・寄付者の方々のご理解とご支援があってこそ、CAREは活動を効果的に継続することができたのです。

本日は、日本におけるCAREに大きく貢献してくださいました安倍洋子様、加藤陸子様、横田笑様の表彰式、そしてグローバルに活躍される中丸三千繪さんのコンサートがございます。

長年、CAREを支えてきてくださった方々にCARE設立60周年記念ディナーを存分にお楽しみいただきたいと存じます。

今後とも、ぜひともご支援・ご協力のほど、心よりお願い申し上げます。

最後になりましたが、皆様の益々のご健勝をお祈りして私からのご挨拶とさせていただきます。

カンボジア「レインボー事業」終了報告

事業部インターン　青木 真理子

■基本情報
活動期間：2000年7月～2006年6月（6年間）
活動地域：カンボジア王国カンダール州ルックダイク地区および日本国内の小中学校
対 象 者：カンボジアと日本の小中学校の子どもたち

レインボー事業は、日本全国の延べ765の小中学校・団体・個人の皆様からご協力をいただき、2000年から6年間カンボジアと日本国内において実施してきました。この事業は、両国の子どもたちが一緒に学ぶことによる国際文化交流の活性化に焦点をあて、以下の活動を行ってきました。

6年間の活動内容

①日本の小中学校などから文房具を総計1,339箱分（日本の子どもたちが描いた絵画を含む）、収集
②同箱をカンボジアの小中学校27校に提供
③日本とカンボジアの小中学校で絵画を交換、各学校で展示や紹介
④教師と子どもたちを対象とした絵の描き方ワークショップをカンボジアの小中学校69校で開催
⑤絵画授業の指導法についてのワークショップをカンボジアの教師175名に実施
⑥一部の対象地域で教育文化学習センターおよび学校とコミュニティの図書施設を整備

厳しい教育環境の中で

カンボジアでは、1975～79年のポル・ポト政権時代に学校の存在が否定され、多くの教師や知識人が処刑されました。新政権樹立後、政府は教育の復興に注力してきましたが、現在も多くの問題を抱えています。優秀な教師の不足、貧しさのため学校を退学・留年をする子どもが多いことなどが課題として挙げられます。このような環境の中、美術の科目はあるものの、美術指導経験のある教師や美術に必要な資材が不足し、実際には授業が行われていない学校も多く見受けられます。

カンダール州ルックダイク地区は、首都プノンペンから東南に車で2時間の場所に位置し、メコン川沿いに南北50kmにわたって細長く広がっています。この地区は毎年起こるメコン川の洪水のためにカンダール州の中でも特に貧しく、地区にある小学校20校（児童数10,200名）と中学校7校（生徒数2,900名）の女子の就学率は低い上に、退学率と留年率が高い地域です。

初めての体験―絵を描くこと、海外の子どもたちと交流すること

普段、海外と交流のないルックダイク地区の子どもたちにとって、日本から送られてきた絵を見る機会は貴重な異文化体験だったと、この事業に参加した多くの先生は言います。実は、この地域ではレインボー事業が始まるまで絵を描くことはおろか、鑑賞をする機会も少なかったため、子どもたちは何をどのように描いたらよいのか、ためらうことがありました。その際に日本の子どもたちの絵は、自信を持って自由に描くことの良いお手本となったようです。また、自分たちの描いた絵が海外に送られ、日本の学校で展示されることを非常に喜び、それが絵を描くことへの意欲につながりました。

授業にもたらされた「色」

以前は、この地域では絵の授業の回数がとても少なく、また授業があっても、罫線入りのノートに鉛筆で描くという方法をとっていました。学校に色鉛筆や絵の具などの画材が贈られたことによって、絵の授業に新しく「色」がもたらされました。カラフルな絵が飾られた教室は、子どもたちの元気と想像力の刺激につながっています。

先生たちの挑戦

この事業では、教師を対象とした絵画授業の指導法のワークショップも行いました。参加した教師は、学んだノウハウを学校に持ち帰り、他の教師に教えます。教師たちは指導技術を身につけたことで美術の授業により積極的になり、絵の授業の回数が飛躍的に増えていることが確認されました。また、絵画に触れたことがきっかけで、教師たちが自ら理科のポスター教材を作成して教室に掲示するなど、美術以外の授業にも良い影響を与えているようです。

事業を終えて

教育を取り巻くカンボジアの環境は現在も厳しいことには変わりありませんが、教師たちの美術指導の質の向上や、経済発展に伴い現地で文房具が安価で手に入るようになってきたことをふまえ、この事業は2006年6月をもって終了しました。ご参加いただきました皆様に、長年のご支援とご協力に心からお礼申し上げます。

インドネシア スマトラ沖津波復興支援「国内避難民のための水と衛生プロジェクト」終了報告

プログラムコーディネーター　鈴木 幸子

2005年3月から16カ月間、ケア・インターナショナル ジャパンは、アチェ州の2地域にて、津波復興支援活動を行いました。

主な3つの活動

被災地では、長期的に生活可能な住宅に入居できるまで清潔な水やトイレへのアクセスが限られるため、避難民の人々は下痢などの病気を患う危険性があることが調査により確認されました。そこでこのプロジェクトでは主に以下の3つの活動を実施しました。

一つ目の活動は、避難民への清潔な水の供給です。避難所や仮設住宅などがある地域は、もともと井戸や水道がなかったところが多く、これらの施設延べ62箇所にて、給水タンカーを用いて給水活動を実施しました。給水活動では、月あたり最大で約748万リットルの清潔な水を供給することができました。

二つ目は仮設トイレの排泄物の除去活動です。アチェでは、地区衛生局も地震と津波により被災したため、運営および資金面での問題を抱えており、汚物処理サービスの提供が困難でした。CAREは長期的には当該活動を衛生局に引き継ぐことを見込み、衛生局との合意のもと、避難所や仮設住宅を中心に活動を実施し、70箇所にて汚物処理サービスを提供しました。

CAREは、避難民の意識の向上なしに水や衛生のインフラを改善しても、大きな効果を得ることはできないと考えます。そのため、上記二つの活動と並行して、住民による組織活動の支援と衛生に関する知識・情報普及活動を実施しました。住民による組織活動の支援では、保健衛生ボランティアのトレーニングや9つの水管理委員会の組織化を実施しました。また、知識・情報普及活動においては、コミュニティに設置した掲示板やテレビ・ラジオ放送による保健キャンペーンを実施し、保健・衛生知識の普及を行いました。これらの活動は、一時的な下痢の発生数を減らすだけでなく、長期的な水因性疾患のリスクを減少させることで、人々の生活の質の向上にもつながります。

被災コミュニティや援助機関との調整の大切さ

多くの機関・組織が支援活動をする被災地では、実施地域や活動内容の重複を防ぎ、支援を必要としている地域に確実に支援を届けるため、関係者間の調整が重要になります。CAREは、給水・汚物処理活動に関わる諸機関の調整ミーティングに積極的に参加してきました。また支援を必要とする人々が引き続きサービスを受けられるよう、関係者への円滑な事業移管を目的としたワークショップを開催しました。政府関係者、国連機関、NGOなどの援助実施機関に加え、CAREの給水・汚物処理活動対象地域に避難・居住しているコミュニティ住民も参加しました。すべての関係者が一堂に会したことにより、今後の関係者間のコーディネーションの場としても有意義なワークショップになりました。

保健・衛生に関する知識・情報普及活動の一つとして、コミュニティに設置された掲示板

■基本情報

活動期間：2005年3月～2006年6月
活動地域：インドネシア アチェ州（バンダ・アチェ、アチェ・ブサールの2地域）
対 象 者：避難所および仮設住宅に居住する国内避難民20,000人（水の支援8,000人と排泄施設の支援12,000人）
背　　景：2004年12月26日のスマトラ沖地震・津波で震源に最も近かったアチェ州では、死者・行方不明者十数万人に加え、60万人の避難民が発生しました。

これから

このプロジェクトは2006年6月をもって終了しましたが、プロジェクト終了後も対象地域の人々が引き続き安全な水を得られるよう、給水タンカーよりも低コストで持続性のある井戸や水道といった水供給方法へと段階的に移行しました。今後、供給される水の質を保つために必要となる、蛇口や水道管の定期的なメンテナンスは、住民による水管理委員会が担い、必要に応じてケア・インドネシアがサポートしていく予定です。スマトラ沖地震・津波発生直後からご支援いただきました皆様に心からお礼申し上げます。

インドネシア「マドゥーラ避難民の生活復興支援プロジェクト」終了報告

プログラムコーディネーター　鈴木 幸子

背景―地域が抱える紛争の傷あと

インドネシア中央カリマンタン州で2001年に発生した民族紛争（先住者・ダヤック民族 対 移住者・マドゥーラ民族）により、マドゥーラ系住民のおよそ17万人が国内避難民となりました。その多くは州内の難民キャンプに収容されたり、マドゥーラ島に避難しました。紛争発生から数年が経ち人道支援が次々に終了していく中、2004年の国連の調査で住民の生活状況の悪化が確認されました。地域の最貧困層にあたるマドゥーラ避難民に収入源はなく、生活に必要な水・衛生の確保や保健サービスを受けることが難しい状態にありました。

活動の内容と成果

ケア・インターナショナル ジャパン（以下 CIJ）はケア・インドネシアとの協力により、マドゥーラ島および中央カリマンタン州の避難民約1万世帯と避難民受け入れ地域の住民に対し、水や衛生・保健・食糧などの基本的ニーズを満たすことで生活の保全をはかることを目標に、主に以下の活動を行ってきました。

①水と衛生施設の整備および保健衛生のトレーニング

清潔な水の確保を実現するために、給水活動ならびに井戸・給水塔・水道栓・トイレ・水を貯蔵するためのドラム缶などの設置と水の浄化剤の配給を行いました。またこれらの施設の継続的な使用を可能にするため、管理方法のトレーニングを住民に対して実施しました。

②農具提供などによる収入向上活動の支援

マドゥーラ避難民には安定した収入源がなく、このことが自立した生活を難しくしています。そのため収入向上活動もこのプロジェクトの大切な一端を担っていました。収入につながる物資についての調査に基づき、約8,800世帯に対して、紛争により失われた、生活を立て直すために必要な農耕具と種を提供しました。

③母子への保健サービスと保健教育の普及

特にCIJが力を入れてきたのが、保健サービスの質の向上です。インドネシアには、妊婦や授乳中の母親、5歳未満児へ保健サービスを提供する「ポシャンドゥ」という施設が各コミュニティにあります。母子以外の人々も病気予防などに関するアドバイスを受けられる身近な施設なのですが、機能していない場合が多く見受けられました。そこで保健省と協力し、約100箇所で母子手帳や体重計などの資機材を提供したり、予防接種などを実施し、成長測定システムの回復を行いました。この結果、母子を中心とした対象者の90%以上の避難民およびコミュニティの人々がポシャンドゥを利用できるようになりました。

この活動で留意した点は、コミュニティが本来持っている能力とシステムを生かすことにより、プロジェクト終了後もその効果を持続可能にすることです。もともとポシャンドゥは保健ボランティアによって運営されていましたが、今後もそのような運営が可能となるよう、200人以上のボランティアに対して保健と栄養についてのトレーニングを行いました。

機能していなかったポシャンドゥにおけるシステムが回復し、5歳未満児の成長測定も可能になった　© Harsha De Silva

■基本情報

活動期間：2005年5月～2006年7月
活動地域：インドネシア共和国東ジャワ州（マドゥーラ島）および中央カリマンタン州（サンピット県）
対 象 者：民族対立により避難民となった約1万世帯のマドゥーラ系住民と避難民受け入れ地域の住民
支 援 者：スターバックス コーヒー ジャパン 株式会社

※「イチロー・スターバックスカード」キャンペーンの売上金の一部をご寄付いただきました。

生活改善と避難民の帰還に向けて

このプロジェクトは、民族紛争という複雑な背景の中、人々の強い関心と積極的な参加によって目標を達成することができました。今後の活動はトレーニングに参加したボランティアや自治体関係者などによって、担われていく予定です。またCAREは、一部で民族間の緊張が継続している中央カリマンタン州において、異なるコミュニティが融合して生活改善していくことを目的としたプロジェクトを予定しており、マドゥーラ島に移った避難民がカリマンタン州に帰還できるよう支援を続けていきます。

フィールド最前線

カンボジア「コミュニティのための人材育成事業」

プログラムコーディネーター
竹中 宏美

■基本情報
活動期間：2004年10月～2007年9月
活動地域：カンボジア王国カンダール州ルックダイク地区
対 象 者：奨学生、奨学生の親、コミュニティの人々、奨学制度運営委員会
資金提供者：ケア フレンズ岡山、ケア フレンズ・東京

カンボジアでは、2015年までにすべての人が9年間の基礎教育を受けられるようにすることが優先課題の一つに掲げられています。長らく続いた内戦により教育環境が整備されておらず、高学年になるほど就学率が低く、また、男女の間に大きな就学格差が見られます。

女子が学校に通えなくなる最大の原因は、経済的な理由です。無償教育といえども、学用品や制服にかかる経費、交通費、昼食費などは貧困家庭にとっては大きな負担となります。また、学校までの距離が遠く、雨季の洪水で悪路になると、通学が困難になります。さらに、文化的に男子の教育が優先される傾向にあり、女子教育の重要性が認識されない中、女子は学校に行くかわりに家事や家業を手伝わなければならず、学校に通えない女子が多数存在しているのが現状です。そして、女子の退学率が高いことから、教師になれる女子の割合も低く、結果として女性教師といった女子生徒のモデルとなるような人材がコミュニティにおいて不足し、それが、女子が一層、教育から遠ざかる原因にもなっている状況です。

地域と共に運営する奨学事業

ケア・インターナショナル ジャパンは、ケア フレンズ岡山、ケア フレンズ・東京からのご支援を受け、カンボジアの首都プノンペンから東南方向に車で2時間、メコン川左岸沿いにあるカンダール州ルックダイク地区で「コミュニティのための人材育成事業」を実施しています。この事業では、前事業の「女子教育奨学制度事業」において中学課程を修了し、高校に進学した奨学生を対象として、高校課程（3年間）を支援しています。また、彼女たちがコミュニティの発展に役立つ知識・技能を習得し、それをコミュニティの人々と共有して、最終的には奨学生がコミュニティの発展に貢献することを目標としています。この事業では、教育青年スポーツ省と地区奨学制度運営委員会の協力のもと、ケア・カンボジアと共に活動を行っています。

地域の発展に貢献できるような人材の育成

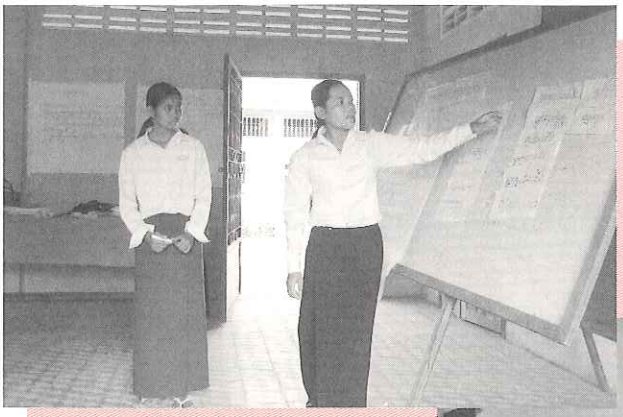
この事業では、奨学生が習得した知識や技能をコミュニティの人々と共有し社会に還元することで、地域の発展に貢献できるよう、前事業を次のように発展させた形で計画し、活動しています。

まず、奨学生に対する就学支援については、寄宿費などの資金や学用品を提供するほか、ホームエコノミクス授業を設け、調理や縫製などの実習に重点を置いています。また、勉学を強化するために補習授業を実施するとともに、学習グループを作って奨学生同士で学びあう活動を継続しています。さらに、奨学生が習得した知識や技能をコミュニティの人々と共有するためのコミュニティ活動の機会を設け、この活動を行う際に基礎となるファシリテーションなどの技術も習得できるようにしています。一方、コミュニティの理解を得るため、親やコミュニティの人々に対してもジェンダー意識向上ワークショップを実施し、女子教育への理解を深める活動を行っています。

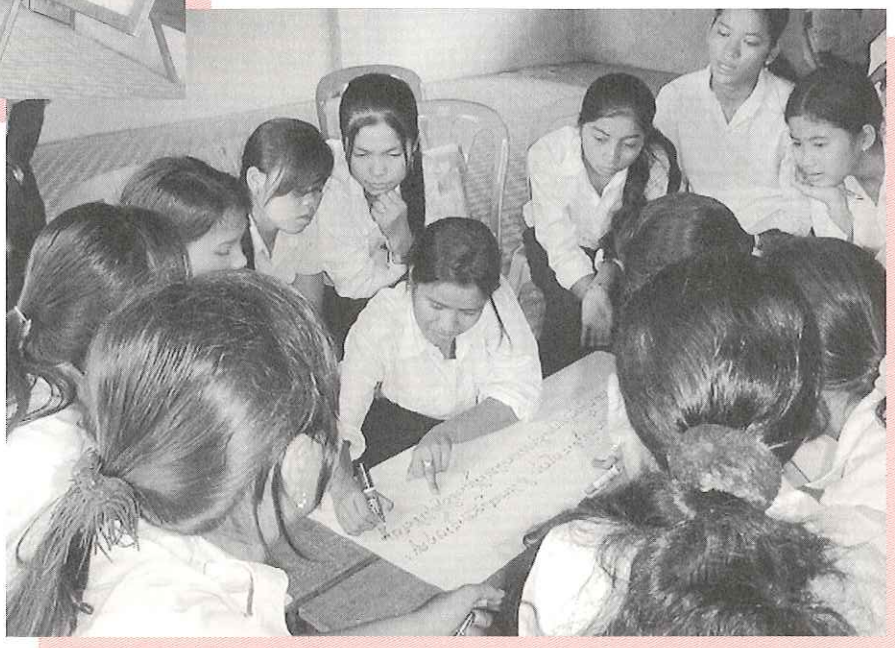
具体的な活動例

例1：コミュニティの発展に必要な知識・技能の習得

奨学生を対象として、ピア・エデュケーター（同世代が同世代に教えること、教える人）訓練を実施しました。これは、奨学生がコミュニティ活動を行う際に必要となる心構えや基礎技能を身につけるためのものです。夏休みには集中講座にて、相手の話に耳を傾けることや相手を尊重し良好なコミュニケーションを築くことなどを学んだほか、相手の参加を促す技能とともに、



さまざまな活動を通して、多くの人の前で説明する能力も身につく。
コミュニティの人々を対象としたワークショップにて



女性の人身売買や家庭内暴力などの問題点を整理し、話し合う奨学生たち

プレゼンテーション・ゲーム・読み聞かせ・メッセージを伝える方法などの技能も学びました。

例２：習得した知識・技能の共有（コミュニティ活動の展開）

8月の休暇時に奨学生と奨学制度運営委員会が主体となり、3つの学校群において、各3日間のコミュニティ活動を実施しています。これまでに家庭内暴力、女性・子どもの人身売買、コミュニティの環境保護、コミュニティの住民参加（地方分権化）を題材にワークショップを行い、親、村人、下級生、コミューン･メンバー などに対してメッセージを伝えました。

例３：コミュニティにおけるジェンダー意識の向上

ジェンダー意識向上ワークショップでは、コミュニティの人々は生物的性差と社会的性差の違いを学び、カンボジア社会で誰が資源（家畜・畑などの私有財産や水源・森林などの公共財産）を使用でき、その資源を管理し、所有しているのかということについて分析し、そこにジェンダーによる偏見がないかどうかを話し合い、理解を深めました。

奨学事業を支える枠組み

奨学事業を支えているのは、奨学生の親、コミュニティの人々、そして奨学制度運営委員です。奨学制度運営委員会は、親・教師・婦人代表・地区代表などの15名から構成され、奨学生の生活や契約の管理、学習の質の確保、地区レベルの連絡調整などを行っています。具体的には、奨学生・親や寄宿舎の家主との契約、経費の支給、教師との連携、奨学生の学業や出欠のフォロー（教師との定期的な確認や家庭訪問）、補習授業の実施、奨学生・親との定期ミーティングの実施、教育青年スポーツ省やケア・カンボジアへの報告などです。これまでの活動から、特に教師やコミュニティのネットワークを強化することが奨学生の出席率やパフォーマンスの改善につながることがわかりました。

現在、奨学生たちは……

奨学生はさまざまな活動を通じ、知識だけではなく、将来コミュニティで活動する際に役立つ実践的な技能を習得しています。また、村人に説明したり、話し合ったりすることで目上の人と話すことに慣れるとともに、下級生への見本となって活動ができていることで、確実に自信をつけてきています。コミュニティの人々も、女子教育に対する理解を深めるとともに、何よりも奨学生たちが生き生きと自信を持ってワークショップなどを運営する姿を頼もしく思っています。2006年10月に高校3年へと進級した奨学生たち。現在、今年8月に行われる卒業試験に向けて頑張っています。

＊この事業をご支援くださっているケア フレンズ 岡山とケア フレンズ・東京の皆様に心よりお礼申し上げます。

カンボジア発スマイル宅配便

Smile from Cambodia

カンボジアのプレイベン州において2004年2月より実施してきた「女子教育事業 サマキクマールⅡ」が2006年12月に終了しました。この事業では、女子教育に対する意識の低い貧困地域において、女子に対して奨学制度や識字教室を実施するとともに、親や教師、地域の人々を対象として女子教育に対する理解を高めるための意識向上ワークショップなどを行ってきました。ここでは、事業に参加したカンボジアのある教師からのメッセージを一つ、紹介します。

＊2006年11月30日にこの事業の終了報告会を開催しました。
詳細は、本誌3ページ目の「事務局からの報告」をご覧ください。

CAREが与えてくれた新しい知識や考え方

サマキクマール識字教室教師　Sear Sreyown

CAREがこの村で活動を始める前、私はごく普通の農民でした。あるとき、CAREが識字教室の教師を探していることを知り、以前から教師に関心のあった私は応募しました。希望がかなって教師となった私は、教授法についてのトレーニングを受け、現在、識字教室で教えるようになって1年経ちます。私は教えることが好きで、クラスには多くの生徒がいます。

私は以前、それほど思慮深くはありませんでした。教師となった今、何かを行うときは、教育者としてどうするべきか、よく考えてから行動するようになりました。また、青少年に関する教育・教授法や文学に関する知識などは日ごとに増えていきました。私の性格や立ち居振舞いも変わりました。

家族は私のことをよく理解し、励ましてくれます。教師になって、私の生活は変わりました。なぜなら、CAREからお給料をもらえるからです。以前は生計を農業に頼っていましたが、今では家族はより良い生活を送ることができています。

私が教えた生徒も大きく変わりました。読み書きができ、家庭内で問題が生じたときにはそれを解決できるようになりました。CAREが計画したカリキュラムは、家庭の問題・健康・農業など生活にとても役立つ内容です。私は教育はとても大切だと実感しています。教育を受ける機会がないと、生活は困難なものとなります。将来、私が子どもを持ったときは、家庭内にどんな障害があろうと、子どもに教育を受けさせようと思います。

教員トレーニングを終え、修了証を手にする筆者（左）。トレーナー（右）、プロジェクトマネージャーの遠藤 恵（右から二人目）と

CAREは教育の価値に対する村人の意識も変えてきました。これまで、村人の多くが子どもを学校に行かせず、働かせていました。CAREが村に確かな成果を残してくれたので、コミュニティは変化を遂げました。現在は、村の多くの人々が識字教室に子どもを通わせるようになりました。これまで生徒たちは文字を全く読むことさえできませんでしたが、今では読み書きや計算もでき、家族のためにその能力を使うことができるのです。

＊サマキクマールにおける識字教室の教師採用について

プロジェクトマネージャー　遠藤 恵

この事業では、すべての識字教室の教師をコミュニティから採用しています。コミュニティの人々を教師として採用するための条件は、資格の有無、教育を受けた期間や教育レベルではなく、コミュニティのために仕事をしたい、コミュニティ内の人々とよい関係にある、人の話を聞いてコミュニティの人々ときちんとコミュニケーションがとれる、識字教室の準備のための時間を確保できる、などです。教師の資格を持っている人も応募しましたが、前述のような条件で選ばれた人は、皆、教師の経験のない人ばかりでした。

3年の事業期間を通して見てみると、彼らの活動に対する熱意や責任感はすばらしく、サマキの識字教室がうまく進んだことに大きく関わっています。サマキだけでなく他のプロジェクトでも同様に、コミュニティ教師の評判は高く、元教師よりも経験のない人を採用するほうが、教え方の固定観念などがなく、生徒中心型の新しい教授法や双方向のコミュニケーションをすんなりと採り入れることができるようです。

世界のCARE

ここでは、世界中のCAREの活動地から、ストーリーとともにCAREの活動の一端をご紹介いたします。

©CARE/Josh Estey

新しい診療所の前に立ち、誇らしげな表情のSinartiさん。診療所はこの地域の人々に対するヘルスケアを提供しており、対象者の全員が津波の被災者

©CARE/Josh Estey

2006年7月のオープン以来、45人の健康な赤ん坊がSinartiさんによって取り上げられた。写真に写っている赤ん坊は、2006年11月14日に誕生

スマトラ沖津波から2年 ～インドネシア　アチェからのストーリー

守られた約束　Marge Tsitouris

2005年9月、私はスマトラ沖津波により被災した地域をいくつも見てまわりました。インドネシアのバンダ・アチェでは、仮設の母子健康センター、水の配給所、仮設住宅、住宅の建設現場を訪れました。私は、CAREで25年間以上、公衆衛生と災害支援の専門家として働いてきましたが、一瞬にして多くの人々のすべてを打ち砕いてしまった惨事に戦慄(りつ)が走りました。

ある光景が特に印象的でした。私たちはCAREと協働しているカナダの建設会社Planning Allianceの建築家と共に、診療所の跡地にいました。診療所は跡形もなく、建物の残骸(がい)であるコンクリートの瓦礫(がれき)と、診療所とCAREの名前が書かれた看板だけが残っていました。建築家のAnierin Smithは私たちに自信たっぷりに言いました。「4～6カ月後には、十分に機能的で、良い設備とスタッフのそろった診療所を見られますよ」。診療所を再び作ることができるというだけでなく、スタッフもそろえられるという確信を持っていることが印象に残りました。

それからちょうど1年後、私はバンダ・アチェに戻ってきました。再建をしている町中を車で通り過ぎながら、モスクが目に留まりました。そこはまさに、以前、診療所があった場所の目の前でした。そしてそこにはあったのです。海緑色とサンゴ色の2階建ての診療所が。まだ再建に向けて変化の途中にある周辺地域の中で、そこだけが輝くばかりに明るい場所でした。

私たちはドアのところで、担当の助産師のSinartiさんに会いました。彼女は、車のCAREのロゴを見ると、腕を大きく広げて「ようこそ」と言って微笑み、中を案内してくれました。その新しい診療所に私は感銘を受けました。明るく、風通しがよく、清潔で、穏やかなパステルカラー色のタイル張りの壁がまぶしく見えました。スタッフの一人が、新しい布にくるまれた生まれたばかりの赤ん坊を抱えていました。母親はすぐそばで横になり、疲れた様子で微笑んでいました。Sinartiさんは、彼女自身がこの建物の色を選んだのだと話しました。この診療所が病院のようではなく、誰かの家のように心地よい場所に見せたかったからです。

この公立の診療所は、出産前後の診療と母子への対応、健康指導と予防接種をこの地域の貧しい住民に対して優先的に行っています。CAREとアメリカのジョンズ・ホプキンス大学系列の国際的な保健医療団体であるJHPIEGOの支援を受け、設備や家具がよく整備されています。診療所は、Sinartiさんと2人のアシスタントによって運営されており、診療時間は設定されているものの、出産のためには24時間開かれており、助産師がいつも待機しています。

47歳のSinartiさんは、10年間、この診療所の敷地内で暮らしてきました。津波が襲ったとき、彼女はちょうど出産に立ち会っていて重症を負いました。その日、他の多くの人たちがそうだったように、その母親と赤ん坊は亡くなりました。

仕事について聞くと、彼女は大きな笑みを浮かべてこう言います。「これが私の仕事です。私は誰かの助けになりたい。それが私の誇りです」。彼女は一日に30～40人の妊婦を診ます。そして7月にこの診療所がオープンして以来、45人もの赤ん坊を取り上げてきました。

私は、診療所を出るとき、まだ生まれて2カ月の赤ん坊に会いました。母親と赤ん坊は元気で、健康でいるために彼らは診療所を頼りにしています。診療所の人々は、「生活は元に戻ってきている」という彼女の言葉と全く同じことを言っていました。この地域でこの診療所を再開させたことは、ここに住む女性たちにとってとても重要な出来事です。彼女たちは再び、必要なときにはそこに誰かがいてくれるという安らぎを得たのです。

CARE in *Indonesia*

2004年12月26日のスマトラ沖地震・津波により、インドネシアでは13万人以上の人が亡くなったほか、50万人が家族や家、生計の手段を失いました。CAREは、津波復興支援を通してこれまでにバンダ・アチェ、アチェ・ブサール、さらに2005年3月に生じた地震により被害を受けたシムル島を含め、35万人の人々を支援してきました。現在は、5年の長期計画に基づき、住居・インフラ・被災者の生計の立て直し、水と衛生・母子の健康などの状況改善に向けた施設・サービスの復旧と人々の意識向上、被災者の心のケア、将来の災害に備えるためのコミュニティの危機管理などにおいて支援を行い、包括的な取り組みを行っています。

特に、生命にかかわる健康面での状況改善は急務でした。アチェでは、津波以前から内戦により医療システムが損傷しており、インドネシアの他の地域よりも医療・保健施設へのアクセスが困難な状況で、栄養失調は深刻な問題でした。津波により400以上の医療・保健施設が破壊され、本来なら津波後の保健分野の再建を担うはずの医者や看護師なども亡くなってしまいました。

現在、CAREは、施設やサービスの立て直しおよび改善、医療・保健機関で働く人々の能力向上のための支援、家庭内で健康が管理できるよう健康に関する教育の提供、被災したコミュニティの医療へのアクセス拡大などの支援を行っています。CAREのヘルス・プログラムによって支援を受けた人の数はこれまでに35万人、CAREの支援による医療や栄養価の高い食事の配給を受けた女性と子どもの数は約25,000人に上ります。また、CAREの支援を受けた診療所は約270箇所、トレーニングを受けた医療・保健施設で働く人々の数は約780人になります。

CAREのヘルス・プログラムでは、特に母子の健康に重点を置いて実施してきました。コミュニティに密着した保健サービスの提供施設である「ポシャンドゥ」のサービス拡充のほか、医療・保健施設で働く人に対して、栄養失調の初期の兆候を発見し、治療するための方法についてトレーニングを実施しました。また、母親や子どもの世話をする人を対象として、栄養や感染症についての教育も行いました。2005年にCAREが支援を始めてから、シムル島では、対象地域のポシャンドゥを訪れる子どもの栄養失調の割合が、当初の21パーセントからほぼ半減しました。

私スタイルのCAREライフ

"Delicious" Volunteering!
～ボランティアは"おいしい"！

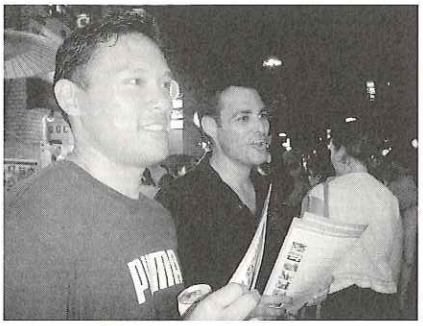
ケア・インターナショナル ジャパン
会員、ボランティア Eric Korpiel（エリック コーピエル）

こんにちは、エリックです！ CARE has been a great organization to volunteer with in both the U.S. and in Japan. CARE has an admirable aim and staff made me feel welcome. . . they even allow my strange sense of humor! At a festival when someone is looking at promotional material but seems to lose interest, I might yell "Oishiidesuyo!" to get their attention. Luckily, rather than thinking "あの外人はちょっとおかしくない？", Japanese staff laugh too . . . and some customers buy CARE products!

I first heard of CARE when the Asian Tsunami hit. Because I had lived almost two years in Southern Asia as a volunteer/backpacker, I felt close to the people of the region but thought, "What can I do?" After researching variousNGOs, I found CARE gives a very high percentage of collected money to programs in the field. I helped at three CARE events, collecting funds at Seattle Supersonics games. The fans appreciated us and I collected the most of my group! I felt I wasn't asking for a favor but was giving a chance to spend money on things more important than beer or hot dogs (food or a blanket for a child).

In Japan, CARE volunteering has been just as fun, but I do notice differences. For example, strangers in Japan are nicer to me than in my own country but when discussing charity, it can change. Japanese who are typically so receptive have sometimes been quite cold and uninterested in hearing about volunteer opportunities. I am so used to seeing Japanese be nice that I was initially quite disappointed. Then, I thought, why not have fun?!

At events, I sometimes say Japanese which I know is wrong like, "Please try our tako yaki!" when holding handicrafts. Or, I will use Tohoku dialect and yell "おばんでがす" when I usually say "いらっしゃいませ". I am not sure if this is the right approach, but it gets people to smile. . . and promotes awareness towards CARE and its activities. The Thai Festival, Azabu Fest, and Global Festa were great fun and I admire what CARE staff do. Thank you and . . . CAREのイベントに一緒に参加しましょう。とってもおいしいよ!!



CAREとして初めて参加した2006年8月の麻布十番納涼まつりにて。アメリカ人の友だちを誘って、CAREのパンフレットを持って呼びかけをしてくれました。迫力満点！

こんにちは、エリックです！CAREは、（私の母国の）アメリカ、そして日本でも、ボランティア活動をするのにすばらしい団体です。CAREは、賞賛に値する高い目標をもって活動しており、スタッフはボランティアをしようとする私を歓迎してくれます。私のちょっと変わったユーモアのセンスさえも受け入れてくれます。イベントでCAREの広報資料を見ていてあまり関心がなさそうな人に、私は注意を引こうと「おいしいですよ！」などと呼びかけます。幸いなことにスタッフは、「あの外人はちょっとおかしくない？」と思うどころか、一緒になって笑ってくれます。このように言うと、CAREグッズを買ってくれる人もいるのです！

私が初めてCAREのことを知ったのは、スマトラ沖津波が起きたときです。ボランティアやバックパッカーとして南アジアに約2年間住んでいたことがあり、その地域の人々に親しみを感じていた私は、自分に何ができるだろうと考えました。たくさんのNGO団体を調べたところ、CAREは集まったお金の大部分を支援活動に使っていることがわかりました。その後、私はCAREの3つのイベントを手伝い、シアトル・スーパーソニックス*の試合で募金活動を行いました。ファンたちはCAREの活動に共感してくれて、私はグループの中で最も多くのお金を集めたのです！そのとき感じたのは、私は支援をお願いしたというより、ビールやホットドック以上に大切なもの、つまり、困難な状況にある子どものための食べ物や毛布にお金を使う機会を人々に提供したのだ、ということです。

日本で行うCAREのボランティアは楽しさは同じですが、アメリカとの違いを感じます。例えば日本では、初めて会う人でも、私の母国アメリカよりも私に親切にしてくれます。しかし、チャリティーの話をするとそうではなくなります。一般的にとても理解のある日本の人たちが、ボランティア活動となると、時にはとてもそっけなく、関心を示しません。私は親切な日本人の姿を見ることに慣れていたので、最初はとてもがっかりしました。それから思ったのです。だったら、楽しくやればいいんじゃないかと。

イベントでは、私はわざと間違えて日本語を使うことがあります。例えば（タイなどの）民芸品を持ちながら、「たこ焼きはいかがですか？」と声をかけます。あるいは、本来「いらっしゃいませ」と言うべきところを、東北弁を使って「おばんでがす」と叫んだりします。こういったアプローチの仕方がよいのかわかりませんが、こうするとみんなにっこりしてくれて、CAREという団体とその活動に対して関心を引き出すことにもつながります。（これまでに参加した）タイ・フェスティバル、麻布十番納涼まつり、グローバルフェスタなどのイベントはとても楽しく、私はCAREスタッフの活動に感心しています。

それでは最後に……CAREのイベントに一緒に参加しましょう。とってもおいしいよ!!

*全米プロバスケットボール協会（NBA）のチーム

Ericさんのユーモアを交えた呼びかけに、思わず立ち止まる人は多い。立ち止まってくれたら、丁寧にCAREの活動について説明する。タイ・フェスティバルにて

ラマダンの苦と楽

ジャワ島地震緊急支援事業
プロジェクトマネージャー 熊澤 ゆり

観光客が集まるジョグジャカルタの繁華街マリオボーロ通り。CAREスタッフの買い物スポットの一つ

インドネシアの人口の87.1%はイスラム教徒であるが、彼らは義務の一つである断食の月、ラマダン（2006年は9月24日〜10月22日）は日の出から日没まで飲食や喫煙はもちろんのこと、人によっては唾（つば）を飲み込むことすらしないそうだ。これは自己鍛錬、自己反省と同時に貧しい人々の苦しみを経験し、他者への思いやりを育むためなのだという。

とはいえ日没近くには皆、余裕がなくなるのか、道路は帰路を急ぐ車でどことなく殺気立つ。大通り沿いには忙しい人たちを当て込んで、持ち帰りの軽食やスナック類を売る屋台も新たに登場する。日没後の食事は家族や友人たちと楽しむというのが習慣らしいが、夕食後もショッピングセンターなどに出かける人、モスクへお祈りに出かけるらしい人たちで町はなんだかお祭りの雰囲気である。

CAREのジョグジャ事務所では、11人のスタッフのうち8人がイスラム教徒、3人がキリスト教徒という構成だ。ラマダン中の昼食の時間、皆がどのように過ごすのだろうと疑問に思っていたが、クリスチャンの人たちは何の気兼ねもなくいつも通り事務所での出前あるいは近くの食堂で昼食をとる一方、ムスリムの人たちは事務所のお祈り用の部屋で順にお祈りをしたり、近くのモスクへ……と自然に別行動をとったのである。

非ムスリムの私は、精神修養とは程遠い断食への好奇心に、日頃の過食を反省してのダイエット……と、おおよそ支離滅裂な考えから断食をしてみた。もっとも日本の真夏のような気候の中、昼食だけを抜いたのだが。いざ始めてみると、日の出後に朝食をとり水分を補給しても、お昼過ぎには頭がボーっとして働かなくなった。いくら「郷に入っては郷に従え」でもこれでは仕事にならない。あわてて砂糖入りコーヒーを飲んだところ、頭がシャキッとした。結局、初日から水分と糖分を補給するという不完全な形での断食になった。ラマダン期間中は仕事が進まないのが常であるが、私から見ると、たとえ非能率でも日没まで仕事をし、一見平気な顔をしている人々は尊敬に値するのである。

何はともあれ、一日の仕事が終わる頃には飲食解禁の5時半になる。まずは皆で甘いシロップ入りの水で乾杯。誰かが買ってきた揚げ豆腐やテンペ（水煮の大豆を発酵させたもの）などをつまみ、お腹が落ち着いたところで帰宅、あるいは皆で夕食に出かけることになる。そのほとんどが単身赴任者で普段から一緒に出かけることの多いジョグジャチームだが、ラマダン中はこの頻度が増え、いつもより食事の場が盛り上がる。

効率優先の日本人にはラマダンは仕事が進まない憂うつな、あるいは諦めの一カ月である。しかし神の教えに従う人々にとっては、昼は苦難をともにし、夜はともに楽しむという聖なる月なのだろう。私のいい加減断食では精神の修養にはならなかったが、日没後の楽しみは大いに堪能させてもらった。被災地の人々にも楽しみのときがあることを願いつつ。

CAREのジョグジャカルタ事務所のジョグジャチームのメンバー（後列左から3番目が筆者）

CARE World

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol.5
2007年2月28日発行（季刊）
編集責任者：野口 千歳
編集：菅沼 みゆき、関口 弘美

財団法人
ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel：03-5950-1335
Fax：03-5950-1375
E-mail：info@careintjp.org
www.careintjp.org

CARE Notice Board

CAREマンスリー・ギビング・プログラム

途上国や紛争地域において最も困難な状況にある人々の自立を支援するCAREの活動は、中長期的な計画に基づき、実施されています。これらの多くの活動を安定的かつ効果的に進めるためには、皆様の継続的なご支援が必要です。

「CAREマンスリー・ギビング・プログラム」では、毎月1回、1000円単位でご自由にお決めいただいた定額寄付金をご指定の金融機関や郵便局の口座から自動的に引き落とすことで、継続的にCAREの活動をご支援いただけます（手数料は免除されます）。寄付額の変更やご寄付の停止も随時、可能ですので、安心してプログラムにご参加いただけます。

たとえば、**1日100円**のご寄付は、世界中にたくさんの笑顔を生みながら、1年間で次のように実を結びます。

●ベトナム　HIV/AIDS対策

移動・出稼ぎ労働者やコミュニティの人々**52人**に対して、HIV/AIDS予防のトレーニングを実施できます。

→ HIV/AIDS感染リスクを未然に減らし、人々の健康や生活を守ります。

→ HIV/AIDSに対する正確な知識不足による偏見や差別をなくします。

●カンボジア　女子教育

貧しい家庭の女子**34人**が、1年間学校に通うことができます。

→読み書きやライフスキルを身につけた女子は、自分の身を守り、未来を形づくることができます。

→保健衛生や栄養などの知識を得て、家庭やコミュニティに貢献する人材を育てます。

「CAREマンスリー・ギビング・プログラム」の詳細については、以下までお問い合わせください。

「CAREマンスリー・ギビング・プログラム」に関するお問い合わせ先
（財）ケア・インターナショナル ジャパン　マーケティング部
Tel: 03-5950-1335　E-mail: monthly@careintjp.org

＊皆様のご意見をお寄せください。

CARE Worldでは、皆様からのご意見、ご感想、ご要望を募集します。ご意見、感想などは、CARE World誌面上にてご紹介させていただきます。また、「CAREの活動のこの点が知りたい」「今後のCARE Worldでこういったことを取り上げてほしい」などのご要望については、次号以降の企画に順次、盛り込んでいきます。皆様と一緒に“CARE World”を広げていきたいと思います。

ご意見、ご感想、ご要望は、当財団事務局まで郵送、ファクス、メールのいずれかの方法でお送りください。お待ちしています！

CARE World

Vol. 4

ケア・インターナショナル ジャパン
Newsletter
October 2006

ケア・インターナショナルジャパンは、世界70カ国以上で貧困の根源の解決に取り組む国際協力NGO、CAREのメンバーです。CAREの活動は、世界中の33万人のサポーターに支えられています。

care®

CARE International Japan Newsletter 2006年10月号

CARE World Vol.4

Contents

page3 事務局からの報告

page5 ケア・インターナショナル ジャパン 2006年度事業計画

page8 フィールド最前線
「ジャワ地震被災地から」
プログラムコーディネーター 鈴木 幸子

page10 スリランカ「プランテーション居住者の生活改善事業を終えて」
ケア・スリランカ ヌワラエリヤ事務所駐在
プロジェクト・マネージャー 栗原 俊輔

page11 アフガニスタン「コミュニティ運営による初等教育プロジェクト」
2年度終了報告
プログラムコーディネーター 草川 町子

page12 「パキスタン地震緊急支援事業」終了報告
プログラムコーディネーター 草川 町子

page13 世界のCARE
CARE in Niger ～ニジェールからのストーリー

page14 私スタイルのCAREライフ
メールマガジン作成ボランティア 津田 幸子

page15 Our Supporters ～CAREサポーターからの声

page16 CARE Notice Board

表紙写真：ニジェール、マラディ地方にて。HIV/AIDSに対する知識と理解を促進するための活動に参加するCAREのマラディ・ユース・プロジェクトメンバーの若者たち
©2004 CARE/Maggie Steber

事務局からの報告

ケア・インターナショナルジャパン支援組織報告

6月27日(火)に、ケア フレンズ札幌の恒例の講演会・バザーが行われました。エジプト考古学者の吉村作治さんがユーモアを交え、また情熱的に、遺跡発掘の体験談をお話してくださいました。

7月2日(日)には、4月に発足したケア・サポーターズクラブ熊本の発足記念イベントが開催されました。会の立ち上げに尽力してくださったスリアワン洋子さんの講演会「私の人生：熊本からインドネシアに嫁いで26年」およびインドネシア製品のバザー。そして記念パーティーには、新会員の皆様、地元の政界・財界、CAREの支援組織の方々が大勢詰めかけ、今後の発展に乾杯しました。

この講演会を通して、ケア フレンズ札幌およびケア・サポーターズクラブ熊本から温かいご寄付をいただきました。紙面をお借りしてお礼申し上げます。

CSRシンポジウム開催「戦略的社会貢献とは何か？」

9月25日(月)、大手町サンケイプラザにおいて、CARE60周年記念 CSRシンポジウム「企業と社会の新しいパートナーシップに向けて—社会的ブランド価値を高めるための協働戦略とは」を開催しました。定員を上回る300名近い人々で会場は熱気に溢れ、企業経営者、経営企画担当者、CSR・社会貢献担当者、広報担当者、マーケティング担当者などを中心に、行政や国際機関、NGO、メディアに至るまで、本当に多岐にわたる業種・職種の皆さまにご参加いただき、関心の高さが伺えました。

コンプライアンスや環境対策など、これまでのリスク要因の軽減・防止を第1の目的とするCSRではなく、社会価値の創造や市場における差別化を目的としたより戦略的なCSR・企業の社会貢献活動に焦点を当て、一歩踏み込んだ形での提案や議論を展開。60周年を迎える節目に企画したこのシンポジウムを契機に、CAREは、企業のベストパートナーとして、新たな挑戦を始めます。

当日発表資料については、以下のウェブページよりダウンロードいただけます。
http://www.careintjp.org/csr0925_report.html

■**お知らせ**：当財団ホームページに、新たに「企業パートナーシップ」のページを創設しました。ぜひご覧ください。
http://www.careintjp.org/partnership/index.html

グローバルフェスタJAPAN2006に参加しました

9月30日(土)、10月1日(日)に日比谷公園で開催された、毎年恒例のNGOや国際機関が集まる一大イベント、グローバルフェスタ(旧 国際協力フェスティバル)に今年も参加しました。例年通り、ブースにて活動紹介やCAREグッズの販売を行ったほか、初めての試みとして、ワークショップにて「緊急支援の潮流ージャワ島地震緊急支援の現場から」と題して、報告を行いました。現地の被害状況や現場で何が求められているか、また、それに応えるためのCAREの支援活動についての報告に、多くの参加者から強い関心が寄せられました。両日とも、多くのCAREボランティアさんに支えられ、ブースを去年にも増して盛り上げることができました。ご協力いただきました皆さん、本当にありがとうございました。

レインボー事業終了について

全国の小中学校・団体の皆様からご協力をいただき、2000年度から6年間実施してきたカンボジアにおける「レインボー事業」が6月末日をもって終了いたしました。

この事業では、物資の不足しているカンダール州ルックダイク地区の27校に対して、日本で集めた文房具や画材を送り、現地で子どもと教師に対する絵のワークショップを開催することで、美術の授業のできる環境づくりを支援してきました。また、両国の子どもたちの絵の交換を通して、国際理解を促進してきました。事業終了にあたって6月に現地で実施した終了評価では、画材の補充と教師の技術向上が、現地での定期的な美術授業の実施につながったことが確認されました。また、ワークショップで学んだ描画が、社会問題啓発ポスターコンテストの開催や教師の教材作りに役立てられていることもわかりました。現地の学校と人々が、今後も工夫を凝らし、活動を発展させていくことを期待したいと思います。

これまで、文具や画材提供およびレインボー基金を通して、ご支援・ご協力いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

お知らせ

クレジットカードでもご寄付いただけるようになりました。

これまでの郵便振替に加えて、2006年10月からはクレジットカードでもご寄付いただけるようになりました。ご利用可能なクレジットカードは、VISA、MASTER、アメリカンエクスプレス、JCB、DCの5種類です。

クレジットカードによるご寄付をご希望の方は、当財団のホームページから直接お手続きいただくか、『クレジットカードによる寄付申込用紙』に必要事項をご記入のうえ、事務局までファクスまたは郵便でお送りください。申込用紙はホームページから直接印刷できますが、ご連絡いただければ、こちらからお送りいたします。

詳しくは、ホームページをご覧いただくか、直接、募金担当の荒井（E-mail：bokin@careintjp.org 電話：03-5950-1335）までお問い合わせください。

「CARE マンスリー・ギビング・プログラム」のご案内

このたびCARE60周年を記念して「CARE マンスリー・ギビング・プログラム」を創設。プログラムの開始に伴い、千円単位でご自由にお決めいただいた定額寄付金を毎月1回、ご指定の金融機関や郵便局の口座から自動的に引き落とすことで、継続的にCAREの活動を支援いただけるようになりました（手数料免除）。ぜひ、多くの皆さまのご参加をお願いいたします。

たとえば毎月3千円のご寄付は、世界中にたくさんの笑顔を生みながら、1年間でこんな風に実を結びます。

〔インドネシア〕緊急支援

自然災害発生直後から1年間にわたり、被災者429人分の水浄化剤を届けることができます。

〔カンボジア〕女子教育

貧しい家庭の女子34人が1年間学校に通うことができます。

〔ベトナム〕HIV/AIDS対策

移動・出稼ぎ労働者やコミュニティの人々52人に対し、HIV/AIDS予防のトレーニングを実施できます。

プログラムの詳細や参加のお申し込みについては、ニューレター同封のお手紙もしくは専用リーフレットをご参照いただくか、直接事務局までお問い合わせください。

Our Supporters での会員および寄付金協力者のお名前掲載について

長年にわたり、当財団のニュースレターにおいて、会員および寄付金協力者のお名前を掲載させていただいてきましたが、事務局には、名前の掲載を控えてほしいといったご要望が個別に寄せられることがありました。そこで、前号のニュースレター送付時に同封させていただいたアンケートにおいて、掲載の要・不要について皆様からご意見をいただいた結果、今月号以降のニュースレターでは、会員および寄付金協力者のお名前の掲載はしない方向にさせていただくことになりました。ぜひ掲載してほしい、といった考えをお持ちの方も多くいらっしゃることと思いますが、どうかご理解・ご了承いただけましたら幸いです。なお、掲載を取り止めたことによって、会員の方やご寄付をいただいた方に対する事務局からの謝意は変わるものではありません。今後とも、引き続き、CAREの活動を温かく支えていただきたくお願い申し上げます。

なお今後は、アンケートなどに記載していただいた皆様からのメッセージを随時、Our Supportersに掲載させていただきたく思います（掲載についてご承認いただいた場合のみです）。本誌では15ページ目に掲載していますので、ぜひご覧ください。また、皆様からのご意見・ご感想などをお寄せいただきますよう、よろしくお願いいたします。

ケア・インターナショナル ジャパン
2006年度 事業計画

ビジョン

ケア・インターナショナル ジャパンは、誰もが互いを尊重し、人間らしく生きる平和な世界を目指しています。

ミッション

ケア・インターナショナル ジャパンは、コミュニティの人々と共に貧困を生み出す根源の解決に取り組みます。

基本方針

ケア・インターナショナル ジャパンは、アジアにおいて最も不利な立場にいる人々が自立発展するための支援を行います。

近年、今まで比較的安定している、または安全であると思われたアジアの途上国において、政権の崩壊や民族間の対立により治安・秩序が悪化してきています。これらの問題は、恒常的な貧困や人的・自然災害と密接に関連していますが、国際協力に携わる機関や団体の支援活動が制限され、支援が最も必要とされているところにいき届かないという状況を生んでいます。

このような中、国際協力NGOとして活動を効果的に継続していき、貧困や紛争の根源的な解決に貢献するためには、高度の専門性、安全対策などを含む組織の運営体制、他機関・団体との協力、そして何よりも長年にわたって築かれた現地政府や関連機関、NGOなどとの信頼関係が鍵となります。

支援活動の概要

本年度は、現在、事業を実施している国（アフガニスタン、カンボジア、スリランカ、ベトナム）での継続事業のほか、インドネシア、東ティモールおよびアジアの複数国にて新規事業の立ち上げを目指します。その際、ジャパン・プラットフォームなどに積極的に参加し、緊急・復興支援活動の拡大を目指すとともに、平和構築などの分野の事業についても検討します。また、アドボカシー、市民や学生などを対象にした国際理解教育、国際協力関係者のための研修事業に加え、調査事業なども実施していきます。

活動計画

1．開発支援事業

①女子教育事業　サマキクマールII

対象地域：カンボジア
（プレイベン州ピムチョア地区）
対 象 者：退学の可能性が高い小学校高学年女子と就学していない6歳～18歳の女子約1400名およびコミュニティ住民
実施期間：2004年2月～2006年12月
（2年10カ月間）
主支援者：国際協力機構（JICA）

この事業は、貧困や住民の女子教育への理解不足が原因で女子の就学率、進学率が低い地域において、女子が教育を受ける機会が増えるよう、家庭、コミュニティ、学校の環境を改善していくことを目標としています。

本年度は最終年度として、昨年度に引き続き、コミュニティの人々、学校、地区行政関係者（地区教育局、州教育局など）、女子学生たちが中心となって活動を行います。学校とコミュニティにおいて、高学年の女子・教員・母親会・関係者に対して教育の重要性についての意識向上活動を実施するほか、貧困家庭の女子を支援するための奨学制度、コミュニティにおける基礎識字およびポスト識字教育などを継続します。また、コミュニティの人々、学校、地区行政関係者が連携を深めるための活動も引き続き行います。

②コミュニティのための人材育成事業（女子教育奨学制度事業II）

対象地域：カンボジア
（カンダール州ルックダイク地区）
対 象 者：女子教育奨学制度事業において中学課程を修了し、高校に進学した奨学生
実施期間：2004年10月～2007年9月（3年間）
主支援者：ケア フレンズ岡山、ケア フレンズ・東京

この事業は、前事業の女子教育奨学制度事業で高校に進学した奨学生が、コミュニティの発展に役立つ知識・技能を身につけることを目標としています。2004年9月に終了した前事業をさらに発展させ、奨学生たちの高校課程の修了を支援すると同時に、彼女たちがコミュニティに必要な知識・技能を習得し、それをコミュニティの人々と共有できるよう、活動を行っています。

本年度は、昨年度に引き続き、奨学生に対する経費補助や補習授業の提供、奨学生・親・コミュニティの人々に対するジェンダー意識向上ワークショップの実施、地区奨学制度運営委員会の組織化と事業運営などを行います。また、奨学生が習得した知識・技

能を社会に還元できるよう、奨学生たちによる、ほかの生徒やコミュニティの人々を対象とした、ジェンダー意識向上ワークショップなどのコミュニティ活動を実施します。さらに、奨学生に対して、これらのコミュニティ活動に必要な技能訓練を行います。

③スマトラ沖津波復興支援 子どもの心のケアプロジェクト

対象地域：スリランカ（南部州ハンバントタ県アンバラントタ、ティッサマハラマ、スーリヤウェワ）
対 象 者：アンバラントタ、ティッサマハラマ、スーリヤウェワの津波で直接的・間接的な被害を受け、子どもの心理的・精神的な問題が深刻であると判断された6村の約600世帯3000人
実施期間：2005年4月～2008年3月（3年間）
主支援者：日産自動車株式会社、一般寄付、学校

2004年のスマトラ沖津波により被災した子どもたちの心の傷が癒され、心身ともに健全な生活を送ることができるようになることを目標としています。

事業開始後１年を経て、現地の状況が大きく変化していることを受け、子どもが暮らすコミュニティにおいて、親や教師をはじめとする周辺の人々が、子どもを支援する体制をつくることの必要性が認識されました（これに伴い、事業名を変更しました）。また、当初単年度予算で700万円の規模で実施する予定でしたが、日産自動車からの寄付額が確定したことで、合計約2500万円の規模で実施することになりました。さらに、上記の内容から中長期的なニーズの確認ができたことで、当初２年間の実施期間を3年に延長します。

本年度は、拡大した対象地域にて、コミュニティの子どもの心理的・精神的ニーズに着目し、活動を継続します。

④コミュニティ運営による初等教育プロジェクト

対象地域：アフガニスタン（中央部および南東部の遠隔農村地域）
対 象 者：中央部および南東部９州の遠隔農村地域の教員、コミュニティの人々と生徒３０３８名および地方教育行政機関
実施期間：2004年7月～2007年5月（3年間）
主支援者：ケア フレンズ岡山（山陽放送株式会社）

この事業は、教員・コミュニティ・地方教育行政機関のキャパシティを高め、コミュニティ運営による学校での活動を通して、遠隔コミュニティの生徒が質の高い初等教育を受けられるようにすることを目標としています。

本年度は、昨年度に引き続き、教師20名に対する実地研修および教材開発研修を実施します。また、村の教育委員会メンバーを対象として、女子が教育を受ける権利やコミュニティ学校の運営などに関する研修を行います。生徒3120名に対する教材の提供も継続します。

当初、２年間で計画されたこの事業は、現地のニーズに合わせ、さらに１年間継続して行います。

⑤カントー橋建設にかかるHIV/AIDS予防事業

対象地域：ベトナム（カントー県カントー市）
対 象 者：カントー橋建設に関わる移動建設労働者と周辺コミュニティの人々
実施期間：2006年2月～2008年1月（2年間）
主支援者：大成建設・鹿島建設・新日本製鐵JV

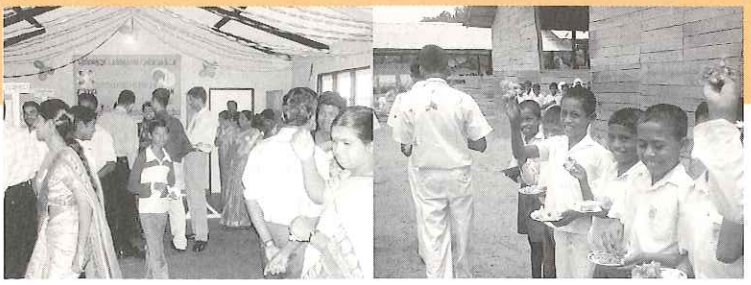
この事業は、特別円借款事業として実施されているカントー橋建設にともない、建設に関わる移動建設労働者と周辺コミュニティの人々の性感染症（STD）およびHIV/AIDS感染のリスクを減少させることを目標としています。

本年度は、昨年度に引き続き、HIV/AIDSおよびSTD感染防止および治療についての啓発活動や情報提供を行います。また、ヘルスワーカーに対するカウンセリング・スキル向上のための研修やHIV/AIDS感染防止・治療・ケアサービスにおいて、企業とコミュニティ間の連携を強化するための研修も実施します。また、教育グループを形成し、教育者の養成も継続して実施します。さらに、これらの活動に加えて、コンドーム配布場所を増やし、正しい使用方法に関する情報提供や性交渉方法のトレーニングを実施します。

⑥紅茶農園内住民組織の運営能力向上プロジェクト

対象地域：スリランカ（中央州およびウバ州にある15の紅茶農園）
対 象 者：紅茶農園における住民組織約100グループ（4500人）
＊間接的には、農園居住者約40,000人も含む。
実施期間：2006年7月～2008年6月（2年間）
主支援者：国際協力機構（JICA）

2006年５月まで実施した「プランテーション居住者の生活改善事業」に続く新プロジェクトです。農園内で行き届いていない公共サービスを紅茶農園住民が活用できるよう、住民組織の運営能力を向上させること、および農園外部からの社会・行政サービス提供団体（地方行政、銀行、地元のNGOなど）との連携を定期化することにより、社会保障システムを強化することを目標としています。



本年度は、前事業にて設立されたインフォメーション・センターを有効活用するとともに、住民組織である参加型チームを対象としたトレーニングや、居住者の話し合いから計画されたミニプロジェクトを実施します。また、農園内外の社会・行政サービス団体に対して、農園内でのサービス提供のための働きかけを行います。

2. 緊急・復興支援事業

①ジャワ島地震緊急支援 水と衛生プロジェクト

対象地域：インドネシア（中部ジャワ州クラテン県およびジョグジャカルタ特別州スレマン県）
対 象 者：2006年5月にインドネシアのジャワ島ジョグジャカルタ付近で発生した地震で被災した約10,000世帯、50,000人
実施期間：2006年7月～2006年8月（2カ月間）
主支援者：ジャパン・プラットフォーム（JPF）、一般寄付

この事業は、被災者が安全な飲料水を確保することができ、水因性の病気（伝染病や下痢症）のまん延を防止することを目標としています。

活動内容としては、約20,000本（20,000世帯分）の水浄化液や防水シート3000枚の配布、基礎調査および下痢症や水質についての調査・モニタリングなどを行います。また、現地パートナーNGO、コミュニティのリーダー、ボランティアに対して、パートナーシップ、水浄化液の使用方法、衛生的な生活習慣などについての各種トレーニングを行います。

＊本年度事業計画書の作成後、7月～8月にわたり、上記の「水と衛生プロジェクト」は実施されました。現在は、以下の「保健衛生改善プロジェクト」を実施中です。

②ジャワ島地震復興支援 保健衛生改善プロジェクト

対象地域：インドネシア（中部ジャワ州クラテン県およびジョグジャカルタ特別州スレマン県）
対 象 者：2006年5月にインドネシアのジャワ島ジョグジャカルタ付近で発生した地震で被災した約32,500世帯、約160,000人
実施期間：2006年8月～2006年11月（3カ月間）
主支援者：ジャパン・プラットフォーム（JPF）、一般寄付

この事業では、「ジャワ島地震緊急支援 水と衛生プロジェクト」に引き続き、実施する復興支援事業です。被災者が保健衛生に関する知識を得ることによって、健康で衛生的な生活環境を回復し、伝染病や下痢症などのまん延を予防することを目標としています。

活動内容としては、防水シート約2200枚の配布、コミュニティの保健衛生ボランティア100名に対するトレーニング、ラジオ放送による保健衛生啓発キャンペーンなどを行います。また、基礎調査および下痢症や水質についての調査・モニタリングを継続して実施します。

フィールド最前線

ジャワ地震被災地から

プログラムコーディネーター
鈴木 幸子

ケア・インターナショナル ジャパンは、ジャワ地震緊急支援活動として、ジャパン・プラットフォームからの事業支援金およびスターバックス コーヒー ジャパン 株式会社をはじめ協賛企業、また、個人の皆様からのご寄付をいただき、2006年7月よりジャワ島ジョグジャカルタにて支援事業を本格的に開始し、現在も活動を継続しています。

※現在、皆様にご支援のご協力をお願いしていますジャワ地震緊急募金の受付は、2006年12月末をもって終了する予定です。

ジョグジャカルタから被災地へ向かう幹線道路を車で走っていると、今年5月に地震があったということはあまり感じられません。しかし、農村へ向かう脇道に一歩入ると、その地震が与えた被害の大きさを目の当たりにすることになります。

今年5月にジャワ島にて発生したマグニチュード6.3の地震。亡くなった人の数は約5800人、負傷者は約38,000人と報告されています。全半壊した住居は50万世帯以上にも上ります。時が経つにつれて、世界の人々の関心が薄れていく中、被災地では、現在も地震直後とほとんど変わらない状況で日々を送る人々が数多くいます。

震災直後と変わらない生活

インドネシア・アチェ州における2004年12月のスマトラ沖津波・地震後の復興支援の過程で、仮設住宅建設に関するさまざまな問題が生じた反省から、今回のジャワ地震に際しては、政府の方針により仮設住宅は建設されていません。インドネシア政府は、当初、全半壊した世帯に対して15～40万円相当の補償を約束したものの、現時点では補償の目処は立っていません。人々は、壊れた家の一部にNGOなどから配布される防水シートをかぶせるか、テントを張って生活しています。一時的な間に合わせの処置ですが、家を建て直すお金もない、特に貧困層の人々は、恐らく数年間このような住まいで風雨をしのがなければならないでしょう。先の見えない状態が続く中、住民の間で大規模な混乱やいざこざなどは今のところ起きていませんが、人々に会えば、ためいきとともに聞かれるのが、「住居がね…」という言葉なのです。

コミュニティが中心となった支援活動

CAREでは、地震直後から現地のパートナーNGOと協働して、4万世帯、20万人の人々に対して、水浄化剤、水の保存容器、防水シート、毛布、敷布団などの配布を行ってきました。一言に配布といっても、その過程には多くの人々の関わりがあります。物資を必要としている人々に確実に配布するため活躍しているのが、ジャワに強力な地盤を持つパートナーNGOのスタッフやボランティアです。CAREの配布ポイントは300箇所にも上りますが、彼らがコミュニティを走り回って各コミュニティの代表者たちと調整します。それぞれの世帯の被災の度合いや経済状況を考慮し、支援を必要としている世帯のリスト、また、配布のスケジュールが作成されます。ジャワの人々は、コミュニティの代表者たちが決定したことには納得する傾向があるので、NGOとして支援活動を行う際にも、現地の意思決定の方法を尊重しながら活動を行っていくことが重要なのです。

現地にて活動を行うケア・インターナショナル ジャパン、プログラムコーディネーターの鈴木幸子（右）

長期的な視野に立った保健分野での支援が必要

水の浄化剤配布時には、デモンストレーションを行い、使用方法や注意点などを住民に説明します。

パッケージには、イラストを多く用いてわかりやすく説明した使用書がつけられます。しかし、配布のみでなく、その後のケアも大切です。浄化剤は6月から配布を行っていますが、使用状況について調査を行った結果、浄化剤によって水が安全なものになっても、水を入れる容器が不衛生であったり、手を洗う習慣が身についていないなど、浄化剤の配布のみでは不十分であることがわかりました。8月からは、住民に衛生面での知識を定着させるため、保健・衛生推進に焦点をあてた活動を行っています。CAREでは、保健ボランティアに対して衛生知識普及法のトレーニングを実施しました。これらの保健ボランティアが中心となって破傷風や下痢、デング熱などこの地域にてよく見られる病気予防のキャンペーンを開催し、住民に正しい衛生知識を定着させるための情報普及を行っていきます。

ジャワにおけるCAREの活動は、迅速かつ効率的な支援活動を行うために、現地の資源・人材・方法を用いるもので、これは、スマトラ沖津波の経験から得た教訓がもととなっています。過去の経験に基づき、よりよい支援活動の可能性に挑むこと—これが、CAREの支援に対する基本姿勢なのです。

「日本の市民からジョグジャの人々へ…」「よみがえれジョグジャ！」と書かれた横断幕をつけた運搬トラック

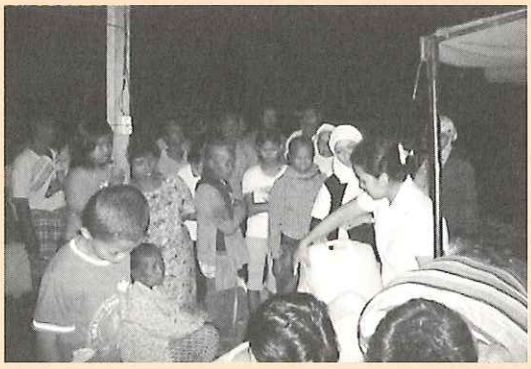
ジャワ通信

2006年8月1日

支援活動は夜まで続く

今日はアイル・ラフマット（水浄化剤）を含む物資の配布活動に同行した。この日、向かった村は、アスファルト舗装が途絶えてからさらに数キロ奥へ入った遠隔地にある。配布活動と一口に言っても、物資を必要としている人々の手に「無事に」届くまでには多くの調整活動が必要となる。

インドネシアでは、市町村、そしてその下位にあたる集落までしっかりした行政区分があり、支援活動も村長・集落長と、「何時・誰に・何を」配布するか調整した上で行われる。このような調整にはそれ相応の時間がかかるが、緊急段階にあっても省くことのできないプロセスである。集落長の一人が私に語ったことがとても印象に残っている。「支援をいただけることには感謝しているが、支援によって集落の和に亀裂が入ることは避けなければならない」。CAREを含む援助機関の財政・人材的キャパシティは限られており、優先順位（子ども・女性・高齢者など脆弱な人々）をつけて支援活動をしなければならない。外部者であるCAREが、村長や集落長の合意なしに被災世帯に直接物資を配布していたら、コミュニティの間に支援をめぐる争いを引き起こしていたかもしれない。ジャワをはじめインドネシアの多くの地域では、多数決ではなく参加者全員が納得するまで話し合いを重ねた上で物事を決定することが多い。コミュニティの行政が機能している状況の中では、コミュニティ住民自身が合意形成を行うことにより、支援物資の振り分けなど、住民が納得する形で進めることにより、争いの種を最小化することになる。ジャワ語の表現に "Mangan ora mangan kumpul." というものがあり、意訳すると「一緒にいられれば飢えても」といった意味で、コミュニティのまとまりを重要視するジャワ人気質を表す表現とされている。コミュニティの調和を重視することはジャワに来る前から知識として知っていたが、この日、身をもって経験した。

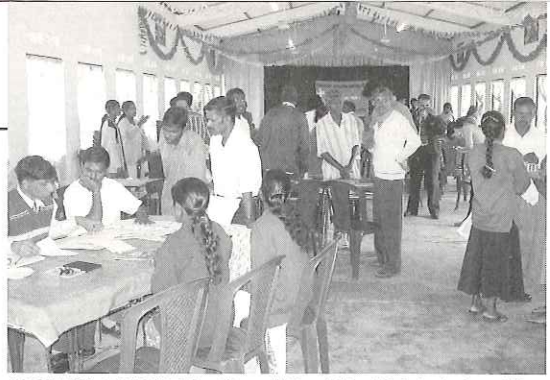

支援活動に昼夜はない。日が暮れてからも物資の配布は続く

CAREでは1日1000～1500世帯に物資を配布することを目標にしている。最終便の物資運搬トラックが村に到着した頃にはとっぷり日も暮れていた。配布活動にはCAREスタッフをはじめ、パートナーNGOのスタッフ、ボランティアなど多くの人が関わっている。朝8時頃から夜8時、場合によっては9時10時まで働かなければならない重労働である。しかし、彼らはこのような支援活動に関わっていることを誇りに思いながら不平も言わず精一杯働く。支援を必要としている人々に迅速かつ確実に支援を届けるため。

スリランカ

プランテーション居住者の生活改善事業（TEAプロジェクト）を終えて

ケア・スリランカ ヌワラエリヤ事務所駐在
プロジェクト・マネージャー　栗原 俊輔



出生証明書の発行巡回サービスの様子。多数の住民がこれまで所持していなかった出生証明書を手にした

2003年5月より3年間実施した「プランテーション居住者の生活改善事業（TEAプロジェクト）」は、今年5月7日をもって終了した。気がつけば事業終了、と思うほどの速さで過ぎた事業期間であったが、振り返れば思い出すことに枚挙にいとまがないほど充実した3年間であったと思う。

事業背景にあるさまざまな要因

プランテーションとは単一作物農業のことを指し、スリランカではイギリス植民地時代に導入された。このとき労働力とされたのが南インドのタミル人である。彼らはイギリス人によってスリランカ（当時のイギリス領セイロン）へ安価な労働力として連れてこられ、農園経営者にすべてを統括管理されて暮らしていた。イギリスからの独立後、イギリス人が占めていた経営側の役職は、主にスリランカの多数派であるシンハラ人の上流階級へと移ったが、農園に代々住み、農園内労働者として働くタミル系住民にとっては、支配層が変わっただけで、その労働・居住環境はプランテーションが導入された19世紀当時から何も変わっていない。

現在も彼らの子孫が労働者として同じプランテーション農園に住み続けている。生まれてくる子どもも中学を卒業すると同時に労働者として農園で働くという繰り返しが行われている。農園経営者の管理下にある生活という要因に地理的要因も加わり、農園内の生活は外部の地域社会から完全に隔絶したものとなっている。農園内には、中学までの教育機関や診療所など生活に必要な施設は整っているものの、今日のスリランカ国内の水準と比べてかなり見劣りがし、改修もあまり行われていない。また、日々の生活も単純労働の繰り返しで、さしたる娯楽もない中、男女を問わず飲酒に走る傾向があり、せっかく得た収入もその費用に消える家庭も多い。アルコール中毒は、農園コミュニティでは深刻な問題となっている。

前途多難な事業開始

以上のような背景のもと、この事業では、紅茶プランテーション農園に居住するタミル系住民の社会生活改善を目的として活動を行った。まず、インフォメーション・センターを各農園に設置して地方行政員と農園住民の定期的な接点を作り、住民の情報・社会サービスへのアクセスを可能にすること、さらに、農園経営者側をも巻き込み、円滑な公共サービスの提供および経営者自ら生活改善に取り組むことを目指して活動を開始した。しかし、「生活改善」と言葉で言うのは簡単であるが、その歴史的背景から、スリランカのプランテーション農園住民への事業実施は、開始当初から前途多難であった。

元来、農園経営者が農園内の職住を統括管理する制度に慣れきった社会であり、農園経営者側および農園住民の双方に対して事業への理解を求めることは想像以上に労力の要る作業であった。経営者側へは、プロジェクト・マネージャーをはじめ、チーム・リーダーなど総動員で対象となる３つのプランテーション会社本部まで足を運び、事業の必要性を根気よく説明した。最終的に、現地で活動を開始するための覚書を交わしたのが、事業開始からすでに半年近く経ってしまったプランテーション会社もあった。また、各農園ではフィールド・スタッフが各居住地をまわり、住民に対してこの事業の趣旨を説明し、活動を開始することを知らせていったが、そもそもこのような事業の必要性を感じない住民も少なからず見られ、行政サービスの重要性やアルコール中毒の深刻さを説いて、理解を求める必要があった。

事業進行とともに得られた住民からの理解、経営者側の協力

さまざまな紆余曲折を経て、最終的には対象とする15のすべての農園にインフォメーション・センターが開設され、地方行政官が定期的にセンターを巡回し、情報・サービスを提供することが可能になった。またセンターでは、住民が、以前はほとんど得ることのできなかった政府・民間・NGOによるサービス情報についても知ることができるようになり、それらの活動を進めていく過程で、住民および農園経営者側からの理解と協力が少しずつ得られるようになった。また、出生証明書の発行巡回サービスや各農園でのミニ・プロジェクト実施の際には、住民の自主的な取り組みと経営者側からの金銭的および物資面でのサポートが得られ、無事に遂行することができた。

農園経営者およびプランテーション会社からの協力体制の変化には目を見張るものがあった。当初はこのような事業に対して懐疑的である、または、紅茶の収穫作業に及ぼす悪影響を心配する経営者やプランテーション会社も多かった。しかし、インフォメーション・センターなど「目に見える」成果が増えていくにつれて、この事業が農園コミュニティ全体に良い影響を与え、経営者側も住民の生活が改善されることで農園運営がスムーズになるなど、経営者側の利点も理解されてきた。

農園住民のさらなる生活改善、また、生活向上を目指して

これらの成果をもとに、第二期として2006年7月より新しい事業を開始した。新事業「紅茶農園内住民組織の運営能力向上プロジェクト」では、既存の農園内住民組織を巻き込み、住民および農園経営者側にCAREがこれまで行ってきた役割を少しずつ渡していき、CAREが去った後も自主的に継続できる体制作りを目指していく。

アフガニスタン

「コミュニティ運営による初等教育プロジェクト」2年度終了報告

プログラムコーディネーター　草川 町子

アフガニスタンでは、1970年代後半から23年間にもわたって内戦が繰り返され、多くの死傷者、難民、避難民を生み出しました。2001年のタリバン政権崩壊と、新政府の樹立後、国の復興が進められていますが、長年の混乱によるつめあとは今なお深く、インフラ、社会システム双方の復興を阻んでいます。

教育は復興の要の一つですが、制度的な回復は不十分なままです。タリバン政権時代、女子は学校教育の機会を与えられませんでした。現在、学校の門戸は再び女子にも開かれ、就学を希望する児童数は急激に増えたにもかかわらず、遠隔農村地域では十分な数の公立学校が整備されていず、また教師不足も深刻です。

このような状況を改善するため、ケア・アフガニスタンは、1998年に「コミュニティ運営による初等教育プロジェクト(COPE)」を立ち上げました。この事業では、遠隔農村地域においてコミュニティにより運営される学校を設立し、管理・運営に当たる人々の能力強化と環境整備を行っています。また、事業全体を通して、女子が男子と同等の機会を与えられるよう配慮しています。

活動実績・成果

ケア・インターナショナル ジャパン(以下、CIJ)が実施してきた活動の内容は2つの要素に集約できます。一つは教材や文具の提供です。昨年度は生徒および教師に対して筆記用具を提供しましたが、今年度はカリキュラムの変更に伴い、新しい教科書と教材を対象地区の生徒に配布することができました。もう一つはコミュニティの学校を実際に管理・運営する地域の人々(VECメンバー)や教師に対するサポートを行い、教育の機会と質の改善を側面から支える活動です。VECメンバーに対しては、男女平等や子どもと女性の権利といったアフガニスタンにおいては意識が低い問題についてワークショップを行い、その上で彼らの学校運営スキルの向上を目指しました。一方、教師に対しては、実地研修、再教育、学級運営などの研修ワークショップを行ってきました。これはタリバン時代に教職から離れていた人たちの復職と、現職教師のスキル向上を目的とするものです。これらの支援により、このような研修の機会を得た教師の数は2年間で185人に上ります。研修内容の効果的な活用は、CAREの教員研修スタッフによるモニタリングによって確認されており、その教育の質の高さも、97%の女子、81%の男子が修了試験に合格していることが証明していると言えるでしょう。

教育制度の復興に向けて

COPEの学校に通う子どもの数は年々増えており、今年度だけでもCIJの支援対象校で615人、事業全体では9078人の新入生を迎えましたが、COPE学校の生徒数を増やすことだけがこの事業の目的ではありません。各地域で政府の進めている公立学校運営システムの復旧に伴い、コミュニティの学校を公教育へ統合していくことを最終目標としています。既にこの1年だけでも、41校が教育省地方教育行政機関に委譲されました。さらに、CAREの役目は学校と生徒の委譲では終わりません。同時に政府教育機関の能力向上を支え、彼らが将来的に地方の教育に関する責任を負うことができるようサポートを続けていきます。今後、COPEプロジェクトは、ケア・アフガニスタンによって2010年まで続けられる予定であり、CIJも支援を継続する予定です。

※この事業は、2004年からこの活動を支えてきた山陽放送株式会社による「救え、戦場の子どもたち」キャンペーンでの募金によるご寄付を、ケア フレンズ岡山を通していただいたことにより実現しました。この度、第2年度の活動終了にあたり、ご協力いただいた関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

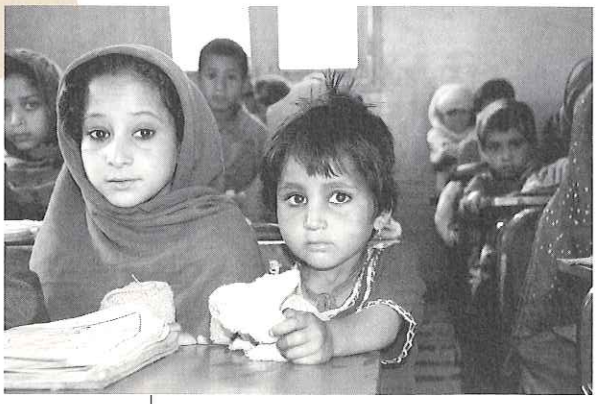
The Story of Rena ～　Renaの場合

アフガニスタンの伝統的習慣の中には、女子が教育を受け続ける際にさまざまな障壁が存在します。CAREスタッフとVEC（村教育委員会）メンバーの協力により、これらを克服したケースをご紹介します。

アフガニスタン東部Khost州にあるコミュニティによって運営されている学校に通うRenaは12歳の女の子。4歳で父を戦争で亡くした彼女は、今は母と二人の姉と共に住んでいます。4年生の彼女はとても優秀な生徒ですが、昨年、一時退学を余儀なくされる事件がありました。アフガニスタンでは、伝統的に叔父が姪の成長に責任を持ちます。Renaには3人の叔父がいますが、7カ月前、叔父の一人が、思春期に差しかかる女子が家の外に出て男子たちと就学するのは「一家の不名誉」であるとの理由でRena を退学させたのです。CAREのスタッフは、学校によるモニタリングリポートでこの問題を知り、RenaのコミュニティのVECにこの話を持ちかけました。VECメンバーは、村議会のメンバーとRenaの母親と話し合い、Renaに小学校教育を修了させるよう、叔父を説得しました。こうして彼女は、4年次を再度、履修するために学校に戻ることができました。最近のインタビューでRenaは、教育の重要性と将来の夢についてこう語っています。「教育を受けた女性は、家族を清潔で健康に保つことができます。私は大学に行って、将来は医者か教師になりたいと思います」。

「パキスタン地震緊急支援事業」終了報告

プログラムコーディネーター　草川 町子



ケア・インターナショナル ジャパン（以下、CIJ）は、地震発生当日から情報収集活動およびケア・パキスタンとの連絡・協力を始め、2005年10月11日より緊急募金協力を呼びかけてきました。ケア・パキスタンは地震発生直後に被害の特に大きかった地域に拠点を開設し、援助物資（避難用シェルター、ビニールシート、毛布など）の支給、病院からあふれた人々の救援活動など、多岐にわたる緊急支援活動を開始しました。CIJに寄せられたご寄付はこの活動の一環として、被災地の中でも最も辺境地帯である北西辺境州バタグラム地区・アライ渓谷における活動に充てられました。この支援により行われた活動は以下の通りです。

①アライ渓谷の村落でのテントの支給（235世帯分・約1645人分）
②アライ渓谷の学校に対するテントの支給（10校に32張・868人が使用）
③現地活動用の車両の提供（四輪駆動車・1台）

被災者へのテントの支給

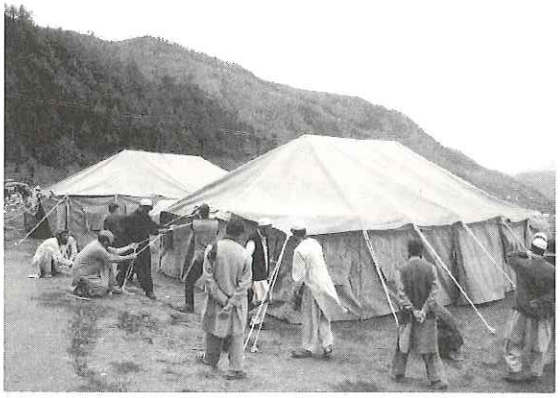
アライ渓谷は標高1300ｍを超える高地にあり、冬には夜間気温が氷点下に達します。しかも、険しい山岳地であることから緊急支援活動は困難を極めました。CAREでは最も被害が大きかった世帯が優先的に支援を受けられるよう、各村において厳格な世帯調査を行った上でテントの支給を実施、特に男性世帯主を失った家庭など、経済的に困難な状況に置かれている家庭が優先されました。

学校用テントの支給

ケア・パキスタンでは、地震で崩壊した学校の再開に向けての活動も実施しました。アライ渓谷の全24校に対して、校舎の再建や教育機材の提供、校庭や衛生設備の整備を行いました。CIJからの支援もこの一部に活用され、バティーラ高校をはじめとする地域の10校の女子中等学校へ、仮設教室用のテントを支給しました。地理的にも首都から遠く離れたアライ渓谷はパキスタンの中でも保守的な地域で、文化的・伝統的に男子に対する教育が常に優先され、10歳以上の女子が学校に通うことに理解のない保護者が多いのが現状です。そのような状況下で、女子校にも男子校と同じようにテントを配布できたのは、地震のために女子教育が遅れを取ることのないよう、CAREのスタッフが地域の人々を説得したことによるものです。

現地活動用車両の提供

スタッフ用の車両は、当初はレンタルで賄ってきましたが、専用車を購入することで、より効率的に活動できるようになりました。道路の整備されていない辺境地域において、四輪駆動車は重要な足となります。地すべりなどの二次災害が発生した時に速やかな対応ができるようになるなど、活動のキャパシティを向上することができました。



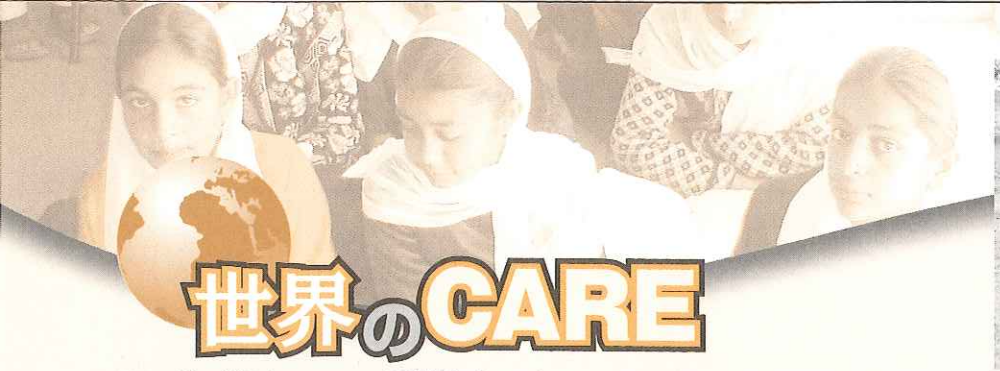
バティーラにて学校用テントを建てるCAREスタッフとコミュニティの人々

■基本情報

地震発生：2005年10月8日
被害状況：死者8万6千人。特に被害の大きかった北部の2州(北西辺境州、アザド・ジャミュ・カシミール州)では、地震発生直後、300万人もの人々が生命の危機にさらされる状況にあった。
活動期間：2005年10月～2006年6月
寄付総額：898件/9,819,772円
（2006年3月31日募金受付終了）

復興に向けて

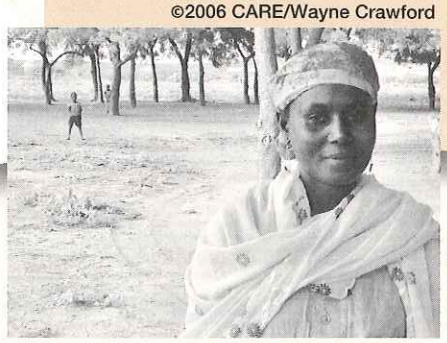
地震発生から一年。辺境地帯というアクセスの悪さ、土砂崩れの発生など今も多くの困難がこの地域の復興を阻んでいますが、そのような状況でも人々は徐々に生活を立て直しています。恒久住宅の数はまだ全体から見ると10%程度に過ぎませんが、多くの人がテント生活から仮設住宅へと移りつつあります。地震直後に配布された家族用のテントはこのような仮設住宅の壁面補強に用途を変えながら、今も多くの人々に利用されています。このような状況の変化を受けて、ケア・パキスタンでは、緊急支援から復興支援へと活動の重点を移しており、インフラの整備だけでなく、地域の住民組織の機能の回復も支援しています。完全復興への道のりはまだまだ遠いと思われますが、CAREは今後も、最も不利な立場に置かれている被災者に対する支援を続けていきます。地震発生直後からCIJを通してご支援いただいた皆様に心からお礼申し上げます。



世界のCARE

ここでは、世界中のCAREの活動地から、ストーリーとともにCAREの活動の一端をご紹介いたします。

©2006 CARE/Wayne Crawford



ニジェールの女性にAIDSの危険性について説くため、またHIV/AIDSにつきまとうイメージを減らすため、CAREと共に活動するDjama

CARE in *Niger*

ニジェールは、世界でもとても貧しい国の1つで、国民の60%以上の人が1日2ドル以下で生活しています。平均寿命はわずか46歳、妊産婦および乳幼児死亡率はアフリカ内でも高く、安全な水へのアクセスが確保できているのは国民の半分以下、読み書きができるのは約15%の人々のみです。

CAREは、ニジェールで活動する最大の国際協力NGOです。昨年は、ニジェールにおける食糧供給の3分の1がCAREによってなされました。CAREは、ニジェールにおいて30年にわたり、慢性的貧困を解決するための長期的視野に立った活動を行っています。現在、HIV/AIDS、保健、ジェンダー平等および女性の自立、収入向上、農村開発、市民社会との連携強化など、さまざまな分野においてプロジェクトを展開しています。これらのプロジェクトは、ニジェールの5つの地域にて、約85万人の人々が健康で安定した生活を得られるよう支援することを目的としています。

Mata Masu Dubara (MMD)は、西アフリカ言語で「動き出す女性たち」を意味します。これは、定期的に一定金額を貯蓄する女性から構成される、コミュニティに根ざした貯蓄と融資を行うためのグループで、CAREがニジェール全土においてその組織化を支援しました。このグループの女性たちは、お互いに蓄えられた食糧を分け合い、平時からの貯蓄に頼ることもできるので、食糧危機に対応することができます。現在、ニジェールの約172,000人の女性たちがMMDのメンバーです。また、MMDメンバーは、CAREが食糧の配布を行うにあたり、地域で最も支援を必要としている人々の情報を提供するなど、MMDメンバー以外の人々を助ける活動においても中心的な役割を担っています。

～ニジェールからのストーリー

輝かしい事例：ニジェールでHIVと共に生きる

Djama Amadouは、力強く明るい精神と、誰とでもすぐに打ち解けあえる優しい笑顔を持った女性です。「私の使命は、ニジェール全土の女性に、HIV/AIDSに冒される可能性があることを知らせることです」。

6年前、Djamaの夫は隣国のコートジボワールでより高収入の職を探すために、ニジェールを発ちました。慢性的貧困や経済の縮小、再発する食糧危機のため、国内労働者の多くが海外で一時的に働かなければなりません。Djamaの住むWandale村だけで成人男性人口の約90%が村を離れ、ナイジェリアやコートジボワールで出稼ぎ労働を探しています。

「夫は、やせ細って、戻ってきました。彼は医者の診断を拒みました。夫は約3年、家を離れ、帰郷して半年以内に死にました。なんて悲しかったでしょう！夫の死後、書類を調べているうち、診療所が出した診断結果を見つけました。夫はAIDSを発症しており、彼はそのことをずっと前から知っていたのです」。そして、彼女自身も以前から体調が悪いと感じていました。「夫が私に病気を移したかもしれないということには思いも及びませんでした。その後、体の痛みが増し、擦り傷も増えました。しばらくすると、自分の子どもを抱く力さえ失いました」。

Djamaは、自分も感染しているかもしれないという事実に向き合うことができませんでした。動く気力もないまま2週間以上をベッドで過ごした彼女は、ついに地元の診療所を訪ねました。「結果は陽性。すぐに死ぬのだと思いました。私は子どものことを考えると怖くなります。私も親戚も貧しく、誰も3人の子どもたちを食べさせる余裕がありません。あるとき、移動式診療所が抗レトロウイルス薬を提供していることを知りました。私にとっては非常に高額でしたが、仕事を増やし、子どもたちの食べる量を変えずに自分の分を減らすことで薬を購入することができました」。

しばらくして、彼女は回復しました。「私は今後もHIV/AIDSと共に生きていくでしょう。しかし、治療を受ければ、健康を保つことができる。もし私を道端で見かけたら、私がHIV保持者であることに誰も気づかないでしょう」。彼女の回復に触発された診療所のスタッフらは、彼女にビデオ出演を依頼しました。そのビデオは、HIVを保持していても、きちんと治療を受ければ、普通の健康な生活を送ることができることを他の女性に知ってもらうためのものです。彼女はビデオ出演を引き受けました。

その頃、彼女は再婚の準備を進めていました。「私がHIV保持者であることを彼に告げると、彼はそれでも結婚したいと言ってくれました。しかし彼は、彼の家族には私の病気のことを隠したがりました。ある日、私が出演したビデオがテレビで放映されるのを彼の姉妹が見たことで噂が広がり、彼の家族全員が、夫と私、私たちの子どもと縁を切りました。夫はこれに耐えることができず、私たちは離婚しました。夫は私と子どもを見捨てました。その時、私はすべてを失ったのです」。

Djamaはその後、CAREと地元のパートナー団体がHIV/AIDSに対する取り組みを行っていることを知りました。現在、DjamaはCAREの実施するMMDプロジェクトで活動しています。毎月、彼女と3人のHIV陽性のニジェール人女性がニジェール全土の女性グループを訪問し、自分たちの体験談を伝えることで、HIV/AIDSにつきまとうイメージをなくすための活動を行っています。「村のある住民が困難に陥っていると、その近隣住民が助けようとしますが、HIV保持者となると事態は異なります。もし体調が悪くなると、皆が避けるようになります。この問題を解決する唯一の方法が教育です。病気について正しく理解し、病気を持つ家族や近隣住民を安全に助け、サポートすることができることを知れば、皆、正しいことを行い始めるでしょう」とDjamaは言います。「私たちが活動するMMDグループは、HIV/AIDSに感染した村の住民だけを対象とする特別な穀物銀行を作りました」。Wandale村のMMDメンバーであり、コミュニティボランティアのIze Abdou氏は言います。「体調が悪く畑作業ができないとき、銀行は食糧を提供します。また、売り上げ利益は治療費に充てられます」。

Djamaは、HIV/AIDSについて教育していることを誇りに思っています。「HIVのために多くのことを失いました。しかし、それ以上のものを得ました。私たちは、病気につきまとうイメージや無知と闘うため、共に活動しなければなりません。しかし、もっと重要なことは、互いに助け合おうとし、助けや支援を必要とする自分以外の女性や母親に背を向けないことです」。

私スタイルのCAREライフ

メルマガ・ボランティアを続けながら

メールマガジン作成ボランティア　津田 幸子

原稿を執筆するときは、校正会議の前に送る最初の原稿を書くまでがいちばん大変です。原稿を書くのは主に土日で、平日はテーマに関係ある資料を探したり、参考にする本に目を通したり、情報収集にあてています。時には、なかなか資料が見つからなくて、締切りに間に合わせようと完成度の低い原稿を送ってしまうこともあります。そんな原稿を送ったときの校正会議では、皆にびしびし指摘されて、何度も書き直すこともあります。

私が国際協力に関心を持ったのは、中学生の頃に途上国の小さな子どもをTVで見てからです。お腹がぽっこり出て手足がガリガリの子どもたちの生々しい映像をみたときはとってもショックでした。まだ国際協力という言葉も知りませんでしたが、自分とあまりに境遇が違う子どもたちを思って泣いたのを覚えています。ただ、今の私は、その日と同じ映像を見たとしてももう泣くことはできないと思うのです。でも冷たい大人になってしまったわけではなく、「かわいそう」でただ泣いた頃とは違って、「受け入れる」ことができるようになったのかな、と思います。受け入れるなんてかっこつけた言い方ですが、右から左の情報ではなく、自分の頭と心の中に入れてこれからもずっと忘れないで関心を持ち続けようと決めました。

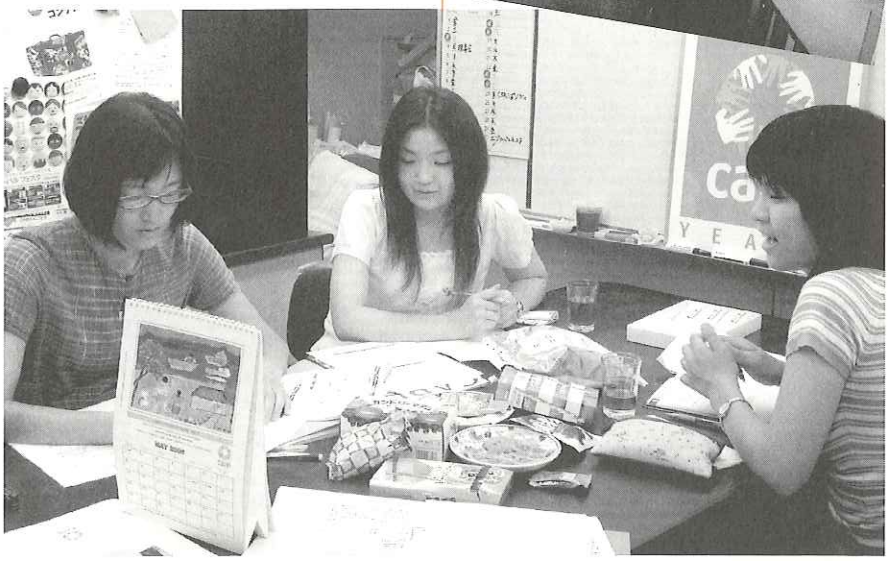
国際協力関連の情報にアンテナをはりめぐらせて、自分にもできることをいつか行動に移したいと考えていました。社会人になって1年近く経った頃、ある雑誌を購入して目に留まったのがCAREでのボランティアでした。最初はCAREには同年代の社会人のボランティアはいませんでしたが、スタッフの方や学生さんのボランティア仲間と色々と話し合うのが楽しくて、CAREのメルマガチームが大好きになりました。しばらくすると、同年代の社会人の方も次々とメルマガに参加してくれるようになりました。

私がメルマガチームに参加して3年半が過ぎ、執筆させていただいた回数も30回を超えました。最初はボランティアこそ自分にぴったりの国際協力だと思っていたのですが、今では私にできる国際協力の最初の一歩なのかなと思っています。CAREでのメルマガ執筆を通して貧困や格差について自分なりに考えたり、スタッフの方や仲間と話し合っていくうちに、そう思えるようになりました。まだまだ何年も先になりそうですが、ボランティアの次には何ができるのか、少しずつ意識してゆきたいです。私はボランティアしてみたいと思ってから実際に始めるまでに長い時間がかかってしまいましたが、その分、自分のペースでじっくり続けていこうと思っています。これからも、皆で一緒に「読むだけで国際協力」となるメルマガを発信してゆきます！

CAREメールマガジン「読むだけで国際協力」制作工程

①月初めに企画会議（メルマガのテーマ・内容と原稿担当者を決定）
→約2週間後に原稿締切り
②校正会議（メンバー間で原稿内容を検討）
→原稿担当者は指摘された点を修正
③月末に最終編集
④翌月の1日に配信
上記2回の会議以外はメーリングリストでのやりとり。CAREのメルマガの特徴は、創刊号から現在まで、スタッフではなく、ボランティアが原稿執筆していること。メルマガチームは社会人が多いこともあり、会議開始は19時以降。メルマガとは直接関係のない国際協力の話や雑談で盛り上がり、終わるのが22時を過ぎてしまうことも。

※メールマガジン「読むだけで国際協力」の購読申込みはホームページから。



ただいまメルマガ会議中。お菓子を食べながらリラックスした雰囲気の中、雑談の中からよいテーマがひらめくこともしばしば。

Our Supporters

～CAREサポーターからの声

ここでは、CARE World Vol. 2 とVol. 3の送付時に同封したアンケートにお寄せいただいた皆様からのご意見、ご感想を紹介いたします。また今後は、アンケートのみでなく、お手紙やメールにていただいたコメントなどについても、掲載についてご承認いただいた場合には随時、紹介させていただきたく思います。同じCAREという団体を支援いただく皆様それぞれの思いを掲載させていただくことで、ニュースレター『CARE World』を通して皆がつながっていかれたら、と思います。

ニュースには流れないような地域の抱える問題、状況をまず知ることが大切で、このニュースレターで少しずつ理解していくことができました。今後ももっとそのような記事があるとうれしいです。

パレスチナ、イラク、アフガニスタンなどの現状（ほんとうの姿）が知りたい。南米、アフリカなどもときどきは載せていただければ幸甚です。新聞・ラジオ・テレビなどであまり報道されないような裏記事も載せていただければなおさらのこと。

（私スタイルのCAREライフについて）ボランティアで関わっている方の想いが伝わるものはとてもいいですね。ぜひ継続してください。

世界の困っている人たちに少しでもお役に立てば、と孫におこづかいを渡すつもりでほんのわずかですが、協力させていただいています。

出版物の内容が充実してきたことは、その活動を広く知ってもらう上で大変よいことだと思います。出版コスト、編集労力がかさみますが、頑張ってください。

＊「今後、掲載してほしい記事」としては、以下のようなものがありました。

- 子どもたちの状況、生活など。
- 60年前にCAREパッケージを受け取った方による記事
- 支援先の生活の現状の具体的な報告（統計・写真などが入ったもの）
- ケア・インターナショナル ジャパン以外のメンバー国の活動状況（例えば、ケアUSAやケア・フランスなど）

ケア・インターナショナル ジャパンが広く世界で貴重な活動を続けていること、そして、その価値を学ぶことができ、改めて私たちの地道な活動の重要性、必要性を再認識することができました。

昨日、受け取り、読ませていただきました。今まではCAREさんの活動についてほとんど何も知らなかったのですが、今回、募金の使い道など丁寧に伝えてくださって細やかなケアに思わず読みながら涙がでてきました。ありがとうございます。これからもひとりでも多くの方たちに伝わるように私も微力ながらお手伝いさせてください。

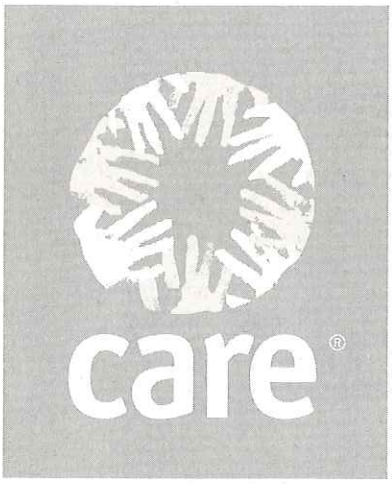
アンケートにご協力いただきました皆様、ありがとうございました。
皆様からのご意見について一つずつ検討し、今後の企画に反映させていただきたく思います。

CARE World

ケア・インターナショナル ジャパン
ニュースレター
CARE World Vol.4
2006年10月31日発行（季刊）
編集責任者：野口 千歳
編集：菅沼 みゆき

財団法人
ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0032
東京都豊島区雑司ヶ谷2-3-2
Tel：03-5950-1335
Fax：03-5950-1375
E-mail：info@careintjp.org
www.careintjp.org

SIXTY



YEARS

CARE Notice Board

CARE設立60周年記念ディナー
11月18日（土） 18:30～

今年、CAREは、設立60周年を迎えます。

世界における貧困や社会的不公正と闘うCAREの活動に対し、さまざまな形で協力をしてくださった皆様、11月18日のCARE設立60周年記念ディナーにぜひご参加ください。

帝国ホテルでのディナー、世界的に活躍中のソプラノ歌手中丸三千繪さんのオペラコンサート、そして素敵なギフトが当たるラッフル。60周年のテーマは「女性のチカラ」です。安倍洋子氏、加藤睦子氏、横田笑氏の長年のCAREへのご貢献を称えた表彰式も行われます。

皆様お誘いあわせの上、ぜひご来場ください。

＊このチャリティー・ディナーの収益は、途上国の人々の自立を支援するCAREの活動に役立てられます。

記

■日時：2006年11月18日（土） 18：30～21：00（会場18：00）
■場所：帝国ホテル 3 階 富士の間
■後援：フランス大使館、スリランカ大使館、アメリカ大使館（申請中）
■特別協賛：株式会社VSN
■協賛：セイコーインスツル株式会社
　　ティファニー・アンド・カンパニー・ジャパン・インク
■協力：スターバックス コーヒー ジャパン 株式会社

ご連絡先
(財)ケア・インターナショナル ジャパン
常務理事・事務局長　野口千歳
Tel:03-5950-1335
Fax:03-5950-1375

●中丸三千繪氏プロフィール

桐朋学園大学声科卒業、同大学研究科終了。在学中よりニューヨーク、ザルツブルグに留学。1986年小澤征爾指揮の新日本フィルのR.シュトラウス「エレクトラ」のタイトルロールで日本デビュー。1990年の第4回「マリア・カラス国際声楽コンクール」（RAIイタリア国営放送主催）の優勝を機に、一躍、欧米各国から出演依頼が殺到。ミラノ・スカラ座をはじめとする各地の名門歌劇場で主役をつとめる。1998年からは日本各地で小児がんの子どもを支援するチャリティコンサートも行っている。

＊皆様のご意見をお寄せください。

CARE Worldでは、皆様からのご意見、ご感想、ご要望を募集します。ご意見、ご感想などは、CARE World 誌面上にてご紹介させていただきます。また、「CAREの活動のこの点が知りたい」「今後のCARE Worldでこういったことを取り上げてほしい」などのご要望については、次号以降の企画に順次、盛り込んでいきます。皆様と一緒に“CARE World”を広げていきたいと思います。

ご意見、ご感想、ご要望は、当財団事務局まで郵送、ファクス、メールのいずれかの方法でお送りください。お待ちしています！